

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Sketches of Hagiography : From the Descent of Shenrab Mibo to the Birth of his Sons

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 津曲, 真一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00003926">https://doi.org/10.15021/00003926</a>

## 聖伝の素描

—ボン教の聖者シェンラブ・ミボの降臨から子息の誕生まで—

津 曲 真 一\*

Sketches of Hagiography: From the Descent of *Shenrab Mibo*  
to the Birth of his Sons

Shin'ichi Tsumagari

シェンラブ・ミボは、古代チベットの精神伝統を現在に伝えるボン教の最も重要な聖者とみなされている。ボン教徒にとってシェンラブ・ミボは、人々を輪廻から解脱へと導く慈悲深い導師であり、その生涯を描いた聖伝や宗教画は、彼らの崇拜対象であると同時に、信仰生活の規範ともなっている。

本稿は、中国青海省のボン教寺院、ボンギャ寺で実施された調査を通じて蒐集された51枚の宗教画のうち、トンパ・シェンラブ・ミボチエの生涯を描いた6枚の宗教画（タンカ）について、ボン教の代表的な聖典の一つである『セルミク』を所依とし、その図像の記述・解説を試みるものである。シェンラブの生涯を描いた伝記、及び、彼の生涯を描いたタンカに関する研究は未だ僅少であり、ボンギャ寺に所蔵されるシェンラブ伝のタンカが紹介されるのも今回が初めてとなる。そのため、本研究はボン教のタンカに関する図像学上の意義を有するとともに、今後のシェンラブ伝研究にも着実な基礎を与えるものになると思われる。

*Shenrab Mibo* is regarded as the most sacred person by the attendants of Bon religion that carry on the tradition of the ancient spirituality in Tibet. For devout Bonist, he is the compassionate and universal guide on the path to liberation from the cycle of birth and death. Both of his biography and paintings that depict his life history are not only the object of worship but also a model of perfection inspiring the faithful, even today.

We have collected fifty-one religious paintings (*Thangkas*) of the Bon religion through the research of the *Bon brGya* Monastery in Qinghai, China.

---

\*四天王寺大学非常勤講師

**Key Words** : Tibet, Bon Religion, gShen-rab-mi-bo, gZer-mig, Thangka

**キーワード** : チベット, ボン教, シェンラブ・ミボ, セルミク, 宗教画

The aim of this paper is the attempt to explain six pictures of those paintings that illustrate Shenrab's life history on the basis of descriptions in *gZer Mig*, one of the principal scriptures in Bon tradition. The present study should be significant for Iconographical Study of religious paintings in Bon tradition, and provide a solid basis for studies in the biographies of *Shenrab Mibo* because it is the first time these paintings are introduced.

はじめに	4 王妃グリーンマの誘惑
1 トンバ・シェンラブ・ミボチェ	4.1 付属文書と和訳
2 資料の特徴と研究方法	4.2 図像詳解
1 降臨と誕生	4.2.1 ダンワ・イリン王の訪問
1.1 付属文書と和訳	4.2.2 意の少年の布教
1.2 図像詳解	4.2.3 王妃の誘惑
1.2.1 降 臨	4.2.4 鍛冶屋と金の延べ棒
1.2.2 誕 生	4.2.5 グリンマの救済
1.2.3 即 位	5 結 婚
1.2.4 園に遊ぶ	5.1 付属文書と和訳
2 “永遠のボン”の弘通	5.2 図像詳解
2.1 付属文書と和訳	5.2.1 シェンラブの結婚
2.2 図像詳解	5.2.2 結婚の祝福
2.2.1 神々と菩薩の降臨	6 シェンラブの子供たち
2.2.2 サラ王の国	6.1 付属文書と和訳
2.2.3 六道を生きる有情の教化	6.2 図像詳解
3 トブ・トゥーデの救済	6.2.1 トブ・ブムサンの誕生
3.1 付属文書と和訳	6.2.1 チェーブ・ティシェーの誕生
3.2 図像詳解	おわりに
3.2.1 青い龍馬にのった少年	補 遺
3.2.2 偽りの帰依	註
3.2.3 紛争の調停	
3.2.4 トブ・ドゥーデの救済	

## はじめに

本稿は、1998–2002年、青海省黄南藏族自治州同仁県にあるボン教寺院、ボンギャ寺〔bon brgya dgon pa〕で実施された調査を通じて蒐集された51枚の宗教画（以下、タンカ）のうち、ボン教の祖師として崇拝されるトンパ・シェンラブ・ミボチェ〔ston pa gshen rab(s) mi bo che〕の生涯を描いた6枚のタンカ（民博所蔵資料 No. H0218468～H0218472, H226060）について、その図像の記述・解説を試みるものである。一般に藏語でタンカと言えば、宇宙観を表わす曼荼羅に具体的尊格を当て嵌めた図像を指し、特に仏教の場合はほぼ例外なくそのような構造を示す。しかし、ボン教のタンカの場合は必ずしもそうではなく、ほぼ半数がトンパ・シェンラブ・ミボチェの生涯を描いた所謂「絵解き」となっている。仏教の場合は尊像の描き方を詳細に規定した図像学が高度に発達し、図像儀軌書のなかに尊格やその持ち物・印契などが細かく規定されているが、ボン教図像の場合にはそうした儀軌書がなく、図像の配置やその意味に関する記述は、高僧の史伝や膨大な大藏経論部（カテン）文献群の中に散在している。そのため、これまでボン教図像の体系的な研究は、仏教のそれに比べて大きな遅れをとってきたというのが実状である。

しかし今回、筆者がトンパ・シェンラブ・ミボチェの伝記を研究する過程で、ボンギャ寺に所蔵されるシェンラブを描いたタンカが、ボン教徒が継承する最も重要な聖典の一つである『セルミク』（〔*mdo gzer mig*〕後述）と呼ばれる典籍に叙述されるシェンラブ伝と極めて近い内容を持っているということが分かった。そこで本稿では、ボンギャ寺が所蔵する6枚のタンカについて、『セルミク』にみられるシェンラブ伝の叙述を辿りながら、各図像の記述・解説を試みることにする。尚、シェンラブの生涯を描いたタンカの図像については、これまでにベル・クヴェルネ（Per Kvaerne）<sup>1)</sup> やサムテン・カルメイ（Samten G. Karmey）による研究<sup>2)</sup> があるが、未だその数は僅少であり、またボンギャ寺に所蔵されるシェンラブ伝のタンカが紹介されるのも今回が初めてとなるため、本研究はボン教のタンカに関する図像学研究上の意義を有するとともに、今後のシェンラブ伝研究にも着実な基礎を与えるものになると思われる。

ボン教は嘗て西チベットを支配したとされるシャンシュン〔zhang zhung〕王国で興隆した宗教伝統であり、同国が7世紀中葉に古代チベット王国（吐蕃）によって併合された後、チベットの精神伝統を支える主要な宗教伝統となった。しかし8世紀後半に仏教の国教化を目論んだ、時のチベット王による政治的策略により、チベットの

宗教界がインド仏教へ急速に傾倒し始めると、ボン教を信奉する人々の多くは中央チベットを追われることになる。しかしその後も、ボン教はチベット人たちの信仰生活の中に深く根を下ろし続け、11世紀後半には、組織宗教として新たな展開を始めた。そして、チベット仏教諸派による弾圧や国外勢力による軍事的抑圧を受けながらも、自らの伝統を守り続け、19世紀後半にはチベットのカム地方で起こった超宗派運動とともに再びチベット宗教界にプレゼンスを示すことになる。その後は、多数派である仏教勢力の背後に隠れながらも、チベット古来の精神伝統を脈々と伝え、独自の発展を遂げた。現在、ボン教を信奉する人々は、チベット自治区全域、四川省、甘肅省、青海省、雲南省、ヒマラヤ南麓などの広範囲に分布している。

ボンギャ寺〔bon brgya sman ri bshad sgrub smin grol gling〕は、青海省黄南藏族自治州人民政府の所在地である同仁県の隆務（ロンウォ〔rong bo〕）の30 kmほど南方にある、ボンギャ谷の上手に位置するボン教寺院である。伝承によれば、9世紀中葉に活躍した第42代チベット王、ウドウムツェン〔u dum btsan, r. 836–842〕の時代、仏教勢力による迫害を逃れて、中央チベットから3人のボン教徒が、現在の同仁県を含むレプコン<sup>3)</sup>地方に到った。ボン教を伝承する六大氏族<sup>4)</sup>の一つであるキュン〔khyung〕氏の三兄弟であった彼らは、現在のボンギャ寺の周辺にしばらく居を据え、この地にボン教を広める素地を用意した。同じ頃、インロン・リンチェン〔dbyings klong rin chen〕というボン教徒が同じくレプコンに到り、そこでタクゲー・ギャルモ・ジヤム〔stag ga'i rgyal mo byams〕という女性と結婚した。彼らの子孫は、ボンギャ谷の村に定住し、現在のボンギャ寺の近郊に宗教施設を建てた。この施設に集まった人々が、後のボンギャ寺に繋がる最初の宗教共同体であったとされる。この宗教共同体は長い歴史を持ち、多くの高名な密教者を輩出したことで知られるが、ボン教教理を体系的に修学する僧院という形を持つようになったのは、20世紀初頭に活躍したボンギャ・ユンドウンブンツォク〔bon brgya g.yung drung phun tshogs〕の登場以降のことである。この人物は、当時のレプコンの政治的・宗教的指導者と結んだことにより、繁栄と発展の時期を享受した。ボンギャ寺はその後、青海北西部を支配した軍閥、馬步芳（1903–1975）による2度の攻撃を受け一時衰退するが、その後、この寺院に滞在したボン教の高僧、キャントゥル・ルントク・ケルサンギャツォ〔skyang sprul lung rtogs skal bzang rgya mtsho〕の布教活動が功を奏し、レプコン全域の宗教界にその名を知られるようになった。更に1980年には、ボンギャ寺を訪れたパンチェンラマ10世が、無量光の仏像一体と、寺院の修復を目的とした1800元の寄付金を進呈したとされる。現在、ボンギャ寺は、ボン教の教理の修得と瞑想生活に従事する80人

ほどの僧侶を擁し、レブコンにおけるボン教伝統の中心的存在となっている<sup>5)</sup>。

## 1 トンパ・シェンラブ・ミボチェ

ボン教の最も偉大な導師はトンパ・シェンラブ・ミボチェ——教師、最高のシェン、偉大なる人の王<sup>6)</sup>（以下、シェンラブ）——である。欧米の学者の中には、この人物をボン教の「開祖」（founder）とする者がいるが、これは少なくとも敬虔なボン教徒の意見に即したものではない。彼らの意見に従えば、シェンラブは遠い昔に人間として生まれ、多くの有情を解脱へと導いた偉大な教師であったが、彼は人間の世界でボン教を説いた8番目の導師であったとされる<sup>7)</sup>。こうした意見を裏付けるように、後にみる『セルミク』等のシェンラブ伝には、シェンラブよりも先に人間界でボンの教えを説いたとされる兄の逸話や、シェンラブがその生涯において様々なボン教徒〔bon po〕たちと出会い、彼らを教化したとされる物語が見える。従って、シェンラブはボン教の開祖ではなく、むしろボン教の改革者と見なしたほうが適切であるかもしれない。今日のボン教徒たちは、シェンラブによって説かれたボン教を“永遠のボン”〔g.yung drung bon〕と呼び、それ以前のボン教と区別している。

シェンラブがどのくらいの時代に活躍した人物だったのか、そもそも実在の人物であったのかということは、全く謎に包まれている。ボン教徒の伝説によれば、シェンラブは今からおよそ一万八千年前<sup>8)</sup>に、オルモルンリン〔'ol mo lung ring〕という聖地で誕生した。今日のボン教徒はオルモルンリンをタジク〔stag gzic〕——ペルシャに比定される<sup>9)</sup>——に存在した聖地としているが、シャンシュンに実在した地名であるとする見方<sup>10)</sup>もあり、その正確な所在地は未だ定かでない。さらに、ボン教の典籍の中で“シェンの1年”〔gshen lo gcig〕と言え、これは人間の時間に換算しておよそ100年に相当するともされる<sup>11)</sup>ことから、事情はますます混乱することになる。こうした混乱は仏教学者たちのシェンラブ観にも反映したようであり、例えば18世紀に活躍したチベットの仏教僧トゥカン・チューキニマ〔thu'u bkwan chos kyi nyi ma, 1731–1802〕は、シェンラブをとうとう“老子”〔lo'u kyun〕と同一人物であると認定してしまったほどである<sup>12)</sup>。とはいえ、こうして歪められたシェンラブ像が仏教徒による一方的な偏見に基づくものであるということはできない。何故なら、シェンラブ伝には彼が中国の“幻術の王、コンツェ”〔kong tse 'phrul gyi rgyal bo〕、即ち、“孔子”の娘と婚姻したという逸話<sup>13)</sup>が見られるほか、ボン教の真理観には中国の宗教伝統に見られる自然観・真理観との顕著な親和性が認められるからである。しかし、ボン教徒たちはこうした意見を受け容れておらず、例えばボン教の学僧シャルザ・タシ

ギェンツェン〔shar rdza bkra shis rgyal mtshan, 1859–1935〕は自著『善説宝蔵』〔*legs bshad rin po bhe'i gter mdzod*〕の中で、シェンラブ＝老子説に対する真面目な反論を行っている<sup>14)</sup>。

シェンラブは仏教における釈迦牟尼と同等の地位を占めるが、諸々の行跡の史実性や、直伝もしくは口承として信じられている莫大な書物の信憑性などを確認する資料が揃っていない点で、釈尊とは大いに異なる。彼の生涯については、専ら事実と伝説をないまぜにした新しい時代の資料によって知り得るのみである。それ故、我々はシェンラブを歴史内存在ではなく、後世に創り上げられた神話上の人物であると結論づけてしまいたくもなる。だが、歴史内存在としてのシェンラブの行跡を辿る手がかりが皆無という訳でもない。20世紀初頭に敦煌の莫高窟から発見された所謂「敦煌文書」の中には、生者と死者を媒介する職務を担っていたとされる“シェンラブ・ミウチェ”〔gshen rab miu che〕という人物の名が、少なくとも5回確認できる<sup>15)</sup>。チベット生まれのこのような人物が、7世紀以前に実在したと仮定しても、強ち外れてはいないかもしれない。世代的記憶を通じて受け継がれたこの人物の存在が、後世にボン教の偉大な導師についての伝記を編む必要に迫られた主体の中に再び呼び戻された可能性は高い。だが、仮にこの人物が後世に成立したシェンラブ伝のモデルであったとしても、一人の聖者の生涯を描き出すためには、非凡な構想力と豊かな想像力が要請されたに違いない。

## 2 資料の特徴と研究方法

12世紀の博学な教理学者ティグンパ〔'bri gung skyob pa 'jig rten mgon po, 1143–1217〕は、『一意趣』〔*dgongs gcig*〕という書物の中で、ボン教教理の歴史的発展の経緯を“顕れ出た（初期の）ボン教”〔*brdol bon*〕・“方向を転じたボン”〔*'khyar bon*〕・“変容したボン”〔*bsgyur bon*〕という3段階に分けて説明している。これは後に、前述のトゥカン・チューキニマによって敷衍され、ボン教の歴史的発展段階を簡潔に示すものとして広く知られるようになった。ボン教徒の多くはこの説を認めていないが、仏教徒によるボン教の見方の一端を示すものとして重要であるため、以下に訳出する。

“顕れ出た（初期の）ボン”〔とは以下の通りである〕。〔初代チベット王である〕ニャティ・ツェンポから〔始めて〕第6代目の王ティデ・ツェンポ〔ダクティ・ツェンポ〕の時代に、ウー〔＝中央チベット〕のアムシュロン〔'am shod lon〕という所に、シェン氏族の13歳の少年〔がいた。彼は〕魔鬼〔'dre〕によって13年



間、チベット全土を連れ回されたのち、26歳に[なって、ようやく]人の中に入った[=人間の世界に戻った]のであるが、[彼は]阿修羅[mi ma yin]の力能によって、これこれの地域には、これこれの神や魔鬼が居て、これこれの益・害をもたらす[ということを知り]、それに対して、祈祷や供養[をこのように行い]、儀式の供物[yas stag]<sup>16)</sup>をこのような流儀で与えれば役に立つ、ということの色々と知った。歴代の王統[記]には、ニャティ・ツェンポ[王]から[第27代チベット王である]ティト・ジェツェンまでの27の王統において、ボン[教徒]によって政権が執られたということしか述べられていないが、チベットでボン[教]が広まったのは、これ以降であることは明らかである。しかしながら、当時のボン[教]においては、下では魔鬼・悪霊[sri]を制圧し、上では古老の神<sup>17)</sup>を供養し、中間では家の竈[に害を与える魔]を追い払う、という三つほど[の宗教活動が行われていただけであり、それら]以外には、ボン[教]流の見解[=ボン教独自の哲学体系]などといった用語は生まれていなかったもので、一部の宗教史書や王統[記]には、[この時期より後の]ディグム・ツェンポの期間からボンが広まったとも述べられている。それ[=顕れ出た(初期の)ボン]は、因のボン・黒い河[rgyu'i bon chab nag]としても知られている。

“方向を転じたボン”[とは以下の通りである]。[チベットの第8代目の王]ディグム・ツェンポの[時代、]劍の葬礼の儀式[gri bshid]の仕方を、チベットのボン教徒が知らなかったので、カシミール、ギルギット、シャンシュン[という]三つ[の国]から、劍の葬礼[の儀式をよくする]3人のボン教徒が呼ばれた。ひとりには、かまどを祓い、火の神を崇拝することによって、太鼓に跨って空を進み、瀉血を行い、鳥の羽によって鉄を切断するなどの力を示した。ひとりには、ジュティ[ju tig]と呼ばれる古い用の紐と、神の託宣と、肩胛骨など[を用いて]占いを行い、良し悪しを決めた。ひとりには、死者の調伏や劍の調伏などといった諸々の葬儀の区別を知っていた。これら三者が現れる以前は、ボンに、これといった見解[=哲学体系]はなかった。[しかし、]それ以降、ボンも一つの見解として捕らえられるようになった。[しかし、これは]外道と自在天派の宗義が、方向を転じたボンと混ざりあったものであるとされる。

“変容したボン”には三つ[の段階がある。まず]初めの変容とは、パンディタ・シャムタブ・ゴンポチェン[という人物]が、顛倒した仏法を埋蔵し、[それを後で]自ら取り出したもの[と]、ボンが混ざり合ったものを言う。次に、中間の変容とは、[チベットの第38代王]ティソン・デツェン[khri srong lde btsan, r. 755-



797]の時代に、ボン[教徒]たちも[仏]法に参入しなければならないという勅令が出された[のであるが]、ギャルウェー・チャンチュプ〔rgyal ba'i byang chub〕という者が、最高の宝珠として仏法に耳を傾けることを望まなかった。[彼は、自分が]王の勅令に背いたとされたことに激怒し、ボン[教徒たち]と結んで、仏陀の經典の一部ををボン[教の流儀]に変えた。それを王が聞いて、如来の教説[= 仏陀の教え]をボン[教の流儀]に変える者たち[は、そ]の首を切るといって、継続して多くの[人々の]首を切ったので、ボン教徒たちが怯え、[ボン教の流儀に]変えた残りの分を埋藏經として隠蔽した。それらが後に取り出されたものが、ボンの埋藏經典〔gter ma〕であるとされる。3番目に、最後の変容[というのは、以下の通りである]。[チベットの第42代の王]ランダル[マ]〔glang dar (ma), r. 836-842〕によって教説が沈められた[= 仏法が弾圧された]後、ツァン[地方]の上手のニャン[という土地]に、シェングル・ルガー〔gshen rgur klu dga'〕という者が[現れた。彼は]、ダルユル・ドラ〔dar yul sgro lag〕というウー[= 中央チベット]のとあるボンの聖地で、仏陀の多くの御言葉をボン[の流儀]に変え、『仏説大般若経十万頌』を『大段』、『仏説中般若経二万五千頌』を『小段』、『論議経』を『ボン経』、『陀羅尼経』を『十万白龍』『十万黒龍』と名付け、術語や文体を仏法と異なるものにして、[それらを]五つの湖と小悪魔の洞穴に埋藏經典として隠し、後で、自分で発見したかのようにして取り出した。その後、キュンポというボン教の一派なども、同様に多く[の仏典]を[ボン教の流儀に]変えた。[以上の]前・中・後の三つの変容したボンは、白い河と呼ばれ、果のボンと名付けられたのである<sup>18)</sup>。

ボン教の歴史を3段階に分けて説明する以上の見解は、一学僧によって提案されたものに過ぎないが、全く根拠を欠いたものと言うことはできない。とりわけ“変容したボン”と名付けられる第3の段階は、今日におけるボン教の特徴を、少なくとも外見上は極めて的確に言い表したものである。実際、今日のボン教の伝統には—ボン教徒たちがそれを認めるかどうかは別として—教義・儀礼・文化など様々な側面において、仏教からの多大な影響が認められるのである。

本稿で取り上げる6枚のタンカは、シェンラブの生涯の中で起こったとされる出来事のうち、天界からの降臨にはじまり、結婚を経て、子息が誕生するまで六つのモメントを描出したものであるが、これらのタンカもまた、前述の仏教僧の言葉を借りれば“変容したボン”、即ちボン教が仏教の多大な影響を受けて変容した第3期以後に

成立した作品として位置づけられる。後に見るように、これらのタンカには、随所に仏教美術の影響、或いは仏伝からの剽窃を思わせるエピソードが含まれており、シェンラブ伝の知識を持たずに一瞥しただけでは、おそらく、そこから生粋のボン教らしさを看取することは困難であろう。これらのタンカには、ボン教徒が伝承するシェンラブ伝に、インド仏教のイデオロギー——例えば因果、再生、苦と解脱、そして悟りに至るカルマの観念など——を適用して全体を構成したという趣があり、その中でシェンラブは、一切有情をより良きへと導くという目的だけのために、この世に生まれた超人的な存在として描かれている。

シェンラブの生涯は、『ドドゥー』（要約された経典〔*mdo 'dus*〕）・『セルミク』（光線〔*dus gsum gshen rab kyi 'byung khungs dang mdzad pa'i rgyud 'dus pa rin po bhe gzer mig gi mdo*〕）・『シジー』（栄光〔*'dus pa rin po bhe'i rgyud dri ma med pa gzi brjid rab tu 'bar ba'i mdo*〕）という三つの文献に記されている。これらのうち最も短い『ドドゥー』（全21章）は10世紀<sup>19</sup>、2番目に長い『セルミク』（18章、2巻本）は11世紀までに編纂されたと考えられる。『セルミク』は、シェンラブの生涯を記した単なる伝記ではなく、ボン教のパンテノンや神々の性格、儀礼を正しく行うための具体的な方法、さらにボン教の教義そのものを叙述するという宗教書としての性格をもつものでもあり、ボン教徒が擁する聖典の中で最も重要な書物の一つに数えられている。冒頭でも触れたように、本稿で扱うタンカに描かれる図像は、これら三つの文献のうち『セルミク』に見られる記述とほぼ一致していることから、このタンカの絵師がこの典籍を所依としたことは恐らく明らかと思われる。尚、シェンラブの生涯を記した三書の中で最も新しく、最も長大な『シジー』（全61章、12巻本）<sup>20</sup>は、14世紀に活躍したボン教僧、ロデン・ニンポ〔*blo ldan snying po*〕によって口述筆記されたものとされている。『シジー』には『セルミク』に見られないボン教の観念や習慣、鳥獣にまつわる物語など、広範囲なテーマが詳細に記されているが、その内容は『セルミク』の拡大版であり、シェンラブの生涯を記した伝記というよりは寧ろ、叙事詩的な色彩を強く帯びたものとなっている。これら三つの文献は何れも、これまで部分的な紹介が行われたのみであり、その内容の全体について研究・翻訳が行われたことは皆無である。

ボンギャ寺で蒐集されたタンカには、同寺院の僧侶の手になる短い解説文（以下、付属文書）が附されているが、タンカを描いた絵師と付属文書を書いた人物は別人であることから、付属文書の記述とタンカに描かれる図像との間に乖離が認められる場合も少なくない。そこで本稿では、以下の手順に従って各図像の記述・解説を進める

ことにする。まず、6枚のタンカ (Thangka N° 1 ~ Thangka N° 6) 全てを提示したのち、付属文書 (ローマナイズ転写は拡張ワイリー方式に基づく) とその和訳を提示し、更に、各タンカについて、大まかなモメント (アラビア数字を附す) と、細かいモメント (アルファベットを附す) に分けた図像配置図を提示する。その上で、個々のモメントについて、主として『セルミク』の記述に依りながら記述・解説を行っていくことにしたい。

## 1 降臨と誕生

### 1.1 付属文書と和訳

##// mchog gsum rtsa gsum srung mar bcas la gus pas phyag 'tshal zhing dwang pas skyabs su chi'o/

/'dir g.yung drun bon gyi zhal thang lnga bcu nga gcig bzhengs pa las thog par bstan pa'i bdag po ston pa sangs rgyas 'jig rten du byon tshul las brtsam te mdzad pa bcu gnyis rim bzhin du bzhengs pa'i dang po sku skye ba bzhes pa'i mdzad pa bzhugs so/ /dbus kyi gtso bo ni ston pa gshen rab kun las rnam par rgyal ba yin/ sras g.yu lo/ sras rma lo/ g.yon gyi steng phyogs/ zhang zhung mkhar bar po so brgyad kyi nang du yab rgyal po thod dkar dang yum yo phyi rgyal bzhad ma'i sras su sku bltams pa'i tshul mdzad do/ steng phyogs ni lha las bab pa'i tshul dang/ g.yas phyogs su bram ze mtshan mkhan gyis dar dkar gyi na bza' gsol/ 'bru dang rin po che spungs pa'i steng du dngul dkar gyi me long dang yid bzhin gyi nor bu bzhag /lha mda' sgro dkar can phyag tu bsnam nas mtshan gsol ba sogs mdzad/ mdun dang g.yon 'og lha klu mi'i 'gro ba mtha' dag dga' ston rten 'brel phun sum tshogs pa'i ngang dad gus dga' spro dpag tu med pas ston pa'i zhal mjal mchod pa rgya cher phul ba sogs bzhengs pa'o/ mdzad bcu las/ spangs rtogs mthar phyin mngon par sangs rgyas kyang/ /'gro la rnam brtse gzig tshad lnga dgongs nas/ /sems can 'dren phyir dmu rgyal thod dkar sras/ /skye ba bzhes par mdzad la phyag 'tshal lo/ /zhes pa ltar ro// (lha bris pa reb gong bon brgya dgon pa'i grwa btsun nam mkha' bstan 'dzin yin/)

三宝・根本三尊・護教尊などに敬意を以て礼拝をし、清澄 [な心] を以て帰依いたします。

ここにユンドゥン [=永遠] のポンのタンカが 51 枚 [あり、そ] のうち、はじ

Thangka N° 1 「生をお受けになったという御事績」〔skye ba bzhes pa'i mdzad pa〕



(国立民族学博物館標本資料目録データベース標本番号：H0218468)



Thangka N° 2 「教えを広めたという御事績」〔bstan pa spel ba'i mdzad pa〕



(国立民族学博物館標本資料目録データベース標本番号：H0218469)



Thangka N° 3 「地獄に安楽をもたらした御事績」 [dmyal khams bde la bkod pa'i mdzad pa]



(国立民族学博物館標本資料目録データベース標本番号：H0218470)



Thangka N° 4 「教化が困難な者を教化したという御事績」〔gdul bka' btul ba'i mdzad pa〕



(国立民族学博物館標本資料目録データベース標本番号：H0226060)



Thangka N° 5 「妻を娶ったという御事績」〔khab tu bzhes pa'i mdzad pa〕



(国立民族学博物館標本資料目録データベース標本番号：H0218471)



Thangka N° 6 「有情を教化する子息の化現という御事績」[<sup>o</sup>gro'dul sras sprul kyi mdzad pa]



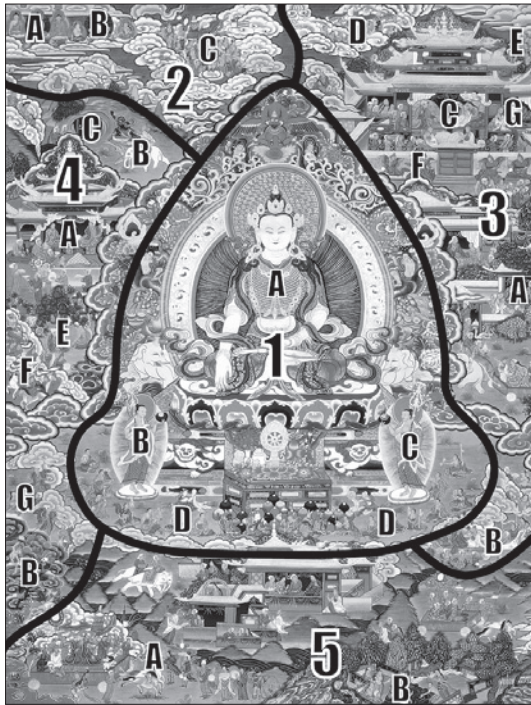
(国立民族学博物館標本資料目録データベース 標本番号：H0218472)

めは、教主〔である〕覚醒した導師が〔我々の住む〕世界にやってきた様子からはじまり、〔教主の〕12の御事績が順に描かれている。〔先ず、〕1番目〔のタンカに〕は、生をお受けになったという御事績を描いたものである。中央の主尊は、一切勝者、トンパ・シェンラブであり、〔その下方の左右には、神の〕子息であるユロ、〔神の〕子息であるマロ〔が立っている〕。左<sup>21)</sup>の上部には、シャンシュン<sup>22)</sup>〔にある〕バルポ・ソギェー城のなかで、〔トンパ・シェンラブが、〕父トゥーカル王と母ヨチ・ギャルシェーマの子息としてお生まれになった様子が描かれている。上部には〔トンパ・シェンラブが〕神〔々の領域〕から降臨した様子〔が描かれており〕、右側<sup>23)</sup>には、相を見るバラモンが〔王子であるトンパ・シェンラブの〕相を調べた際、王子が宝珠の坐にお座りになり、バラモンのセルキャプが白い絹布の着物を〔王子に〕お着せし、穀物と宝珠が積み上げられた上に白銀の鏡と如意宝珠を置き、白い羽が付いた神の矢を手を持って、〔トンパ・シェンラブという〕お名前をおつけになっている〔様子〕など〔が描かれている〕。前方と左下には、神・人・龍の一切の衆生が、あらゆるものを取りそろえた宴や祝典〔をとり行い、そ〕の場で、無量の信仰と尊崇・喜び〔の心〕を以てトンパに謁見し、大量の供物を捧げている〔様子〕などが描かれている。〔以上の事績は、〕『御事績の称讃』〔という書物〕<sup>24)</sup>に「断証を完遂し、完全なる覚醒を得ても、愛情をもって衆生をご覧になり、有情を導くためにム〔族〕の王、トゥーカルの子息〔として〕生をお受けになったという御事績に礼拝いたします」とある通りである。(絵師は、レブコンのポンギャ寺の僧、ナムカー・テンジン)

## 1.2 図像詳解

1枚目のタンカには、シェンラブがム族の王、ギャルボン・トゥーカルの子息として誕生した様子が描かれている。チベットの古い伝承に依れば、古代チベット人は、セ〔se, bse〕・ム〔dmu〕・ドン〔ldong〕・トン〔stong, thong〕と呼ばれる四大部族から成り立っていたとされるが、このうち、現在の西チベットのシャンシュン地方を拠点としたム〔dmu〕と呼ばれる部族の宗教が、ボン教であったと伝えられる<sup>25)</sup>。

Thangka N° 1に描かれる図像は『セルミク』第3章「シェンラブが生をお受けになったという御事績について」〔gshen rab kyi skye ba bzhes pa'i mdzad pa'i skor〕に記述される内容とほぼ一致しているが、一部『シジー』の記述に依っていると思われる箇所もある。以下、主に『セルミク』の記述に基づき、各図像の解説を試みることにしたい。



図像配置図 (Thangka N° 1)

### 1.2.1 降臨

1A シェンラブ・ミボ (以下、シェンラブ)。

1B シェンラブから見て右下には、“御言葉から化現した神の子、トルコ石の髪の毛をもつユロ”〔gsung las `prul pa`i gsas bu g.yu lo g.yu`i lan phran can〕(以下、ユロ) が立っている。

1C シェンラブから見て左下には、“御心から化現した神の子、野山羊の衣を持つマロ”〔thugs las sprul pa`i gsas bu rma lo skyin gyi ral ga can〕(以下、マロ) が立っている。

1D シェンラブの周りを“永遠の菩薩”〔g.yung drung sems dpa`〕

や、上・中・下のイェン (後述) に住む彼の信者たちが取り囲んでいる。

2A シェンラブの物語は、彼が人間界に降臨する前に住んでいたとされる天上界の描写からはじまる。嘗て、天上の世界には、ダクパ (“清浄なる者”〔dag pa〕)、セルワ (“明澄なる者”〔gsal ba〕)<sup>26)</sup>、シェーパ (“知る者”〔shes pa〕) という三兄弟がいた。このうち、長男のダクパは、かつて人間界でム族の王子として生まれ、トギェル・イエキェン〔gto rgyal ye mkhyen〕という名で教化活動を行ったのち、再び同じ氏族に転生するという遺言を残して天上に戻った。ある日、ダクパは、チャの神々が住む国〔mgon btsun phywa`i yul〕に次男のセルワと三男のシェーパを呼び、シェーパに対しては、未来にポンの教えを説くために今から修行に入るよう命じ、次男のセルワには、これから人間界に赴いてポンの教えを説くように命じた。

2B その後、セルワは、無上無超の宮殿〔`og min `da` ba med pa`i pho brang〕に住む原智<sup>27)</sup>の神〔ye she kyi lha〕、シェンラ・ウーカル (“シェンの神・白い光”〔gshen lha `od kar〕)のもとを訪れ、有情を教化するための助言を請うた。すると、シェンラ・ウーカルは「私は報身という身体しか得ていないので、“中空の神 [々が住む] 明澄なる光 [の領域]”〔bar lha `od gsal〕に住む、“原初のシェン・永遠の菩薩”〔ye



gshen g.yung drung sems dpa') たちなど、所知障に覆われた者たちの障碍を浄化し、彼らを次の段階へと導くことしかできない。汝は既に所知障が完全に浄化されており、あらゆるものに化現する能力を持っている。いますぐ有情の教化に赴かれるがよい。わけても、最も教化の効果が期待できる、人間の世界に赴かれるのが良いだろう」と言った。さらにシーパ〔srid pa〕の王であるサンポ・ブムティが姿を現し、「神〔lha〕とシェン〔gshen〕とシーパ〔srid pa〕<sup>28)</sup>の三者は、同じ教えの中にある。三界の有情を導くために化身として姿を顕し、有情を教化なされよ」と言った。神々の助言を受け、セルワは早速、人間の世界へ向かうことにした。

2C 人間の世界へ向かう途中、セルワは“中空の神々が住む明澄なる光の領域”に立ち寄った。原初のシェン・永遠の菩薩たちはセルワを歓迎した。彼らはセルワが説くポンの教えに信順し、セルワの信奉者となった。これらの信奉者たちは、“先頭の従者”〔'khor dang po〕(【補遺1】参照)、“中間の従者”〔'khor dbu ma〕(【補遺2】参照)、“最後の従者”〔'khor tha ma〕(【補遺3】参照)という三つに分けられた。

その後、セルワは須弥山の頂上に到り、そこから世界を眺めて、南瞻部洲にあるオルモルンリン〔'ol mo lung rings〕を自身の誕生の地として選んだ。そして、兄ダクバ、即ちトギェル・イエキェンの遺言を実現するために、オルモルンリンの国王であり、ム族の末裔である、ミボン・ラボン・ギャルボン・トゥーカル〔mi bon lha bon rgyal bon thod dkar〕(以下、ギャルボン・トゥーカル)と、その妃ミチ・ラチ・ヨチ・ギャルシェーマ〔mi phyi lha phyi yo phyi rgyal bzhad ma〕(以下、ギャルシェーマ)の子として生を受ける決意をした。

人間界に旅立つ前、セルワは須弥山の頂に、ラツェ・グンナム〔lha rtse dgung nam〕という神殿<sup>29)</sup>を建てた。すると、須弥山に住む梵天〔tshangs pa〕、帝釈天〔brgya byin〕、ユンドゥンの偉大なる4人の女神〔g.yung drung gi lha chen mo che bzhi〕、神変の神・ヘウジェの六兄弟〔rdzu 'phrul gyi lha lhe'u rje mched bdun〕、シーパの偉大なる4人の神王〔srid pa'i lha rgyal po chen po bzhi〕、遊戯海の龍〔rol mtsho'i klu〕などが集まり、シェンラブに花を捧げ、礼拝を行った。彼らはシェンラブにこのまま須弥山に留まって欲しいと頼んだが、シェンラブは「シェンラ・トゥーカルとの約束を破ることはできない。私が人間として生を受けたら、汝たちも人間の世界に降臨し、私の教えを聞きに来るがよい」と言った。

### 1.2.2 誕生

オルモルンリンの国王ギャルボン・トゥーカルは、ある夜、まばゆい光を放つ白

いア字が頭頂に降りて体内に染み込み、身体から発せられた光が世界を明るく照らすという夢を見た。王妃のゲェルシェーマは、頭頂に赤い光を放つハ字が降りて体内に染み込み、身体が発光して世界を明るく照らすという夢を見た。

- 3A ギャルポン・トゥーカルとギェルシェーマは、自分たちが見た夢のことを、バラモンの子、セルキャブ・ウーデン〔gsal khyab 'od ldan〕(以下、セルキャブ)<sup>30)</sup>に告げた。セルキャブは、それがギェルシェーマの懐妊を示す徴であることを述べた。
- 3B 王はオルモルンリンの人々を集め、近い将来に王子が誕生すると発表した。オルモルンリンの人々は大変喜んだ。
- 3C セルワは木・女・鼠の年、1月15日の夜明けに誕生した。白い絹布の上に取り上げられたセルワの姿は宝石のように美しく、その泣き声はカッコウのように明るく澄んで世界中に響き渡った。ある者は太鼓をたたき、ある者はシャン<sup>31)</sup>をならし、ある者は香を焚いて、王子の誕生を祝福した。
- 3D セルワが人間として生を受けた事を知り、空から“先頭の従者”たちが祝福のためにバルポ・ソギェー城に降臨した。彼らは、供物を捧げ、楽器を鳴らし、花を撒き、セルワに礼拝を行った。
- 3E 次に、「上のイエエン〔の領域に住む〕13のニエンポ」〔yar g.yen gnyan po bcu gsum〕<sup>32)</sup>(【補遺 2-1】参照)、「中のイエエン〔の領域に住む〕9のトゥーポ」〔bar g.yen gtod po dgu〕(【補遺 2-2】参照)、「地のイエエン〔の領域に住む〕11のチェワ」〔sa g.yen che ba bcu gcig〕(【補遺 3】参照)が降臨し、供物を捧げ、楽器を鳴らし、花を撒き、礼拝を行った。
- 3F 続々とバルポ・ソギェー城を訪れる不思議な訪問者たちに、ギャルポン・トゥーカル王は狼狽した。王が「汝等は誰に対して礼拝を行っているのか」と尋ねると、彼らは「私たちは、人間として生を受けた我々の導師に供物と礼拝を捧げているのである。導師の顔を見るのが待ち遠しい」と口々に述べた。王は「そのような者はこの城には居ない」と言って、彼らを追い払った。王妃ギェルシェーマも、彼らを王子に危害を与える魔と勘違いし、城の入り口を堅く閉ざして、城門と城壁の周りに武装した監視人たちを置いた。

### 1.2.3 即位

- 3G セルキャブがバルポ・ソギェー城を訪れ、王子の相を調べた。セルキャブは王子に三十二相・八十種好が具わっていると述べた上で、「王子が王位に就くのは、

本日の日中がよろしい。この王子は、如意宝珠のように汚れがございません。ご両親が過去世において積み上げた善業が、今生において熟したのでございます」と述べた<sup>33)</sup>。

4A 王子は白い絹布の衣服をお召しになり、ユンドウン（逆万字）の柄がついた敷物の上に座った。セルキャプはこの王子に、トンパ・シェンラブ・ミボ（以下、シェンラブ）という名前を付けた<sup>34)</sup>。オルモルンリンの王となったシェンラブが顔を見せると、大地が激しく揺れ、空には光明が生じ、空中には耳に心地よい音が響き渡った。ある者は礼拝を行い、ある者は聖水を注ぎ、あるものは花を捧げ、ある者は太鼓を叩き、ある者はシャンを鳴らして、新しい王の即位を祝った。そのとき、地獄（4B）、餓鬼（4C）、畜生（4D）、人間（4E）、阿修羅（4F）、神々の世界（4G）では、多くの有情が覚醒を遂げた。

多くの有情が覚醒を遂げたことを知り、セルキャプはシェンラブに尋ねた。「私たちは一人も覚醒を遂げていないのに、多くの有情たちが今、このように覚醒を遂げたのは如何なる理由によるのでしょうか。このようなことが起こるのであれば、存在の世界に上下などなく、前世も後世もあったものではございません。」シェンラブは次のように答えた。「今日、覚醒を遂げた者たちは、私の兄であるダクパ（トギェル・イエキェン）が導き損なった者たちである。兄は人間の世界を去る直前に、三界の有情たちに教えを説き、“私が去ったのち、再び一人の導師が顕れるだろう。そのとき、その導師の顔を見るやいなや、汝等が速やかに覚醒を遂げますように”という祈願を行った。その祈願の力によって、彼らは覚醒を遂げたのである。」

#### 1.2.4 園に遊ぶ<sup>35)</sup>

5A シェンラブは、神・龍・人間などの十六人の友を連れて林苑で遊んだ。シェンラブの周りには、神の少年、龍の少年、龍の少女、人の少年、人の少女、阿修羅の少年、猿の集団、鳥たち、毛並みのよい動物たちがあつまり、毎日のように奏楽や舞踊を楽しんだ。

5B 午前は泉で沐浴をし、午後は木陰で扇にあおがれながら休んだ。そして夕方は宝珠の洞窟で休憩し、夜になると花の平屋で眠った。



## 2 “永遠のポン”の弘通

### 2.1 付属文書と和訳

##/ /gnyis pa bstan pa spel bar dgongs pa'i mdzad pa bzhugs so/

/dbus kyi gtso bo brgya ba'i sangs rgyas ston pa gshen rab mi bo/ g.yas phyogs su bzo rig  
sogs rig pa'i gnas lnga gtan la phab nas bstan pa rgyas rung gi gdul zhing smin par mdzad  
de/ thog mar 'jig rten phan bde sgrub pa'i thabs su phwa gshen theg pa dang/ snang gshen  
theg pa/ 'phrul gshen theg pa/ srid gshen gyi theg pa ste/ phyi rgyud rgyu'i theg pa bzhi  
gsungs nas 'jig rten gyi mi bde ba sna tshogs zhi/ phan bde legs tshogs thams cad mngon  
gyur du rgyas par gdul bya kun ches kyi dad mos rab tu 'phel te 'khor du 'dus/ de nas dge  
bsnyen gyi theg pa dang/ drang srong gi theg pa gsungs nas las 'bras spang blang gi bslab  
bya mtha' dag bstan/ de nas gdul bya dbang rab don du a dkar gyi theg pa dang/ ye gshen  
gyi theg pa/ gtan la phab cing 'bras bu'i theg pa gsungs/ skal ldan mchog gi don du bla  
med kyi theg pa bcas gsungs pa rnams bka' dan po theg pa rim dgu zhes yongs grags ltar ro/  
gyon phyogs mas rim bzhin dmyal ba dang/ yi dwags dang/ byol song dang/ mi dang/ lha  
min dang/ lha rnams te 'gro ba rigs drug la 'dul ba'i thub pa drug sprul te/ gdul bya rang  
rang gi don legs par mdzad pa'i tshul bzhengs pa'o/ mdzad bcu las/ sum cu'i mtshan dang  
brgyad bu'i dpe byad ldan/ 'od zer mtha' yas mnga' ba'i zhal bstan nas/ /gdul bya dang  
po'i 'khor la bkri drang gi /bstan pa spel bar mdzad la phyag 'tshal lo/ /zhes pa ltar ro// (lha  
bris pa ni reb gong bon brgya dgon pa'i grwa btsun nam mkha' rgyal mtshan yin/)

2 番目、教えを広めようとお考えになった御事績。

中央の主尊は、多くの覚者の教師、シェンラブ・ミボ [である]。右側に [描か  
れているのは、以下の通りである。] 工芸学などの [大] 五科を確立して、教えを  
広めるに相応しい [国土となるように] 化土を成熟なさり、[その後で] 先ず、世  
間の福利と安楽を成就する方便として、福運のシェンの乗 (チャシェン・テクバ)  
と、顕現のシェンの乗 (ナンシェン・テクバ) と、幻術のシェンの乗 (トゥルシェ  
ン・テクバ)、存在のシェンの乗 (シーシェン・テクバ) という “外タントラ・四  
つの因の乗” をお説きになり、世間の不幸を鎮め、一切の福利・安楽と善をありあ  
りと広めたところ、全ての所化たち [の間に] 篤い信仰が十分に広まり、[彼らは、

シェンラブの] 周りに [弟子として] 集まった。その後、居士の乗 (ゲニエンギ・テクバ) と、仙人の乗 (ダンソング・テクバ) をお説きなり、業果・取捨の訓戒を悉く示した。そして、最上の機根を具えた所化のために、白いアの乗 (アカルギ・テクバ) と原初のシェンの乗 (イエシェンギ・テクバ) を確立し、[これら二つの] 果の乗をお説きになり、[さらに] 最高の縁に恵まれた者のために、無上なる乗 (ラメーキ・テクバ) などをお説きになった。[以上の九つの乗は、シェンラブの] 最初の御言葉 [であり] 九次第の乗として [今日、] 広く知られる通りである。左側 [に描かれているのは]、下から順に、地獄・餓鬼・畜生・人間・阿修羅・神であり、[これら] 六趣を教化する [ために、シェンラブが] 6人の導師に化現して、それぞれの所化の利を正しく為された様子が描かれている。[以上は] 『御事績の称讃』<sup>36)</sup> に、「三十相と八十種好を具え、限りない光明をもつ御顔をお見せになり、所化 [である] 最初の弟子たち [の間] に、正しい導きの教えをお広めになったことに礼拝いたします」とある通りである。(絵師はレブコンのボンギャ寺の僧、ナムカー・ギエンツェン)

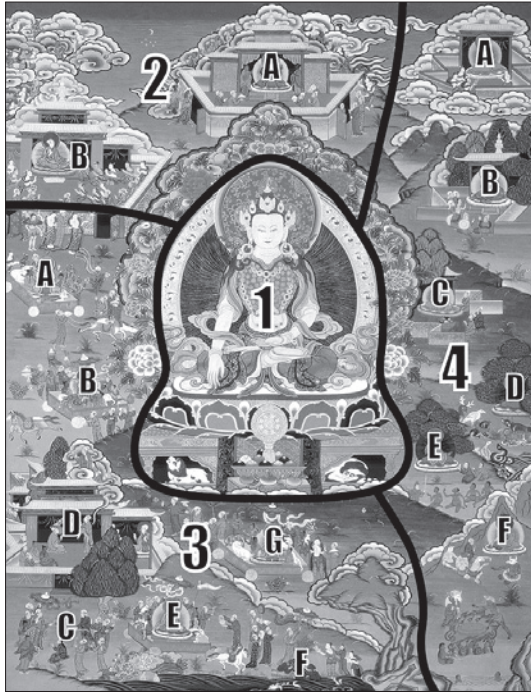
## 2.2 図像詳解

2枚目のタンカは『セルミク』第4章「シェンラブが教えを広めたことについて」[gshen rab kyis bstan pa spel ba'i skor] [ZM: 59-68] に記述される内容とほぼ一致している。上に訳出した付属文書には、このタンカに、シェンラブがボン教の基本教理である「九次第の乗」[theg pa rim dgu] を説いた様子が描かれているという見解が示されているが、その様子がこのタンカに明示的に描かれているとは思われない。寧ろこのタンカの主題となっているのは、シェンラブが人間界における母ギャルシェーマの父、サラ王のもとを訪れたとされるエピソードと、(上記の付属文書にも記されているように) 六つの生存領域(六道)の有情を教化したとされる逸話である。以下、『セルミク』の記述に基づき、各図像の解説を試みる。

### 2.2.1 神々と菩薩の降臨

1 シェンラブ・ミボ (中央)。

2A シェンラブと、御心の化身であるマロ [rma lo]、御言葉の化身であるユロ [g.yu lo] が、オルモルリンのシャムポ・ハツェ神殿 [gsas mkhar sham po lha rtse] に居ると、嘗て天上でシェンラブの教えを聞いた、原初のシェン・永遠の菩薩 [ye gshen g.yung drung sems dpa'] (【補遺 1】参照) たちが、次々に降臨した。これらの



図像配置図 (Thangka N° 2)

ン [の領域に住む] 9のトゥーポ, というボン教徒」[*bar g.yen gtod po dgu'i bon po*] (【補遺 2-2】参照) が空から降臨した。次に、ヤリ・カンダク (青い平坦な岩でできた雪山 [*g.ya' ri gangs brag*]) から, “顕現のシェン” [*snang gshen*] である「地のイェン [の領域に住む] 11のチュワ, 教化するボン教徒」[*sa g.yen che ba bcu gcig 'dul ba'i bon po*] (【補遺 3】参照) が姿をあらわした。これら “存在のシェン” と “顕現のシェン” たちは, シェンラブに供物を捧げ, 礼拝を行った上で, 「われわれに 360 の神殿で説く教えをお授け下さい」と請うた。彼らは中の能力 (中の機根 [*dbang po 'bring*]) を具えていたので, シェンラブは彼らに “有の流れのボン” [*srid pa'i rgyud kyi bon*]<sup>39)</sup> を説いた。そして, “存在のシェン” を中空の領域 [*bar snang khams*] の主に, “顕現のシェン” をヤリ・カンダクの主に任命した。

その後, 須弥山の頂から「世間の神々」[*'jig rten lha tshogs*] (【補遺 4】参照) が降臨した。彼らはシェンラブに供物を与えて, 礼拝を行い, 「われわれに 360 の神殿で説く教えをお授け下さい」と請うた。するとシェンラブは「汝等は強力な加持力を有する者たちである。強力な密呪によって有情を救済するために, “黒い密呪のボン” [*nag po sngags kyi bon*]<sup>40)</sup> を説こう」と言って, その教えを彼らに授けた。

菩薩たちは優れた能力 (最上の機根 [*dbang po rab*]) を具えていたので, シェンラブは彼らに「口伝によるポンの教え」[*man ngag lung gi bon*]<sup>37)</sup> を説いた。

2B その後, シェンラブ, ユロ, マロの三者は, バルポ・ソギェー城に向かった。すると, 既に解脱を遂げ, その後はポンの教えを広めるためにシェンラブの従者となった “存在のシェン” [*srid gshen*] たち, 即ち「上のイェン<sup>38)</sup> [の領域に住む] 13のニェンポ, 教化するボン教徒」[*yar g.yen gnyan po bcu gsum 'dul ba'i bon po*] たち (【補遺 2-1】参照) と, 「中のイェン

彼らは、シェンラブが嘗て須弥山の頂上に建てた神殿、ハツェ・グンナムの主となり、有害な魔たちの教化にあたった。

### 2.2.2 サラ王の国

3A 3歳になったシェンラブは、湖での沐浴、街の散策、そして人間界の母であるギャルシェーマの父、サラ王を表敬するために旅にでる決意をした。父の持ち物である八つの車輪がついた黄金の乗り物に乗ってオルモルンリンを出発すると、シェンラブの身体からは眩い光線が放たれた。そして、シェンラブの身体の熱からは、東方の元素である“火”のボン教徒、“光の辮髪を持つ者”〔'od kyi lchang lo can〕<sup>41)</sup>が灯明を持って顕れた。シェンラブの息からは、北方の元素である“風”のボン教徒、“トルコ石の青い輝きを有する者”〔g.yu ma dangs sngon po can〕が芳しい香を持って顕れた。シェンラブの血からは、西方の元素である“水”のボン教徒、“甘露の滴を持つ者”〔bdud rtsi'i zil pa can〕が沐浴のための甘露を湛えた壺を持って顕れた。シェンラブの肉からは、南方の元素である“地”〔sa〕のボン教徒、“宝珠の鬘を持つ者”〔rin chen thor tshugs can〕が最高に美味なる食物を持って顕れた。これら四者は、“4元素の偉大なる原初のシェン”〔'byung ba'i ye gshen chen po bzhi〕と呼ばれる。

3B サラ王が住むランリン〔lang ling〕という街に向かって、シェンラブを乗せた車はゆっくりと進んだ。シェンラブの信奉者たちは、太鼓を叩き、シャンを鳴らし、法螺貝を吹き、聖水を撒きながら、彼に随行した。このほか、シェンラブを警護するために、虎・ヤク・象・獅子がシェンラブの車に同乗した。空には虹がかかり、心地よい音が鳴り響き、大地はしばしば鳴動した。シェンラブを乗せた車が通り過ぎた路には、美しい花々が咲き乱れた。

空に響き渡る不思議な音と大地の鳴動にランリンの人々は動揺し、サラ王のもとに集まってきた。人々が「これはどういうわけですか」と尋ねると、王に変わって王子セルキャブ〔rgyal bu gsal khyab〕がこれに答えた。「恐れることはない。かつてサラ王の娘、すなわち私の妹であるギャルシェーマがオルモルンリンに嫁ぎ、ギャルボン・トゥーカル王との間に一人の王子をもうけた。王子のお顔を見るやいなや、彼の父母とオルモルンリンの人々は皆、忽ち覚醒を遂げた。その王子が3歳になり、街の散策し、私の父に敬意を表し、沐浴をなさるためにこの街にいらっしゃったのである。お前たちも心身を清め、王子に献上する花を集めなさい。そして、王子のお顔が見えたら、礼拝し、花を捧げなさい。彼は遍知なる者の化身とし

てこの世に生を受けた御方であるから、我々もきっと覚醒を遂げる筈である。」

3C シェンラブの姿が見えると、ランリンの人々はシェンラブに礼拝を行い、街中から集めてきた花を捧げた。シェンラブは車から降り、サラ王とその親族たちに敬意を表した。

3D サラ王の城に招かれたシェンラブに、ランリンの人々は様々な供物を捧げ、礼拝を繰り返した。すると、サラ王とランリンの人々は一人残らず解脱を遂げた。その様子を見ていた“4元素の偉大なる原初のシェン”たちは、シェンラブに次のような質問した。「この街の人々は一人残らず解脱を遂げているのに、我々は未だ解脱の果を得られておりません。これはどうしてでしょうか。」シェンラブは答えた。「4元素の偉大なる原初のシェン”たちよ、それはこういう訳である。この街は私の母が生まれた地であり、嘗て私の父ギャルボン・トゥーカルが訪れた地でもある。即ち、私が敬意を表したのは私の外祖父 [phyi mes] と母方の叔伯父 [zhang po]<sup>42)</sup>なのである。我々の氏族<sup>43)</sup>は嘗てより障碍が浄化されており、みな残らず覚醒を遂げている。彼らもまた、今日、私に礼拝を行ったことにより、[解脱を遂げるために必要な] 資糧の蓄積が完成し、それによって解脱を遂げたのである。」“4元素の偉大なる原初のシェン”たちは更に次のように尋ねた。「それでは、私たちはいかなるポンの教えを学べば、二資糧 [福德の資糧 [bsod nams kyi tshogs] と智慧 (原智) の資糧 [ye shes kyi tshogs]] を蓄積し、二障 [煩惱障と所知障] を浄化することができましようか。」これに対し、シェンラブは「汝等の能力は最も劣っている。だから、“光線を放つボン” [’od zer spros pa’i bon] の教えを説くことにしよう」と言って、彼らに“ポンの八万四千の門” [bon gyi sgo mo brgyad khri bzhi stong] の中から“十万の膨大なるポンの教え” [rgyas pa ’bum gyi bon]<sup>44)</sup>を説いた。そして、彼らをランリンの主に任命した。

3E その後、シェンラブは沐浴をするために、従者たちとともに、ムレトンデン湖 [mtsho mu le stong ldan]<sup>45)</sup>に向かった。

3F 三つのニャの月 [zla ba nya gsum]<sup>46)</sup>のうち、ニャの第1月の白の時には、空の神が沐浴を捧げにやってきた。ニャの第2月の赤の時には、地上の人々が沐浴を捧げにやってきた。ニャの第3月の青の時には、地下の龍が沐浴を捧げにやってきた。

3G 沐浴を終えると、シェンラブは、神・龍・人の弟子たちに囲まれ、美しい奏楽に導かれながら、オルモルンリンへと戻っていった。そしてバルボ・ソギュー城に至ると、神・龍・人の弟子たちに、“三種の壺のボン” [pe’u tse nram pa gsum]<sup>47)</sup>という教えを説いた。

### 2.2.3 六道を生きる有情の教化

- 4A さらに、シェンラブは六つの生存の領域（六道）を生きる有情を教化するために、六つの感官から光を放ち、そこから6人のシェンを出現させた。墮落という苦悩に苛まれる神々の世界では、セルワ・クンシェー（明澄に燃える、一切を知る者〔gsal 'bar kun shes〕）という導師に姿を変え、神々をポンの道へと導いた。
- 4B 阿修羅が住む世界では、ムサン・チェバル（覚醒を遂げた燃える稲妻〔mu sangs lce 'bar〕）という導師に姿を変え、争いを好む阿修羅たちにポンの教えを説いた。
- 4C 人間が住む世界では、人間のボン教徒であるトンパ・シェンラブ（導師・最高のシェン〔ston pa gshen rab〕）に姿を変え、欲望に溺れる人間たちをポンの道へと導いた。
- 4D 無知蒙昧な畜生が住む世界では、ティンセル・ヘーキ・ドンメ（深奥を忽然と照らす灯明〔gting gsal had kyi sgron me〕）という導師に姿を変え、無知な畜生たちを導いた。
- 4E 常に飢えと乾きに苦しむ餓鬼が住む世界では、ダンジン・ジンプン（数を数える広がり師〔grangs'dzin dbyings spungs〕<sup>48)</sup>）という導師に姿を変え、餓鬼たちをポンの道へと導いた。
- 4F あらゆる苦しみを味わう地獄の世界では、トゥルボン・ダルダクジャムパ（幻術のボン・移り気な慈悲〔'phrul bon dar drag byams pa〕）という導師に姿を変え、地獄に堕ちた者たちにポンの教えを説いた。

## 3 トブ・トゥーデの救済

### 3.1 付属文書と和訳

##/ /gsum pa gdul dka'i 'gro ba 'dul ba'i mdzad pa bzhugs so/

/dbus kyi gtso bo ni bdag cag gi ston pa thugs rje can yin la/ mdzad pa ni gsum pa ste/  
gto rje khri skyong gi sras gto bu dod de ni/ gtsug lcam dkar mo btsun mor blangs nas 'khor  
dang mnga' ris longs spyod phun sum tshogs par yod na yang/ gto bu khro gtum che zhing  
rgyud ma rungs par gyur nas/ rgyal bu'i char dor/ dmag dpon gyi chas su zhugs nas/ gzhan  
la 'khrugs pa byas te yul khams rtsod/ 'bangs la 'tshe ba byas te rgyu nor 'phrog/ phyi tshul  
du ston pa'i slob ma byas te bon nyan khul byas na'ang/ nang du sdig pa mi dge ba'i las  
kho nar sems shing mthong tshad dang thub tshad gsod pa'i sdig can gyur ba na/ glo bur du



(g.yas) 'chi nad kyis zin sman dpyad gang gis ma phan/ 'chi bdag nag pos srog bcad/ shi ma thag tu dmyal bar lhung ('og)/ ston pa dngos su byon nas thugs rjes gzigs/ gto bu rgyu 'bras la yid ches skyes nas dad gus byas/ ngan song sgrib sbyong gi cho ga gsungs nas drangs pa ni gto bu drangs pa'i mdo las gsal lo/ yang rgyal bu khri shi dbang rgyal 'dren pa'i don du kun rig rnam snang rgyal bo'i cho ga gsungs nas drang pa sogs kyang mdzad pa 'dir bshad do/ mdzad bcu las/ sdig can gto bu dod de dmyal bar lhung/ /mngo shes rjes dran bon bstan skad ci mar/ byang chub sems dpar bsgyur nas thar bar drangs/ /dmyal khams bde bar mdzad la phyag 'tshal lo/ zhe gsungs pa'o// (lha bzo ni/ reb gong bon brgya dgon pa'i grwa btsun nam mkha' bstan 'dzin yin/)

3 番目、教化が困難な衆生を教化なされたという御事績。

中央の主尊は、慈悲深い我々の教師であり、[その] 御事績は三つ [ある。先ず、] トジェ・ティキョンの子息であるトブ・トゥーデは、ツクチャム・カルモを妃として娶り、何一つ不足のない家来・領地・財産を持っていたが、トブは怒りが激しく、心が粗暴になり、[やがて] 王子の座を捨て、兵士の長の衣服を身につけたのち、他者と戦い、国 [々] と争い、人々を傷つけ、財産を奪 [うようにな] った。[彼は] 表面上はトンパ [・シェンラブ] の弟子となり、ボン [の教え] に耳を傾けるふりをしたが、[心の] 内では専ら悪と不善の行為を想い、見える限り、できる限り [の有情を] を殺害するという悪人になった [。そんな] 時、(右) [彼は] 突如として死の病に冒され、如何なる治療も薬も効かず、黒い死の王に命を絶たれて、死ぬとすぐに地獄へ堕ちた (下)。[その後、] トンパ [・シェンラブ] が [トブの] 目の前に到り [彼の様子を] 慈悲深くご覧になった。[すると] トブは因果を信頼するようになり、[シェンラブの教えを] 信仰・崇拜するようになった。[その後、シェンラブが] 悪趣の障碍を浄化する儀式をお説きになり、[その結果、トブが善趣へと] 導かれたことは、トブを導いた経に明記されている。また、ティシ・ワンギャル王子を導くために、クンリク・ナムナン王の儀礼を説いて [ティシ・ワンギャル王子を] 導いたことなども、この御事績 [の一つと] 言われるものである。[以上は] 『御事績の称讃』<sup>49)</sup> に「地獄に堕ちた悪人トブ・ドゥーデ [に] 予見と想起のボンを説き、一刹那のうちに [トブを] 菩薩に変えて解脱へと導き、地獄に安穩をもたらししたという偉業に対し、礼拝をいたします」と説かれている通りである。(絵師は、レブコンのボンギャ寺の僧、ナムカー・テンジン)



### 3.2 図像詳解

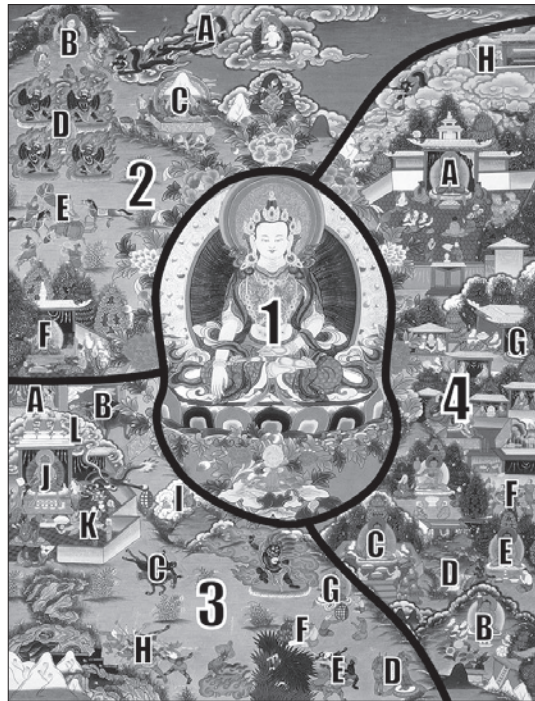
3 番目のタンカに描かれる図像は、『セルミク』第5章「100の神とシェンに帰依したことについて」〔lha gshen brgya la phyag 'tshal ba'i skor〕〔ZM: 69-113〕に記述される内容とほぼ一致する。標本名に「地獄に安樂をもたらした御事績」〔dmyal khams bde la bkod pa'i mdzad pa〕とあり、付属文書に「教化が困難な衆生を教化なさったという御事績」〔gdul dka'i 'gro ba 'dul ba'i mdzad pa〕とあるのは、後述するように、ウーマ・ジャムキャ国の王子トブ・ドゥーデ〔gto bu dod de〕が悪行の報いを受けて地獄に堕ちた際、サンポ・ブムティの化身である意の少年が100の神とシェンの名を唱えて供養したことにより、地獄に安樂がもたらされ、トブ・ドゥーデが悪趣の境涯から救済されたというエピソードを、それぞれの仕方で表現したものと思われる。以下、各図像について、主に『セルミク』の記述に基づき記述・解説を行うことにしたい。

#### 3.2.1 青い龍馬にのった少年

##### 1 トンパ・シェンラブ (中央)

2A サンポ・ブムティ〔sangs po 'bum khri〕<sup>50)</sup>の化身であり、水晶のように清く明澄な身体を有する“トルコ石の鬘を有する意の少年”<sup>51)</sup>(以下、意の少年)は、“幻術の文字の衣”〔yi ge 'phrul gyi slag pa〕をはおり、“トの(教えが収められた)経箱”〔gto yi bka' sgron〕<sup>52)</sup>を背負って、天空からオルモルンリンへと向かった。意の少年が青い龍馬に乗って出発すると、空には耳に心地よい音が響き渡り、眩い光が充溢し、地上では大地が激しく鳴動した。

2B その頃、シェンラブはオルモルンリンで、弟子たちに“三



図像配置図 (Thangka N° 3)

つの壺”〔pe'u tse gsum〕のポンを説いていた。彼は、身体によって教化される者たちには、説示〔bstan pa〕という身体の壺〔sku'i pe'u tse〕を示し、語によって教化される者たちには、読誦〔bsgrag pa〕という語の壺〔gsung gi pe'u tse〕を示し、御心によって教化される者たちには、修行〔bsgrub pa〕という御心の壺〔thugs kyi pe'u tse〕を示した<sup>53)</sup>。

青い龍馬に跨った意の少年は、シェンラブの弟子たちの中に降り立った。意の少年は、シェンラブに礼拝を行い、五種の宝珠を捧げたのち、宝珠の小箱を開いて、サンポ・ブムティから託された手紙を読み上げた。「世間の北方にウーマ・ジャムキャ〔'od ma 'byam skya〕という国があり、そこにダンワ・ゾンプ〔dwang ba rdzong phu〕<sup>54)</sup>という城がある。その国王ト・ティジェ・タンポ〔gto khri rje thang po〕<sup>55)</sup>と王妃ト・チューデ〔gto dpyad de〕の間に、トブ・ドゥーデ〔gto bu dod de〕という王子がいる。この者は甚だ業が深く、「来世などというものは、嘘である」と言って、人間・馬・家畜などを殺害し、人々から略奪を繰り返している。ウーマ・ジャムキャ国で善を行う者たちは皆、トブ・ドゥーデに殺されてしまった。その結果、かの国では善を行うものは日中の星よりも少なく、悪を行うものは地面に生える草花よりも多くなっている。シェンラブよ、このトブ・ドゥーデという人物を教化するために、直ちにウーマ・ジャムキャに向かってほしい。」シェンラブは弟子たちにポンの教えを説いている最中であつたが、意の少年に説得され、ウーマ・ジャムキャへ向かうことにした。

2C シェンラブは八つの車輪がついた黄金の乗り物に乗り、その左右にはマロとユロが座った。意の少年は青い龍馬に乗ってシェンラブを先導した。シェンラブの身体からは眩い光明が放出し、空を鮮やかに照らした。シェンラブが通った道には、美しい花々が咲き乱れた。

### 3.2.2 偽りの帰依

2D トブ・ドゥーデは武装した軍隊を率い、目に映ったものすべてを殺害し、人々から略奪を繰り返していた。シェンラブはトブ・ドゥーデの隊列を見つけると、身体から光を放ち、さらにその光の中から、以下の四つの忿怒尊を現出せしめた。

東には“炎の忿怒尊，ソウォ・ウグ”〔dbal gyi khro bo zo bo dbu dgu〕

南には“炎の忿怒尊，ルムポ・ツェグ”〔dbal gyi khro bo rum po rtse dgu〕

西には“炎の忿怒尊，ルチョ・デグ”〔dbal gyi khro bo ru co sde dgu〕

南には“炎の忿怒尊，セマ・ゴグ”〔dbal gyi khro bo ze ma mgo dgu〕

彼らの皮膚は群青色であり，皆，九つの頭と4本の足，18本の手を持っていた。九つの頭には，ガルータ・牛・鱈・獅子・ヤク・虎・豹・熊・岩熊の顔がついており，18本の手には，矢・盾・縄・鉤・斧・戦斧・鋸・金槌・釘・火で熱せられた石・剣・鉄の鎖・刀・小刀・カルの小槌<sup>56</sup>・鉄の小槌・鎧甲・円輪を持っている。また，4本の足には，交杵金剛・八輻の円輪・九輪の万字・燃えさかる火山が繋がっている。

2E 恐ろしい忿怒尊たちの姿を見て，トブ・ドゥーデの軍隊は狼狽し，ある者は硬直し，ある者は失神した。シェンラブの力を目の当たりにしたトブ・ドゥーデは，馬から降りて鎧を脱ぎ，降参の意志を表明した。

2F シェンラブが黄金の乗り物から降りると，意の少年はユンドウン（逆万字）の旗を立て，マロとユロは宝珠の天幕を設置した。トブ・ドゥーデは，シェンラブを最高の食事でもてなした。空からは神々が舞い降り，地下からは龍が姿をあらわし，そこに人間たちも加わり，シェンラブに供物を捧げ，花を撒き，礼拝を行った。シェンラブはトブ・ドゥーデに“存在の流れのボン”〔srid pa brgyud kyi bon〕<sup>57</sup>を説いた。

しかし，トブ・ドゥーデの心には依然として驕りと欲望が渦巻いていたため，昼間はシェンラブの前でボンの教えに耳を傾けたが，夜になるとふたたび悪行に手を染めた。こうしてシェンラブは，トブ・ドゥーデを完全に教化するまでには到らなかった。

### 3.2.3 紛争の調停

4A シェンラブはその後，一旦ウーマ・ジャムキャを離れ，八部衆〔lha ma srin sde brgyad〕の世界へと向かった。八部衆たちの紛争を調停するためである。シェンラブがやってくると，八部衆たちは彼の前に集まり，礼拝して花を捧げた。神のボン教徒であるヨンス・ダクパ（悉く清浄なる者〔yongs su dag pa〕）は，シェンラブに次のように言った。「嘗て，貴方の御父様<sup>58</sup>が八部衆の争いを鎮めたことがあります。世間にくら希望があっても，八部衆の世界が鎮まることがなければ，世間でも争いが起き，ボンの教えは消滅することになりましょう」。シェンラブは神と魔鬼の境界に，キョクパ・ツェグ〔skyogs pa rtse dgu〕という神殿を建て，そこにシーパー・スオシ（4人の存在の調停人〔srid pa'i gzu bo bzhi〕），ケルパー・ワンボギュー（8人の劫の主〔bskal pa'i dbang po brgyad〕），ジェンウエー・シェルチェワガ（5人

の元素の裁定人〔'byung ba'i zhal che ba lnga〕<sup>59)</sup>を集めた。そして彼らに“存在のボン”〔srid pa'i bon〕を説いて、八部衆たちの仲裁をはじめた。

### 3.2.4 トブ・ドゥーデの救済

3A シェンラブが八部衆たちの仲裁を行っていた頃、ウーマ・ジャムキャではトブ・ドゥーデが死の病に苦しんでいた。彼の上半身は燃えさかる炎のように熱く、下半身は氷のように冷え切っていた。朦朧とした意識の中で、トブ・ドゥーデは従者たちに次のように言った。「私はこれまで様々な悪行を行ってきた。だから、私が三悪趣に生まれ変わることは確実であろう。シェンラブは今頃、八部衆たちにボンの教えを説き、彼らの紛争の仲裁に入っている筈である。私が死んだら、シェンラブを招き、私を三悪趣の世界から救い出してくれるよう、頼んで欲しい」。そのように告げると、トブ・ドゥーデの五官は次第に衰え、彼を取り巻く従者たちの姿も見えなくなり、やがて息をひきとった。

3B トブ・ドゥーデが死ぬや否や、死の王・ミクパ〔gshin rje smrigs pa〕が3本足の黒いラバに乗って姿を現した<sup>60)</sup>。

3C ミクパは鉄の鉤針で心臓を牽き、鉄の縄を首に巻き付け、鉄籠の中にトブ・ドゥーデを押し込むと、地獄の方角へ向かって走り出した。トブ・ドゥーデは恐怖のあまり、3度叫び声を上げた。

3D シェンラブはその様子を智慧の眼で御覧になり、慈悲の涙を流した。そして八部衆たちの間で起きていた紛争の仲裁を、意の少年と、ユロとマロに任せ、自分はトブ・ドゥーデのもとへと向かった。シェンラブは神変の足〔rdzu 'phrul gyi zhabs〕を持っているので、3歩でトブ・ドゥーデのもとに到ることができた。シェンラブがやってきたことを知ると、死の王や地獄の有情たちはシェンラブに恭しく礼拝を行った。

3E トブ・ドゥーデは、頭を鳥の頭を持つ魔物に啄まれ、足を獣の頭を持つ魔物に噛まれ、内蔵を動物の頭を持つ魔物に喰われ、腰を家畜の頭を持つ魔物に喰われた。苦しみに打ちひしがれるトブ・ドゥーデの姿を見て、シェンラブは再び慈悲の涙を流した。

3F 死者が集まる山の麓には地獄の住人たちが集まり、トブ・ドゥーデが生前に行った悪行を記した帳面を開いて、彼を何処に連れて行くか協議が行われていた。ある者は、「この者は生前、甚だ怒りが激しく、殺生を多く行ったのであるから、無間地獄に連れて行くべきである」と言った。ある者は「この者は生前、欲望が甚だ大



きく、強奪を多く行ったのであるから、餓鬼の世界に連れて行くべきである」と言った。ある者は「この者は生前、甚だ愚昧であったうえ、動物たちに労役を強いたのであるから、畜生の世界に連れて行くべきである」と言った。

3G 鉄籠の中のトブ・ドゥーデにシェンラブが3回、唾を吐きかけると、トブ・ドゥーデの傷は癒え、立ち上がれるまでに回復した。シェンラブは、トブ・ドゥーデがいま経験している苦しみが、生前に行った様々な悪行の報いであることを教え、さらに、人間・馬・鳥・獣・動物・家畜などを殺すことによって生じる悪業について説いた。トブ・ドゥーデは自分が生前に行った悪行を悔い、地獄の苦しみを受け容れる決意をした。

3H トブ・ドゥーデは、心臓を鉤針で牽かれ、首は鉄の鎖をかけられ、生前に殺害した有情たちに身体を運ばれて、十八種の地獄を巡ることになった。しかし、彼の顔には静かな微笑みが浮かんでいた。地獄のどんな責め苦に対しても、もはや苦痛を感じることはなかった。トブ・ドゥーデの心には、以前のような欲望や慢心や嫉妬心が消え去っていたからである。

3I シェンラブが八部衆の世界に戻ると、彼らの紛争はマロとユロ、意の少年によって、既に調停されていた。シェンラブは彼らの偉業を讃え、争いを調停することによって積まれる功德の大きさについて説いた。そして、彼らとともにオルモルリンへ戻ることにした。

オルモルリンに帰る途中、シェンラブは白い人<sup>61)</sup>と白い馬に取り囲まれた。彼らはトブ・ドゥーデの最期を看取った家来たちであり、トブ・ドゥーデの最期の言葉をシェンラブに伝えにやってきたのである。彼らはトブ・ドゥーデを悪趣から救い出して欲しいとシェンラブに懇願した。するとシェンラブは「彼は悪業の報いによっていまは地獄に居るが、心はユンドウンの菩薩である」と言って、再びウーマ・ジャムキャ国へと向かった。

3J ウーマ・ジャムキャ国のダンワ・ゾンプク城には、トブ・ドゥーデの家族や親族、そして大勢の国民が集まっていた。シェンラブは彼らに対し、次のように指示した。「トブ・ドゥーデの身体・言葉・心の障碍を浄化するために、神とシェンとシーパを象徴する三つの頂を有する水晶の塔を建てなさい。そして様々な有情の型をつくり、肉や血をかたどったトルマ<sup>62)</sup>を並べなさい。それが終わったら、白い紙に人の姿を描き、その中心にトブ・ドゥーデの名前を書いて、中央と四方に“五つの勇者の種子” [dpa' bo 'bru lnga], 即ち、右足にはヤム [yaM], 左足にはラム [raM], 右手にはカム [kaM], 左手にはスム [sruM], 中心にはオーム [OM]と書きなさい。」

マロとユロは音楽を奏でながら、様々なヤタを身代わりとして捧げ<sup>63)</sup>、さらに沢山の“報復のトルマ”〔lan chags gtor ma〕を祭壇に並べた。意の少年は“五つの勇者の種子”から生まれた“五つの大界”〔klong chen po lnga〕<sup>64)</sup>に住する“100の神とシェン”〔lha gshen brgya〕(【補遺4】参照)の名を書いた札〔mtshan byang〕を作り、それに礼拝を行うよう命じられた。

4B 意の少年が“100の神とシェン”のうち、先ず“ボンそのもの<sup>65)</sup>・永遠の界から生まれた二十の神とシェン”〔bon nyid g.yung drung kyi klong nas bskyed pa'i lha gshen nyi shu〕(【補遺4A】参照)の名前を唱え、供物を捧げ、礼拝を行うと、これらの神々とシェンが次々にヤタに到り、その後、地獄に降臨した。そして、神々の祈願により地獄は別の国土となり、シェンの祈願により地獄に住する有情の心は鎮められた。燃える鉄の館は宝珠の城となり、剣の葉をもつ木は宝珠がなる樹となり、燃える鉄の鉤針は善趣へと繋がる階段に変わった。さらにトブ・ドゥーデは“光り輝く宝珠の少年”〔rin po che'i khye'u 'od 'bar ba〕となり、彼を地獄へと導いた死の王・ミクパは“原初のシェン・幻術のボン教徒”〔ye gshen 'phrul gyi bon po〕となり、地獄の有情たちは善趣へと導かれた。こうして十八種の地獄は空じられ、トブ・ドゥーデも7日目には地獄から解放された。

4C 次にトブ・ドゥーデは餓鬼の世界に転生し、そこで武装した集団に取り囲まれた。神通力によってこれを知ったシェンラブは、「これは生前、トブ・ドゥーデの欲望が深く、施すことなく、ただ一方的に取るという行為を続けたことによる果である。三界の有情に食と財を施し、20の神とシェンに供物を与えて礼拝をせよ」と言った。シェンラブの言葉を受け、意の少年は“ボンそのもの・原智の界から生まれた20の神とシェン”〔bon nyid ye shes kyi klong nas bskyed pa'i lha gshen nyi shu〕(【補遺4B】参照)の名前を読み上げ、ユロとマロはそれらに供物を捧げ、礼拝を行った。すると、これらの神々とシェンがヤタに到り、その後、餓鬼の世界に降臨した。そして、神々の祈願により餓鬼の世界は別の国土となり、シェンの祈願により餓鬼に住する有情の心は鎮められ、彼らは善趣へと導かれた。こうして餓鬼の世界は空じられ、トブ・ドゥーデも7日後には餓鬼の世界から解放された。

4D 餓鬼の世界から解放されたトブ・ドゥーデは、次に畜生の世界に転生した。彼は牛ほどの大きさの蠍、犬ほどの大きさの蟻、山羊ほどの大きさの蜘蛛、目が九つあるカエルなどに囲まれ、肉体を喰われた。神通力によってこの様子を見たシェンラブは、「これは生前、トブ・ドゥーデが甚だ愚昧であり、動物たちに労役を課したことによる果である。三界の有情に沢山の身代わりのトルマを捧げ、20の神と

シェンに供物を与えて礼拝をせよ」と言った。意の少年が「ボンそのもの・虚空の界から生じた20の神とシェン」〔bon nyid nam mkha'i klong nas bskyed pa'i lha gshen nyi shu〕(【補遺4-3】)の名前を読み上げると、ユロとマロがそれらに供物を捧げ、礼拝を行った。すると、これらの神々とシェンたちがヤタに到り、その後、畜生の世界に降臨した。そして、神々の祈願により畜生の世界は別の国土となり、シェンの祈願により畜生の世界に住する有情の心は鎮められた。暗闇は明澄に輝く灯明となり、凍った大海は穀物と薬が豊富な林へと変わった。こうして畜生の世界は空じられ、有情たちは善趣へと導かれた。トブ・ドゥーデも7日後には畜生の世界から解放された。

4E 畜生の世界から解放されたトブ・ドゥーデは、次に人間界の辺地に転生した。誕生するや否や、彼はありとあらゆる病に冒された。貧しさのため食べることも飲むこともできず、辺地に住んでいるため有効な薬を手に入れることもできない。神通力によってこの様子を見たシェンラブは、「これは生前、トブ・ドゥーデがたいへん嫉妬深く、他の人々を誹謗したことによる果である。三界の有情に沢山の身代わりのトルマを捧げ、20の神とシェンに供物を与えて礼拝をせよ」と言った。シェンラブの言葉に応え、意の少年が“ボンそのもの・元素の界から生じた20の神とシェン”〔bon nyid 'byung ba'i klong nas bskyed pa'i lha gshen nyi shu〕(【補遺4-4】)の名前を読み上げると、ユロとマロがそれらに供物を捧げ、礼拝を行った。すると、これらの神々とシェンたちはヤタに到ったのち、人間界の辺地に降臨した。そして、神々の祈願により辺地の人間の世界は別の国土となり、シェンの祈願により人間界の辺地に住む有情の心は鎮められた。それまで人がいなかった辺地は、豊かで善良な多くの人々によって満ち溢れた。有情たちは満たされ、トブ・ドゥーデも7日後には人間界の辺地から解放された。

4F 人間界の辺地から解放されたトブ・ドゥーデは、次に阿修羅の世界に転生した。阿修羅の世界では、空から“上のイエン〔の領域に住する〕13のニエンポ”〔yar g.yen gnyen po bcu gsum〕が、中空から“中間のイエン〔の領域に住する〕9のトゥーポ”〔bar g.yen gtod po dgu〕が舞い降り、大地からは“地のイエン〔の領域に住する〕11のチェワ”〔sa g.yen che ba bcu gcig〕が姿を現し、ある者はトブ・ドゥーデを矢で突き、ある者は石で殴り、ある者は火を噴きつけた。神通力によってこの様子を見たシェンラブは、「これは生前、トブ・ドゥーデがたいへん高慢で、戦を好んだことによる果である。三界の有情に沢山の身代わりのトルマを捧げ、20の神とシェンに供物を与えて礼拝をせよ」と言った。シェンラブの言葉を受け、意

の少年が“ボンそのもの・存在の界から生じた20の神とシェン”〔*bon nyid srid pa' i klong nas bskyed pa'i lha gshen nyi shu*〕（【補遺4-5】参照）の名前を読み上げると、ユロとマロがそれらに供物を捧げ、礼拝を行った。すると、これらの神々とシェンはヤタに到ったのち、阿修羅の世界に降臨した。そして、神々の祈願により阿修羅の世界は別の国土となり、シェンの祈願により阿修羅たちの心は鎮められた。銅の丘と鉄の平原は薬草と花が豊富な林となり、鋭利な武器は蓮華の茎となった。トブ・ドゥーデに復讐の炎を燃やしていた者たちは、虹の光の中にとけ込み、或いは美しい蓮華の花になった。トブ・ドゥーデも35日後には阿修羅の世界から解放された。

4G 阿修羅の世界から解放されたトブ・ドゥーデは、次に33の神々が住む世界（三十三天）に転生した。彼は賢い馬に跨り、如意牛〔*'dod 'jo yi ba*〕の乳を搾り、玉蜀黍の葉を食し、沐浴の池に入って汚れを洗い流し、花の家屋の中に居を据えた。サフランの花が咲き乱れる草山を散策しながら、神々が奏でる美しい音楽に耳を傾けていた。

4H 神通力によってこの様子を見たシェンラブは、トブ・ドゥーデの従者たちに、彼が神々の世界に転生したことを告げた。シェンラブはさらに、トブ・ドゥーデを神々の国から解放しようと試みた。「神々の国に住する者を教化することは大変難しい。意の少年、ユロとマロ、そしてトブ・ドゥーデの従者たちよ、汝等は再度、“100人の神とシェン”の名前を唱え、それに供物を捧げ、礼拝を繰り返しなさい」。シェンラブの言葉を受けて、意の少年、ユロとマロ、そしてトブ・ドゥーデの従者たちが、神々とシェンの供養を7日間続けると、トブ・ドゥーデはシャムポ・ハツェ神殿の入り口に転生した。彼はそこで1本の花を受け取ると、神殿の周囲を巡り、礼拝を行った。この様子を見たシェンラブは人々にそれを報告し、トブ・ドゥーデを迎えに行くよう、意の少年に命じた。

青い龍馬に跨った意の少年を見つけると、トブ・ドゥーデは彼に恭しく礼拝を行った。そして2人は龍馬に跨り、ウーマ・ジャムキャのダンワ・ゾンプク城へと向かった。

3K ダンワ・ゾンプク城に到着すると、トブ・ドゥーデはウーマ・ジャムキャの人々に迎えられた。トブ・ドゥーデとの再会を果たした人々は涙し、トブ・ドゥーデもまた、過去の出来事を脳裏に浮かべて涙を流しながら、シェンラブに礼拝を行った。

3L そこでシェンラブは、トブ・ドゥーデに、100の神々とシェンたちの名を唱えるよう命じた。そして自身は薬と穀物の灯明をともし、合掌したのち、不思議なマン



トラを口にしながら、神々とシェンの名前が書かれた札を燃やした。この儀式を7日間続けたところ、ウーマ・ジャムキヤの人々は次々に覚醒を遂げていった。こうしてシェンラブは、ウーマ・ジャムキヤでの教化を終え、再びオルモルンリンへと帰っていった。

## 4 王妃グリーンマの誘惑

### 4.1 付属文書と和訳

###// bzhi ba nam par 'dren pa zhes pa'i mdzad pa bzhugs/

/dbus bstan pa'i gtso bo ston pa gshen rab mchog /'khor rgyal bo dwangs pa yi rang (yid ring) bya ba la/ phywa sras rgyal bo'i sras mo 'gu ring ma btsun mor blangs nas yod skabs/ yab rgyal bo yid bzhin 'byung bas sras dwangs pa yi rang la bka' bstal nas/ tshogs gsog mchod pa'i zhing du ston pa'i sgron ma spyang drongs shig gsungs pa bzhin/ (g.yas phyogs) shing rta la bzhugs te/ ston pa'i drung (steng) du song nas/ zhu ba de ltar phul bas/ yid kyi khye'u chung g.yung drung gtsug gshen rgyal ba ni rgyal bos bla mchod du bkur na legs zhes gsungs pa ltar gdan drangs te bla ma bsten/ bon gsungs pa yul khams kyi mi rnams sdig spangs dge sgrub la 'bad nas theg pa chen po'i lam zhugs mang du byung/

skabs shig rgyal bo ni shar phyogs kyi rgyal phran gzhan zhig tu song shul/ btsun mo 'gu ling mas slob dpon la chags sems me ltar 'bar na yang/ re ba grub pa lta ci/ na bza' tsam la reg ma nus pas gnod sems bzung nas slob dpon gnas nas bskyod/ de'i nyes pas 'gu ling ma mdze nas gdungs/ klu bdud sdom sdig tu brdzu nas khong zhugs/ (g.yon) de skyob pa'i ched ston pa dang slob dpon gnyis slar gdan drangs/ sgrib sbyong mun sel sgron ma'i cho ga gsungs nas legs par bskyabs/ gzhan yang rgyal bu drag byed ha la ra tsa sogs kyi don mdzad pa rnams mang ngo/ mdzad bcu las/ chags pa'i rgya mtshor byin ba'i 'gu ling mas/ slob dpon smad pa'i skyon gyis mdze yis gdungs/ thugs rje nyi mas sdug bsngal mtsho bkams nas/ lha mor bsgyur bar mdzad la phyag 'tshal lo/ zhes pa ltar bzhangs pa'o// (lha bris pa ni/ reb gong bon brgya dgon pa'i grwa btsun nam mkha' rgyal mtshan yin/)

4 番目、全てをお導きになられた（普導）という御事績。

中央は教説の主、トンパ・シェンラブ。周囲 [は以下の通り。] ダンワ・イリンという王が、チャの神の王の娘 [である] グリーンマを妃として娶っていたとき、ダ

ンワ・イリンの父王イシン・ジュンワが子息であるダンワ・イリンに命じ、資糧を積む供養の畑として、[トンパ・シェンラブという] 教師の灯明をお招きするようにと仰った[。父王のこの言葉の] 通り、(右側)[ダンワ・イリンは] 乗り物に乗って、トンパ[シェンラブ] の御前に至り(上部)、そのようお願い申し上げたところ、[シェンラブは、] 意の少年、ユンドウン・ツクシェン・ギャルワを、王子が供養するラマとして奉じるのが良いと仰った[。そのお言葉] とおり、[ダンワ・イリン王は意の少年を] お招きして、ラマとして依り所とした。[意の少年が] ポンをお説きになったところ、国民たちは悪を放じ、善の実践に努め、[その結果、] 大乘の道に参入するものが多く現れた。ある時、[ダンワ・イリン] 王が東方にある他の小国に出かけている間、王妃グリンマが阿闍梨[である意の少年] に欲望の炎を燃やしたが、望みがかなうどころか、服に触れることもできなかったので、恨み心を抱き、阿闍梨を[その] 場から追い出した。その罪により、グリンマは病<sup>66)</sup>に苦しみ、魔の龍が悪い蜘蛛に姿を変えて[グリンマの体] 内に入った。(左) それ [=グリンマ] を助けるために、トンパ[・シェンラブ] と阿闍梨の2人が再び招かれ、障碍を浄化し、闇を取り除く儀式を説いて[グリンマを] 正しく救った。[この] 他にも、凶暴な王子ハララツァなど[を教化して、彼ら] の利を為したことなど[、シェンラブの御事績は] 多い。[以上のことは、] 『御事績の称讃』<sup>67)</sup>に「欲望の海に沈んだグリンマは、阿闍梨を誹謗した罪によって病に苦しんだ、[シェンラブの] 慈悲の太陽が苦の海を干上がらせ、[グリンマを] 女神に変えたという御事績に対し、礼拝いたします。」と説かれている通りである(絵師は、レプコンのポンギャ寺の僧、ナムカー・テンジン)。

## 4.2 図像詳解

4番目のタンカに描かれる図像は、『セルミク』第6章「300の女神たちに礼拝を行う」[lha mo sum brgya la phyag `tshal ba] [ZM: 114-178] に記される物語の内容と一致している。標本名には「教化が困難な者を教化したという御事績」とあり、付属文書には「全てをお導きになられた(普導)という御事績」という表題が掲げられているが、これは、このタンカに描かれる事績以外にも、教化が難しい多くの衆生を教化したとされるシェンラブの事績を讀えたものと思われる(但し、付属文献に言われる王子ハララツァその他の教化物語については、このタンカには描かれていない)。以下、主に『セルミク』の叙述に基づき、各図像の記述・解説を試みたい。

#### 4.2.1 ダンワ・イリン王の訪問

1 トンバ・シェンラブ・ミボ(中央)

2A オルモルンリンのシャムポ・ハツェ神殿でポンの教えを説くシェンラブ。このときシェンラブは、左右にユロとマロを随え、“5人の偉大なるシェン”〔gshen chen lnga〕<sup>68</sup>と、その他の弟子たちに“四つのポンの門と宝蔵を合わせた五つの教え”〔bon sgo bzhi mdzod dang lnga〕<sup>69</sup>を説いていた。

2B 或る日、オルモルンリンの東方にある王国、ウーモ・リンドゥク〔hos mo gling drug〕の王ダンワ・イリン〔dang ba yid ring〕がバルポ・ソギェー城を



図像配置図 (Thangka N° 4)

訪れ、シェンラブの招聘を求めた。しかしシェンラブは、「いまは5人の偉大なるシェンたちに、“四つのポンの門と宝蔵を合わせた五つの教え”を説いているから、これを中断することはできない」と言って、これを断った。代わりに意の少年がウーモ・リンドゥクへ派遣されることになった。

2C 意の少年はトの(教えが収められた)経箱<sup>70</sup>を二つ背負い、“幻術の文字の衣”を羽織って、青い龍馬に跨った。そして、ダンワ・イリン王に先導され、ウーモ・リンドゥクへと向かった。

2D ギムシャン・ナクポ河〔chu gyim shang nag po〕に到着すると、意の少年は青い龍馬から降りた。見送りにきていたユロとマロは、意の少年との別れを惜しんだ後、青い龍馬を連れてオルモルンリンへ戻った。

#### 4.2.2 意の少年の布教

3A 意の少年は、ダンワ・イリン王とその従者たちに導かれてギムシャン・ナクポ河を渡った。やがてウーモ・リンドゥクに到着すると、ダンワ・イリン王の妃や子供たち、家来たちや国民、動物たちが意の少年を歓迎した。ある者はカター(礼布)

を振り、ある者は喇叭を吹き、ある者はシャン<sup>71)</sup>を鳴らし、ある者は礼拝し、ある者は供物を差し出した。

3B ダンワ・イリン王の居城、バルワ・ツェグ城〔*'bar ba rtse dgu*〕では、歓迎の宴が設けられた。意の少年がポンの教えを説きはじめると、人々はこれを熱心に学んだ。彼らの中からは多くの成就者が誕生した。

3C 意の少年はバルワ・ツェグ城でポンの教えを説く傍ら、屢々、ユンドウン・ミクグ湖〔*mtsho g.yung drung mig dgu*〕の畔、デルキャブ・クント〔*bdal khyab kun spro*〕という街の西方にある、タンケー・ペマリ〔*'phrang skas pad ma ris*〕という水晶の洞窟に出かけた。意の少年が洞窟に近づくと、鳥たちが美しい声で囀り、毛並みのよい動物たちが出迎えた。

3D ダンワ・イリン王の父母や子供たちも、意の少年を手篤くもてなした。彼の布教活動は、王とその家族によって支えられた。タンケー・ペマリの周辺に住む動物たちも、すすんで彼の身の回りの世話をした。

3E 水晶の洞窟タンケー・ペマリには、神々や龍たちの他、魔・閻魔・羅刹・夜叉などが、意の少年に供物を捧げるために参上した。意の少年はここで3年間に渡ってポンの教えを説いた。すると有情は次第に善を行うようになり、やがて心が浄化され、肌が白くなっていった。

#### 4.2.3 王妃の誘惑

3F ダンワ・イリン王には、チャの国から嫁いだグリンマ〔*'gu ling ma*〕<sup>72)</sup>という妻がいた。彼女は意の少年が説くポンの教えには耳をかさず、その代わり、彼に激しい愛欲の炎を燃やした。王が城を留守にしていたある日、グリンマは子供たちを城の屋上に行かせ、家来たちを城から追い出し、意の少年と2人きりになる時間をつくった。彼女は、「意の少年よ、あなたは何と美しいお方。欲望というものがなければ、貴方の身体も誕生することはなかったでしょう」と言って、意の少年を誘惑した。しかし、グリンマは意の少年の身体に触れることはできなかった。意の少年は王妃の行為に困惑し、タンケー・ペマリの洞窟へと去ってしまった。

3G プライドを傷つけられたグリンマは激高し、着物の帯を切り、カーテンを裂き、身体に自分で爪痕をつけて、意の少年に暴行されたと吹聴してまわった。旅先から急遽呼び戻されたダンワ・イリン王は、妻の話を信じ、「あのような御方であっても、欲望を捨てることができないものか」と言って嘆いた。意の少年が水晶の洞窟から戻ってくると、人々は皆、冷ややかな眼で彼をみつめた。もうここに居る必要



がないと察した意の少年は、静かにその場をあとにした<sup>73)</sup>。

#### 4.2.4 鍛冶屋と金の延べ棒

4A バルワ・ツェグ城をあとにして歩いていると、意の少年は途中で一軒の鍛冶屋を見つけた。黄昏が迫ってきたこともあり、意の少年は鍛冶屋の夫婦に暖をとりたいと頼んだ。彼らは快く意の少年を家の中に招き入れた。

4B 意の少年が去った後、鍛冶屋の夫婦は、しまっておいた金の延べ棒が無くなっていることに気づいた。意の少年の仕業であると直感した鍛冶屋の男は、黒い剣を握って意の少年を追いかけた。

4C 峠を一つ超えたところで、鍛冶屋の男は意の少年を発見した。彼は意の少年に黒い剣をつきつけ、恩を仇で返した意の少年の不義を責めた。しかし、男が意の少年に剣を突きつけるや否や、黒い剣は忽ち黄金に変わった。そして意の少年は次のように言った。「金の延べ棒は、いまごろ汝の妻が肥料の中から見つけ出していることだろう。私は偷盗することのないボン教徒である。どうして汝の金を盗むことがあろうか」。

4D 一方、意の少年がウーモ・リンドックを去った後、ダンワ・イリン王は心樂まず、動物たちはみな南方を向いて悲しそうに鳴いた。王はいてもたってもいられず、とうとう意の少年を捜しに行く決意を固めた。雄馬に跨って峠を三つ、谷を三つ超えると、微笑みながら歩いてくる1人の黒い男に出会った。王が「汝はとても嬉しそうにしているが、何か欲しいものでも手に入れたのか。それから、向こうへ歩いていく人と会わなかったか」と尋ねると、黒い男は「金の剣をもらったから喜んでいるのです。その人なら、もう遠くへ行ってしまう」と答えた。

5A ダンワ・イリン王は急いで意の少年を追いかけた。そして、今まさにシンガ・ナクポ河〔chu bo sing ga nag po〕を渡ろうとしている意の少年を見つけた。王は意の少年を呼び止めようとしたが、彼はたった3歩でその河を超え渡ってしまった。シンガ・ナクポ河は深く、波も高いため、泳ぎ渡ることもできない。意の少年は向こう岸から、女という生き物の欲深さについて説いた。ダンワ・イリン王はその教えをしっかりと受け止め、雄馬から降りて、意の少年に深々と礼拝をした。その後、王は船頭を呼んでシンガ・ナクポ河を渡り、意の少年を捜したが、既に彼の姿は無かった。王はあきらめて再び河を渡り、ウーモ・リンドックへと戻っていった。

4E 鍛冶屋の男は家に帰り、黄金の剣を妻に見せたところ、妻は飛び上がって喜んだ。

#### 4.2.5 グリンマの救済

5B シンガ・ナクボ河を超えた後、意の少年はウーモ・リンドウクの南方にある、オルプク・ガンデン [’ol phug dga’ ldan] という国の中央に聳えるツクルム・バルワ山 [ri gtsug rum ’bar ba] の森に居を据えた。彼のもとには神々や龍たちが集まり、供物を捧げるなどして、身の回りの世話をした。また、この山に住む猿の菩薩たちは、果物や葉を集めて、意の少年に捧げた。

意の少年が神通力によってウーモ・リンドウクの様子を透視したところ、人々は依然としてグリンマの話を信用し、意の少年を誹謗中傷したうえで、「ポンの教えは嘘である」と言って様々な悪行に手を染めていた。そこで意の少年は、グリンマを懲らしめるために、次のような方法を思いついた。まず、黒龍を派遣してグリンマに病の呪いをかける。そして、神変の占い師 [rdzu ’phrul gyi mo pa] をグリンマのもとへ派遣し、「汝は得難い人を誹謗したために、この病にかかったのである。どんな方法を用いてもこの病は治癒しないだろう。しかし、汝が陥れた人とシェンラブを招き、正しい言葉を唱えれば、この病は治るかもしれない」という占いをさせる。こうすることによってグリンマは改心し、ポンの教えが再び広まることになるだろう、と意の少年は考えた。

意の少年はさっそく、ツクルム・バルワ山の麓にある龍の国から、ジンパ・ラクマン [’dzin pa lag mang] という黒龍を呼んだ。この龍は人々を病に陥れる邪悪な龍で、身体は青黒く、360本の手足を持ち、額には眼が一つ付いている。意の少年が神通力によって様々な肉のトルマ<sup>74)</sup>を現出させ、それを与えたところ、黒龍はたいそう喜んだ。彼の不思議な力に魅せられた黒龍は、「このような素晴らしい力を持つ教えを破壊しようとする敵はどこにおる。私とその者に罰を与えよう」と言った。意の少年は、「ここから北方にウーモ・リンドウクという国があり、その王城バルワ・ツェグにグリンマという王妃が居る。そのものは私の教えを破壊しようとする者である。彼女の身体を病で冒しなさい」と命じた。黒龍はすばやく飛び上がり、ウーモ・リンドウクへと向かった。

3H 黒龍はウーモ・リンドウクのバルワ・ツェグ城に至り、眠っていたグリンマの口から心臓の中に入って、360本の手足を脈官の中に伸ばした。グリンマが朝めざめると、体中が痒く、心が重い。その後、占い師による治療が続けられたが、1年経っても2年経っても、妃の病が治ることはなかった。

その後、意の少年は1人の占い師を現出し、ウーモ・リンドウクに派遣した。クンシェー・タンポ [kun shes thang po] というこの占い師は、バルワ・ツェグ城に

到着すると、ダンワ・イリン王とその家族たちの前に参上した。王はこの占い師に対し、「私の妻は長い間、不治の病に冒されています。何故こんな病に罹ってしまったのでしょうか。一体、どんな魔の仕業でしょうか。どんなト<sup>75)</sup>の儀礼を行えば、妻は治るでしょうか。もし妻の病を治してくださるのなら、私の国土の一部を差し上げましょう」と言った。するとクンシェー・タンボは、九つの占いの道具〔mo cha sna dgu〕を並べて占いを行い、王とその両親にその結果を告げた。「王妃グリーンマは、得難い人を陥れたために、今その罰を受けているのである。彼女が陥れた人物と、シェンラブをこの地に招きなさい。それ以外は何をしても無駄である。」

2E ダンワ・イリン王は家来たちを南方へ派遣し、意の少年を連れ戻すように命じた。そして自分は四つの銅の車輪がついた乗り物にのり、大勢の家来と奏楽隊を連れて西方のオルモルンリンへと向かった。オルモルンリンのバルボ・ソギュー城に到着したダンワ・イリン王は、それまでの経緯をシェンラブに話した。するとシェンラブは「5人の偉大なるシェンたちよ。汝たちはもう偉大なるポンの教えを説く時期がやってきた。五つの輪廻の門を閉ざしに行きなさい。私は衆生を救うために東方の国へと向かう。私が戻ってくるまでの間、残された弟子たちは私の教えを守り、継続してポンの教えを実践しておきなさい」と告げた。

2F シェンラブは、ユロとマロとともに八つの黄金の車輪が付いた乗り物にのり、ダンワ・イリン王に導かれてウーモ・リンドックへと向かった。

3I ウーモ・リンドックに着くと、シェンラブは意の少年が居ないことに気づいた。グリーンマは子供たちに促され、とうとう真実を話す決心をした。グリーンマの話聞いたシェンラブは「グリーンマよ、汝はたいへん煩惱が多い。意の少年をここへ再び招き、彼の目の前で汝が為した罪を告白しなければ、汝の病は治ることはないだろう」と言った。

5C シェンラブは神通力によって意の少年の所在を確認すると、意の少年をツクルム・バルワ山の森から連れ戻すようユロに命じた。ユロは青い龍馬にのって森に向かい、意の少年をウーモ・リンドックに連れ戻した。

3J ウーモ・リンドックに到着すると、意の少年は、ダンワ・イリン王やウーモ・リンドックの人々、鳥・象・馬などの動物たちに歓迎された。

3K グリーンマは過去の罪を告白し、シェンラブと意の少年に礼拝したのち、気を失って倒れた。不治の病に蝕まれたグリーンマの姿をみて、ダンワ・イリン王と子供たちは泣き崩れ、シェンラブの眼からも涙がこぼれた。彼女を哀れに想った意の少年は儀式を執り行い、グリーンマの身体から黒い蜘蛛を取り出した。次にシェンラブがダ

リンマに3度唾液を吹き掛けると、彼女の身体から黒龍が姿をあらわした。黒龍はシェンラブの唾液によって浄化され、今後は有情に害を与えないと誓った。そこでシェンラブはこの黒龍に“寂靜なる居士”〔dge bsnyen zhi ba〕という名前を付けた。

3L グリンマの障碍が完全に浄化されたかどうか調べるために、シェンラブはシェンラ・ウーカルに礼拝を行った。すると、シェンラブと意の少年、マロとユロ、王とその家族の足下に鮮やかな蓮華の花が咲いた。しかし、グリンマの足下に咲いた蓮華だけが、すぐに燃えて無くなってしまった。

3M グリンマの障碍を完全に浄化するために、シェンラブは彼女の身体を聖水と薬で洗い清め、香を焚いたのち、“300人の女神たち”〔lha mo sum brgya〕（【補遺5】参照）の名を唱えた。そしてグリンマは、シェンラブが唱える女神の一人一人に対し、誠心誠意の礼拝を行った。

グリンマが「過去の100の女神」〔'das pa'i lha mo〕（【補遺5-1】参照）に礼拝を行うと、彼女の心は次第に静まり、全てのものに対して優しく、自分の子供のように接することができるようになった。次に、「現在に御座す100の女神」〔da ltar bzhus pa'i lha mo brgya〕（【補遺5-2】参照）に礼拝を行うと、黒龍の毒に蝕まれた傷や癒え、身体から流れ出ていた膿が止まり、醜い外見が次第に回復して、五毒の苦しみが心から消えていった。そして「未来の100の女神」〔ma byon pa'i lha mo brgya〕（【補遺5-3】参照）に礼拝を行うと、グリンマの身体は優れた相を具えるようになり、身体からは光明が十方に放たれ、言葉も耳に心地よい響きをもつようになり、彼女が言葉を発すると十方から有情たちが集まってくるようになった。心は静まって穏やかになり、自他という区別や偏りがなくなった。こうして、グリンマの障碍は完全に浄化された。

グリンマはシェンラブに深々と礼拝をすると、シェンラブに対し、ダンワ・イリン王の血筋を途絶えさせないために、自分の娘ギャルメーマ〔rgyal med ma〕を妻として娶って欲しいと頼んだ。シェンラブは、人間の世界でポンの教えを弘めるためには、人間と同じように振る舞う必要があると考え、これを受け入れた。ウーモ・リンドゥクの人々は大変喜び、ある者は花を捧げ、ある者はシャンを鳴らし、ある者は幡を掲げ、ある者は供物を捧げて、2人の結婚を祝福した。

6 グリンマが女神たちに礼拝を行ったことにより、空には明澄な光が放たれ、耳に心地よい音響が響き渡り、過去・現在・未来の女神たちが姿を顕した。

3N ウーモ・リンドゥクの人々もまた、過去・現在・未来の障碍が浄化され、次々



に覚醒を遂げていった。

## 5 結 婚

### 5.1 付属文書と和訳

##/ /Inga ba khab bzhes pa'i mdzad pa bzhugs so/

/dbus kyi gtso bo rnam mkhyen ston pa gshen rab mchog yin la/ mdzad pa Inga ba'i skabs 'gro ba rang mthun gyi cha lugs su mngon par bstan nas snang tshul du khab bzhes pa la/ thog mar rgyal po dwangs pa yid ring gi don legs par grub nas/ de'i sras mo rgyal med gzhon nu ma btsun mor phul/ dga' ston phun sum tshogs pa byas/ (steng) rgyal sa khri smon rgyal bzhad du thams cad 'dus/ gzhan yang yul khri thang 'byams pa nas dpo rgyal 'bar ba'i sgron ma can gyis sras mo thang gi rgyal mo dang/ steng lha'i yul nas lha dbang brgya byin gyis sras mo lha lcam me long ma dang/ 'og klu'i yul nas klu rgyal gtsug na rin chen gyis sras mo klu mo 'od ldan ma dang/ tshangs spyod bram ze'i yul nas rgyal bo rigs mchog dpal gyis sras mo tshangs spyod tshul ldan ma dang/ gar chen gsas kyi yul nas gtsug tor rgyal bos sras mo gsas za ngang drug ma dang/ ri rgyal lhun po'i rtse nas phywa rje thang pos sras mo phywa za gung drug dang/ gangs can bod kyi yul nas kong rje rgyal bos sras mo kong za khri lcam dang/ sgo rje rgya yul nas rgya kong tse 'phrul gyi rgyal bos sras mo rgya za 'phrul sgyur ma sogs btsun mor phul nas 'khor gsum yongs dag gi mchod pa phul ba rnam kyang thugs dgyes pa chen pos bzhes shing brtse bas rjes su bzung nas/ rgyal 'bangs yul khams thams cad sangs rgya kyi bstan pa la dad gus ngang nas zhugs pa ni dgos pa legs par grub pa'o/ mdzad bcu las/ 'khor ba'i skyon gyis ma gos padmo ltar/ /rnam par dag cing gdul bya'i snang ngo ru/ /thabs shes gnyis smed nu rol rtsed mdzad/ /ye shes rgyas par mdzad la phyag 'thal lo/ /zhes gsungs pa'o// (lha bris pa ni/ reb gong bon brgya dgon pa'i grwa btsun nam mkha' bstan 'dzin/)

5 番目、妻を娶られたという御事績。

中央の主尊は遍智なるトンバ・シェンラブ様である。五つ目の御事績では、[シェンラブは] 衆生と自分が同じあり方 [である] と [人々に] 明白に示し、[そのように] 見える仕方として、妻と娶られた [。この] ことについては、先ず [シェンラブが] ダンワ・イリン王の目的を正しく果たすと、[ダンワ・イリン王は] その

娘であるギャルメーという少女を〔シェンラブの〕妃として呈上し、円満な宴が行われ（上）、王座ティモン・ギャルシェーに全て〔の人々〕が集まった。〔この〕他にも、ティタン・ジャムパ国からは、ポの王バルウェー・ドンマチェン王が娘のタンギ・ギャルモを、上の神の国からは、神の王・帝釈天が娘のハチャム・メロンマを、下の龍の国からは、龍の王・ツクナ・リンチェンが娘のルモ・オデンマを、梵行者バラモンの国からは、リクチョクペル王が娘のツァンチュー・ツルデンマを、ガルチェン・セーの国からは、ツクトル王が娘のセーサ・ガンドゥクマを、須弥山の頂からはチャの主であるタンボが娘のチャサ・グンドゥクを、右雪国チベットの国からは、コンジェ王が娘のコンサ・ティチャムを、ゴジェ・ギャの国からは、ギャ・コンツェ・トゥル王<sup>76)</sup>が娘のギャサ・トゥルギルマを、〔シェンラブの〕妃として呈上した。〔これにより、〕呈上した者、呈上された者、そしてシェンラブの妻となった者、供物を捧げた物などは、何れもたいへん喜んだ。シェンラブは妻たちを深い愛情をもって受け入れられ、〔妃たちの〕王・臣民・国民は皆、覚者〔＝シェンラブ〕の教えを信仰・尊敬し、〔その教えの実践の道に〕参入した。〔こうして、シェンラブの結婚の〕目的は正しく果たされたのである。〔以上のことは、〕『御事績の称讃』<sup>77)</sup>に「輪廻という害悪に汚れることのない蓮華のように、完全に清浄でありながら所化の姿で顕れ、方便・智慧が無二の少年の遊戯をなさり、智慧をお広めになった御事績に礼拝致します」と説かれている通りである（絵師はレブコンのボンギャ寺の僧、ナムカー・テンジン）。

## 5.2 図像詳解

五つ目のタンカはシェンラブが妻を娶った様子を描いたものである。付属文書にも言われるように、シェンラブがボン教の布教の過程で多くの娘を妃として娶ったとされる話は『セルミク』や『シジー』にも見られるが、このタンカにはシェンラブが前述のグリーンマの娘、ギャルメーマを妻として娶ったとされる逸話のみが描かれている。その内容は、『セルミク』第8章「シェンラブが妻を娶ったことについて」〔gshen rab kyis khab bzhes pa'i skor〕に記述されるものとほぼ一致する。以下、『セルミク』の叙述に基づき、各図像の記述・解説を試みたい。

### 5.2.1 シェンラブの結婚

- 1 シェンラブ・ミボ。
- 2 シェンラブは黄金の車に妻ギャルメーマ<sup>78)</sup>を乗せ、ギムシャン・ナクポ河〔chu

gyim shang nag po] の畔に到った。

- 3 意の少年は青い龍馬に跨り、オルモルリンのユンドゥン・グツェク山 [g.yung drung dgu rtsegs ri] の林に向かった。そこで、バラモンの子であるギュルワ・ロセル [bram ze'i bu 'gyur ba blo gsal] に会い、ギャルメーマの身体・言葉・心に優れた徴が具わっているかどうか調べて欲しいと頼んだ。そして意の少年は、シェンラブよりも一足先にオルモルリンに到着し、シェンラブが妃を娶ったと国中の人々に報告した。

- 4A シェンラブ、ユロとマロ、ギャルメーマは、ギムシャン・

ナクポ河を超え、やがてオルモルリンに到着した。すると、先ずバラモンの族の少年と少女たちが、白い絹布（カター）を振ってシェンラブを歓迎した。

- 4B 次に、王族の少年と少女たちが、朱砂の香を焚いてシェンラブを歓迎した。

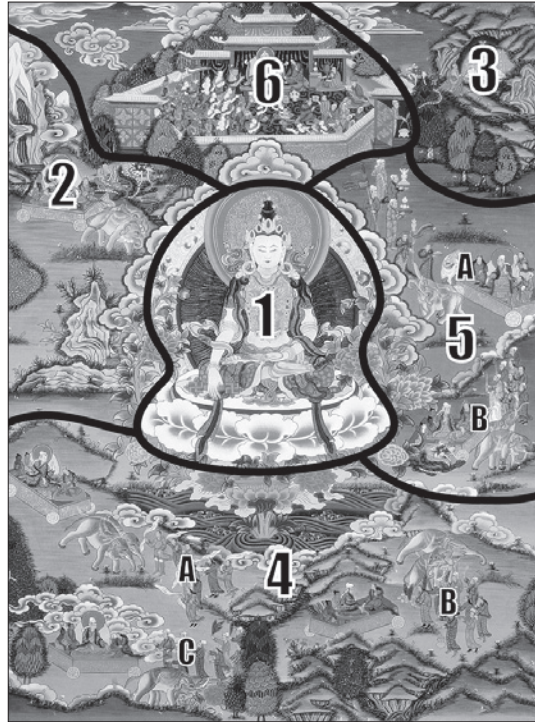
- 4C 最後に、一般の少年と少女たちが、沐浴のための道具を手にしてシェンラブを歓迎した。

- 5A バラモンの子であるギュルワ・ロセルは、シェンラブの妃となるギャルメーマを調べ、その身体・心・言葉の全てにおいて、彼女が優れた徴を有しており、あらゆる煩惱から離れた存在であるとシェンラブに告げた。

- 5B オルモルリンの人々も、これを聞いて大変喜び、シェンラブの前に集って彼の結婚を祝福した。

## 5.2.2 結婚の祝福

- 6 オルモルリンのバルポ・ソギー城には、シェンラブとギャルメーマの結婚を祝福するために大勢の人々が集まった。灌頂の儀式が執り行われたのち、ギャル



図像配置図 (Thangka N° 5)

メーマは青いトルコ石の座にすわり、シェンラブは黄金の座にすわった。2人の姿は、まるで少年と少女のようであった。

それから、シェンラブの父ギャルポン・トゥーカルのシャムポ（母方のおじ）<sup>79)</sup>であるチャ・カジエ・タンポ〔phywa kha rje thang po〕をはじめとする福運（チャ〔phywa〕）の国の人々や、シェンラブの父祖であるムギャル（ム族の王〔dmu rgyal〕）をはじめとするム〔dmu〕の人々<sup>80)</sup>、また、シェンラブが須弥山の頂に建てたハツェ・グンナム神殿に住する原初のシェン・永遠の菩薩〔ye gshen g.yung drung sems dpa'〕たちなどがバルポ・ソギエー城に集まり、ギェルメーマを讃え、2人の結婚を祝福した。

## 6 シェンラブの子供たち

### 6.1 付属文書と和訳

##/ /drug pa gdul bya'i don du sras sprul ba'i mdzad pa bzhugs/

/dbus bstan pa'i gtso bo ston pa sangs rgyas mchog /'khor nye ba'i sras brgyad 'khrungs tshul yin te/ thog mar (g.yas gong) rgyal sa khri smon rgyal bzhad du btsun mo hos za rgyal med ma la sras rgyal sras chen po gto bu 'bum sangs dang/ gcung dpyad bu khri shes gnyis 'khrungs nas gso dpyad bdu rtsi'i bon sgo mams spel/ dpo za thang gi rgyal mo la rgyal saras lung 'dren gsal ba dang/ gcung rgyud 'dren sgron ma gnyis 'khrungs/ de nas rgyal ba' i gdung 'tshob chen po mu cho ldem drug 'khrugs/ gsas za ngang drug la rgyal sras 'ol drug thang po 'khrungs/ kong za 'phrul lcam la rgyal sras g.yung drung dbang ldan 'khrungs/ rgyal za 'phrul sgyur la rgyal sras 'phrul gyi bu chung 'khrungs/ sku sras brgyad kyis/ ston pa sang rgyas la dang po bka'i yi gleng slong gi zhu ba po dang/ bar du bstan pa'i gnyer mdzad cing/ mtha' mar bka' bsdu ba po mdzad nas/ ston pa'i bstan pa ma rdzogs kyis bar du thugs rje sprul ba ma 'gag par bstan pa dang 'gro ba sems can gyi don mdzad pa'o/ mdzad bcu bstod pa las/ 'gro ba nad gdon dug lngas gzir gyur ba/ /rnam par bsal nas bde chen sar 'god phyir/ /sku gsung thugs kyis 'od zer sras sprul nas/ /dus kun 'gro don mdzad la phyag ' thal lo/ /zhes 'a zha dra bcom pa gsang ba mdo sdud kyis ston pa la bstod pa'o// (lha bris pa ni/ reb gong bon brgya dgon pa'i grwa btsun nam mkha' rgyal mtshan/)

6 番目、所化のために子息を化現したという御事績。



中央は教主にして最勝の覚者であるトンパ〔・シェンラブ〕。周囲〔に描かれているのは〕、8人の子息がお生まれになった様子である。先ず(左上)、玉座ティモン・ギャルシェーで、妃ウーサ・ギャルメーマ〔との間〕に、長男の王子トブ・ブムサンと、弟のチェーブ・ティシェーという2人が誕生した〔様子が描かれている。誕生した〕のち、〔彼らは〕診断・甘露に関するポンの門を広めた。ボサ・タンギ・ギャルモ〔との間〕には、王子ルンテン・セルワと、弟のギューデン・ドンマという2人が誕生した。その後、勝者〔シェンラブ・ミボ〕の偉大なる継承者であるムチョ・テムドゥク<sup>81)</sup>が誕生した。セーサー・ガンドゥク〔との間〕には、王子オルドゥク・タンボが誕生した。コンサ・ティチャム<sup>82)</sup>〔との間〕には、ユンドウン・ワンデンが誕生した。ギャサ・トゥルギユルマ〔との間〕には、トゥルギ・プチュンが誕生した。〔これら〕8人の子息は、覚者であるトンパ〔・シェンラブ〕に対し、最初は御言葉〔=教え〕に関する議論をした者たちであり、途中は教えの追求をなさり、最後は〔シェンラブの〕御言葉をお集めになって、トンパ〔・シェンラブ〕の教説が完成するまで、慈悲の化身を絶えずお示しになり、衆生・有情の利を為さった者〔たち〕である。『御事績の称讃』<sup>83)</sup>によれば、「病魔・五毒に苦しむ有情〔から、それらの苦しみを〕完全に取り除いて大楽の地に置くために、身・語・口の光明〔から〕子息を化現し、常に衆生の利を為さったことに礼拝いたします」と、アシャの羅漢、サンワ・ドドゥーはトンパ〔・シェンラブ〕を讃えている。(絵師はレブコンのボンギャ寺の僧、ナムカー・テンジン)

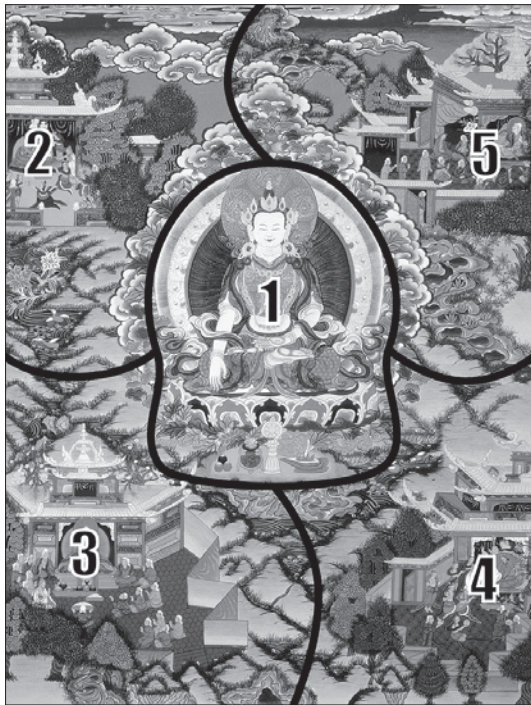
## 6.2 画像詳解

付属文書にはシェンラブが各国の妃との間にもうけたとされる8人の子息の名が列挙されているが、このタンカに描かれているのは、ダンワ・イリン王とギャルメーマの間に生まれた2人の子息の誕生の様子のみであり、その内容は『セルミク』第8章「シェンラブが子息を化現したことについて」〔gshen rab kyis sras sprul pa'i skor〕〔ZM: 179-225〕に記されるものとはほぼ一致する。これら2人の息子は、特に“診断術”〔dpyad〕、即ち、ボン教の医術・養生術の側面の弘通に貢献したと伝えられており、特に兄のトブ・ブムサンは優れた能力を持っていただけでなく、美しい容貌を具えていたとされており、意の少年、ユロ、マロとともに「〔優れた〕相を具えた4人の少年」〔mtshan ldan khye'u bzhi〕の1人に数えられる。尚、『セルミク』にはこの他に、シェンラブが、シェンサー・ネウチュンマ〔gshen bza' ne'u chung ma〕とネウチュンマ〔ne'u chung ma〕という2人の娘をもうけたとも記されており、そのうち1人は悪魔

に攫われ、魔の子を産んだとも伝えられる。以下、『セルミク』の叙述に基づき、各図像の記述・解説を試みる。

### 6.2.1 トブ・ブムサンの誕生

- 1 シェンラブ・ミボ。
- 2 シェンラブはギャルメーマとの間に子をもうけた。子が誕生したとき、空からは神々が、地からは龍がバルポ・ソギュー城に集まった。梵天〔tshangs pa〕は甘露をシェンラブの子の身体に注ぎ、帝釈天〔brgya byin〕はその子に如意宝珠の灌頂を与えた。バラモンのギェルワ・ロセルが王子の身体・言葉・心を調べると、その子にはあらゆる吉兆の相が具わっていることが分かった。
- 3 シェンラブの子は1歳で最高の智慧を獲得し、2歳で慈悲の心を持つようになった。そして、3歳になると父と議論を始めるようになり、少しでも分からないことがあると、シェンラブに質問をするようになった。この様子を見て人々はたいへん喜び、ギェルワ・ロセルはその子に、トブ・ブムサン〔gto bu 'bum sangs〕という名前を付けた。



図像配置図 (Thangka N° 6)

トブ・ブムサンが自分の名前の意味を父に尋ねると、シェンラブは次のように応えた。「間違えない確実なことを説く者であるから“ト”，区別することなく平等であるから“ブ”，ポンの十万部の教えを知っているから“ブム”，輪廻の苦しみを浄化するから“サン”。それゆえ汝の名前は“トブ・ブムサン”というのである。」

トブ・ブムサンはさらに父の名前、即ち“トンパ・シェンラブ・ミボ”という名前の意味について尋ねた。シェンラブは次のように答えた。「現象世界と原初の世界について明晰に説くから“トン”，一切の有情・衆生を自分の子供の

ように育てるから“バ”，ポンの真理の広がり〔ボンそのものの広がり〔bon nyid dbyings〕〕から心の本然の状態〔心性〔sems nyid〕〕を広げるから“シェン”，衆生の利をなすために化現した者であるから“ラブ”，姿〔身体の色〔sku mdog〕〕や〔鈴・金剛杵などの法器に代表される〕象徴〔phyag mtshan〕を人に示す者であるから“ミ”，ト〔災いを取り除く儀式〕やチュー〔病などの診断〕のタントラが甘露のごとく溢れ出る者であるから“ボ”，それゆえ私の名はシェンラブ・ミボというのである。』

トブ・ブムサンは次に、自分の母親，即ち“ウーサ・ギャルメー(マ)”〔hos bza' gyal med (ma)〕の名前について尋ねた。シェンラブは次のように答えた。「ウーの王族に連なるものであるから“ウー”，占いを行う妃であるから“サー”，五つの智慧を具えているから“ギャル”，五毒の害を浄化するから“メー”。それゆえ，汝の母親はウーサー・ギャルメーというのである。」

次にトブ・ブムサンは、自分の祖父，即ち，シェンラブの人間界の父であるミボン・ハボン・ヨボン・ギャルボン・トゥーカルの名前の意味について尋ねた。シェンラブは答えた。「神や人など，六道を生きる全ての有情を，慈悲深いポンの教えによって守っているから“ミボン・ハボン・ヨボン”，偉大なるダム〔dram chen po〕という王族のボン教徒であるから“ギャルボン”，チャの国の伯叔父が灌頂を与え，1ダー<sup>84)</sup>程の長さの白い頭巾を頭に巻いているから“トゥーカル”。それゆえ，汝の祖父はミボン・ハボン・ヨボン・ギャルボン・トゥーカルというのである。」と答えた。さらにトブ・ブムサンは、自分の祖母，即ち，シェンラブの人間界の母であるミチ・ハチ・ヨチ・ギャルシェーマの名前の意味についても尋ねた。シェンラブは答えた。「神や人などの六道を生きる全ての有情に対し，区別することなく平等に愛情を注いでいるから“ミチ・ハチ・ヨチ”，かつてギャルボン・トゥーカルがサラ王の住む街を訪問したとき，日月のように明るく微笑まれたので“シェー”，全ての有情に対してまるで自分の子供のように優しく接するので“マ”。それゆえ，汝の祖母はミチ・ハチ・ヨチ・ギャルシェーマというのである。」と答えた。トブ・ブムサンはさらに、オルモルンリンという国名の由来についても尋ねた。シェンラブは答えた。「生じるということが無いから“オル”，望みが叶うから“モ”，口伝が説かれるから“ルン”，慈悲が遠くまで伸びて広がるから“リン”。それゆえ，この国はオルモルンリンというのである。」

こうしてトブ・ブムサンは人物・建物・国土の名前の意味について尋ねたのち、ボン教の教理についても様々な質問を父親に投げかけた。親子の質疑応答は長期間

に渡って続けられ、シェンラブはどんな質問にも明晰に答えた。

#### 6.2.1 チェーブ・ティシエーの誕生

4 シェンラブとギャルメーマとの間には、もう1人、男子が誕生した。その子が誕生すると、トブ・ブムサンが生まれたときと同じように、空からは神々が降臨し、地からは龍が姿を現し、バルポ・ソギエー城に集まった。梵天は甘露をシェンラブの子の身体に注ぎ、帝釈天はその子に如意宝珠の灌頂を与えた。バラモンのギュルワ・ロセルが王子の身体・言葉・心を調べると、彼にもあらゆる吉兆なる相が具わっていることが分かった。それを聞いて、バルポ・ソギエー城に集まった人々はたいへん喜んだ。

5 その子もまた、1歳で最高の智慧を獲得し、2歳で慈悲の心を持つようになった。そして、3歳になると父と議論を始めるようになり、少しでも分からないことがあると、シェンラブに質問をするようになった。この様子を見て人々はたいへん喜び、ギュルワ・ロセルはその子に、チェーブ・ティシエー〔dpyad bu khri shes〕という名前を付けた。

トブ・ブムサンと同じように、チェーブ・ティシエーもまた、自分の名前の意味を父親に尋ねた。これに対し、シェンラブは「“チェー”は明知の診断の道について優れた者であるということ，“ブ”は一切の有情に対して優しい心を持った者であるということ，“ティ”は一万もの診断の術を知っている者であるということ。それゆえ汝の名前は“チェーブ・ティシエー”というのである」と答えた。

チェーブ・ティシエーもまた、ボン教の教理について様々な質問を父親に投げかけた。親子の質疑応答は長期間に渡って続けられ、シェンラブはどんな質問にも明晰に答えた。

## おわりに

以上、ボンギャ寺所蔵のシェンラブ伝を描いた6枚のタンカについて、ボン教の代表的聖典の一つである『セルミク』の記述に主として依りながら、その記述・解説を試みた。冒頭で述べたように、これらのタンカは、仏教の影響を受けて変容を遂げたボン教の伝統の中で生み出されたものであり、それ故、子息誕生の際に祝福に訪れる神々の描写や、阿私陀仙（アシタ仙人）を思わせるバラモンの登場など、仏伝から取材されたと思われるモチーフも少なくない。しかし、神性を有する存在でありなが



ら、同時に人間でもあるというシェンラブの特性は、仏教における釈迦牟尼の布置とは明らかに異なるものであり、その存在論上の特性は様々な描写を通じてこれらのタンカの中に巧みに描き出されていると見るべきだろう。また、仏教図像との比較という観点から見れば、釈迦牟尼の生涯を描いたタンカが通常右回りに展開するのに対し、シェンラブ伝を描いたタンカではその事績が概ね左回りに展開するという図像学上の特徴も見受けられる。

この他、本稿で扱ったタンカに散見されるボン教の歴史と関連した示唆的な表現についても指摘しておく必要がある。既にみたように、シェンラブは各地の女性と結婚し、彼女たちとの間に生まれた子息はボン教の伝承・発展に貢献したと伝えられるが、こうした逸話は、古代ボン教における血脈の重視の傾向、即ち、古代ボン教が特定の氏族の間で継承されたということ、また、氏族間の婚姻を通じてボン教が広められ、その子孫によって教説の継承と聖性の維持が行われたとする古い伝承との関連を想起させる。既にみたように、シェンラブはボン教を広めるための手段として各地の王の娘を妻として迎えたとされるが、例えば『セルミク』には、「トンパ・シェンラブは、衆生・有情の利を為す〔ため〕には、有情たちと一致したことを為すべきである〔と考へ〕、また〔人間の〕系統を断じることや中性という害を打破するために」〔ZM: 167.3-5〕妻を娶ったとも記されている。また、これらのタンカには、シェンラブとその（人間界における）母方の家系との関係、とりわけ母方の伯叔父との関係の重要性が強調されているという点も注目される。かつて古代チベット（吐蕃）王国の時代には、王子の母方の伯叔父筋から登用されたシャンロン（尚論〔zhang blon〕）と呼ばれる大臣が活躍し、彼らの多くがボン教徒であったと伝えられる。シャンロンたちは幼少時に即位した王の摂政に就任して国内の実質的な権力を握り、ボン教の伝統に則って王室の宗教儀礼を執り行うことを推進したとされるが、8世紀後半に教勢を増した仏教推進派との権力闘争に敗れ、やがて中央チベットを追われたとされる<sup>85)</sup>。2番目のタンカには、幼少期のシェンラブが人間界における母方の祖父の国を表敬訪問する様子が描かれているが、こうした描写は、母方の家系を通じて教法が伝承・維持されたとする古代ボン教の伝承を間接的に表現したものかもしれない。

ボンギャ寺で蒐集された51枚のタンカはこのあと、出家から入滅までのシェンラブの事績の描写に続き、その後、ボン教の聖者や神々の姿を詳細に描いた図像へと続く。これらのタンカの中に、ボン教の独自性が如何に顕れているか、まだ如何なる意味が隠されているかということを見極めるためにも、今後も継続して研究を進めていくことにしたい。

## 略号

[ZM] *mdo gzer mig; dus gsum gshen rab kyi 'byung khungs dan mdzad pa'i rgyud 'dus pa rin po che gzer mig gi mdo* (『賽米』中国藏学出版社), 1991.

[ZJ] *mdo dri med gzi brjid; 'dus pa rin po che'i rgyud dri ma med pa gzi brjid rab tu 'bar ba'i mdo*, *bod ljongs bod yig dpe mying dpe skrun khang* (『敦巴辛绕全传』西藏藏文古籍出版社), 2000.

## 補遺

【補遺1】「原初のシェン・永遠の菩薩」〔*ye gshen g.yung drung sems dpa'*〕 [ZM: 59.11-60.5] (※以下の(1)~(4), (6)~(10), (14)~(15)に, ソウオ・バルシャンチェン〔*zo bo sbar shang can*〕を加えた13者は, “先頭の従者”〔*'khor dang po, dan po pa*〕とも呼ばれる [ZM: 35.6-12])

- (1) チェギエル・グーシューチェン〔*che<sup>86</sup> rgyal rgod zhu can*〕, (2) ヨンギエル・ドゥクラチェン〔*yongs<sup>87</sup> rgyal 'brug slag can*〕, (3) チューパー・タラチェン (断じる鷹の衣をもつ者〔*gcod pa'i khra slag can*〕), (4) ドウーツイー・チャルラチェン (甘露の雨の衣をもつ者〔*bdud rtsi'i char slag can*〕), (5) ダクパー・ベルラチェン (激しい炎の衣をもつ者〔*drag po'i dbal slag can*〕), (6) ナムケー・バデンチェン (虚空の勝幡をもつ者〔*nam mkha'i ba dan can*〕), (7) キュンギ・ルツォンチェン (ガルダの軍旗をもつ者〔*khyung gi ru mtshon can*〕), (8) グーキ・パルダブチェン (鶯の翼をもつ者〔*rgod kyi 'phar 'dab can*〕), (9) マチエー・デムギャンチェン〔*rma bya'i ldem rgyang can*〕, (10) クジユクギ・スンニエンチェン (カッコウの美しい鳴き声をもつ者〔*khu byug gi<sup>88</sup> gsung snyan can*〕), (11) ベルソ・ダウンツェチェン (七つの炎の先端をもつ者〔*dbal so mdun rtse can*〕), (12) セーダー・ダウンチュクチェン (神の矢である法螺貝の棒をもつ者〔*gsas mda' dung dbyug can*〕), (13) ガトン・リチェムパチェン〔*rnga stong ri chem pa can*〕, (14) シヤンティ・ロナムダクチェン〔*gshang khri<sup>89</sup> lo gnam brag can*〕, (15) ドウンパルポ・パルチュンチェン (導師の歯が変幻した法螺貝をもつ者〔*dung 'phar po<sup>90</sup> 'phar chung can*〕)

【補遺 2】 有のシェン [srid gshen] [ZM: 60.21-61.12]

1. 「上のイエシ [の領域に住む] 13 のニエンポ (教化するボン教徒)」 [yar g.yen gnyan po bcu gsum ('dul ba'i bon po)] [ZM: 35.14-36.1, 44.13-45.2, 60.21-61.6] (※ ( ) 内は [ZM: 44.13-45.2] に見える尊名の補遺。尚, 以下の十三者に 2 の「中のイエシ [の領域に住む] 9 のトゥーポ (というボン教徒)」を加えた二十二者は「中間の従者」 ['khor dbu ma] [ZM: 35.14-36.] ないし「中の者」 ['brin po pa] [ZM: 36.2] と呼ばれる。)

(1) ベルボン・ルムポ [dbal bon rum po (dbal khams dang chas pa)], (2) ヨクボン・トギエル [yogs bon gto rgyal (yogs khams dang chas pa)], (3) テインボン・チャサン [khri bon phyas<sup>91</sup> sangs (khrin khams dang chas pa)], (4) ニエルボン・トチェン [gnyer bon gto chen (gnyer khams dang chas pa)], (5) オボン・ダンス ['o bon 'brang gzu ('o khams dang chas pa)], (6) ツァムボン・ヨトウ [mtshams bon yo 'kru (mtshams khams dang chas pa)], (7) ドゥーボン・チュチャク [bdud bon chu lcags (rgyal ba bdud khams dang chas pa)], (8) ムボン・イエウ・テン [dmu bon ye<sup>92</sup> than (gyer mkhas dmu khams dang chas pa)], (9) ツェンボン・ツアルチャク [btsan bon mtshal lcags (snar ba btsan khams dang chas pa)], (10) シーボン・ムチョ [srid bon mu cho<sup>93</sup> (Idem drug, srid khams dang chas pa)], (11) クーボン・ツクセー [skos bon gtsug sras (khrol ba, skos khams dang chas pa)], (12) チャボン・テウレク [phywa bon (rnga brdung) the'u<sup>94</sup> legs<sup>95</sup> (phywa khams dang chas pa)], (13) ラボン・トゥーカル [lha bon thod dkar (lha khams dang chas pa)]

2. 「中のイエシ [の領域に住む] 9 のトゥーポ (というボン教徒)」 [bar g.yen gtod po dgu'i bon po] [ZM: 61.8-13, 35.19-36.1]

(1) ダボン・ツェーパ (月のボン教徒, ツェーパ [zla bon tshes pa]), (2) ニボン・ダンマ (太陽のボン教徒, ダンマ [nyi bon drang ma]), (3) カルボン・ツェグ, 或いはカルボン・ダクタ (星のボン教徒, ツェグ [skar bon tshes gu]<sup>96</sup>), (4) テインボン・バトゥル (雲のボン教徒, バトゥル [sprin bon ba thul]), (5) ジャーボン・クタン (虹のボン教徒, クタン ['ja' bon ku<sup>97</sup> gtang]), (6) ダルボン・ルグ (空閑のボン教徒, ルグ [dal bon lu gu]<sup>98</sup>), (7) セルボン・ダンニエン (光線のボン教徒, ダンニエン [zer bon gdangs snyan]), (8) ロボン・ツイーデブ (年のボン教徒, ツイデブ [lo bon rtsis 'debs]<sup>99</sup>), (9) ツィボン・チュルワ [rdzi bon phyur ba]<sup>100</sup>)

【補遺 3】 顕現のシェン [snang gshen] [ZM: 61.15-20]

「地のイエン [の領域に住む] 11 のチェワ (教化するボン教徒)」 [ZM: 61.15-20, 48.4-15,] [sa g.yen che ba bcu gcig 'dul ba'i bon po] (※ ( ) 内は [ZM: 48.4-15] に見える補遺。以下の十一者は「最後の従者」[\*khor tha ma] ないし「最後の者」[tha ma pa] [ZM: 36.3, 8, 9] とも呼ばれる。)

(1) ルボン・ヤルニヤ [klu bon dbyar snya (gyim bu glu khams dang chas pa)], (2) ニエンボン・タンタン [gnyan bon thang thang (khrol<sup>101</sup>) ba gnyan khams dang chas pa)], (3) ギャルボン・ボンポ [rgyal bon bong<sup>102</sup> po (thong rje rgyal khams dang chas pa)], (4) ムンボン・ディムタン [smon bon 'brim tang (skyol po sman khams dang chas pa)], (5) セーボン・レンツァ [gzed bon lan tsha (khug pa gzed khams dang chas pa)], (6) シボン・ヤゲル [sri bon ya<sup>103</sup> ngal (gyim gong sri khams dang chas pa)], (7) デボン・ルーボン・ギェルケー ['dre bon glud<sup>104</sup> bon gyer mkhas ('dre khams shags kyis 'dul ba 'dre khams dang chas pa)], (8) シンボン・ムペンペウラ [srin bon mu 'phan phe'ur (srin khams chings kyis 'ching ba srin khams dang chas pa)], (9) チュルボン・ナボン・リジン [byur bon sna bon li byin (mi rabs rgyud du spel ba byur khams dang chas pa)], (10) シンジエイ・ボンポ・ターボンジヨンティ [gshin rje'i bon po gta' bon byon khri (gnod pa gta' la bskor ba gshin khams dang chas pa)], (11) チューキボンポ・タルボンドゥキヨ [chud kyis bon po thar bon gru skyol (snang srid lha 'dre skos la 'debs pa chud khams dang chas pa)]

【補遺 4】 100 の神とシェン [lha gshen brgya]

1. ボンそのもの・永遠の界から生まれた 20 の神とシェン [bon nyid g.yung drung kyis klong nas bskyed pa'i lha nyi shu] [ZM: 91.8-92.13]

A. ボンそのもの・永遠の界から生まれた神 [bon nyid g.yung drung kyis klong nas bskyed pa'i lha)]

(1) イェブム・ギャルポ (イェブム王 [ye 'bum rgyal po]), (2) イェサン・ギャルポ (原初より覚醒せる王 [ye sangs rgyal po]), (3) イェキャブ・ギャルポ (原初より遍満せる王 [ye khyab rgyal po]), (4) イェデル・ギャルポ (原初より広がる王 [ye bdal rgyal po]), (5) イェユ・ギャルポ (原初より在る王 [ye yod rgyal po]), (6) イェシエ・ギャルポ (原智の王 [ye shes rgyal po]), (7) イェシー・ギャルポ (原初より存在せる王 [ye srid rgyal po]), (8) イェジュン・ギャ

ルポ（原初より出現する王〔ye 'byung rgyal po〕）、(9) イエセル・ギャルポ（原初より明澄なる王〔ye gsal rgyal po〕）、(10) イエダク・ギャルポ（原初より清浄な王〔ye dag rgyal po〕）

B. ポンそのもの・永遠の界から生まれたシェン〔bon nyid g.yung drung kyi klong nas bskyed pa'i gshen〕

(11) ジャムパ・クンデン（全てを具える慈悲〔byams pa kun ldan〕）、(12) ジャムパ・クンリク（全てを〈明知により〉知る慈悲〔byams pa kun rig〕）、(13) ジャムパ・クンシェー（全てを知る慈悲〔byams pa kun shes〕）、(14) ジャムパ・クンドゥー（全てと交わる慈悲〔byams pa kun bsgord〕）、(15) ジャムパ・クンキャブ（遍満する慈悲〔byams pa kun khyab〕）、(16) ジャムパ・クンドウル（全てを調伏する慈悲〔byams pa kun 'dul〕）、(17) ジャムパ・クンデン（全てを導く慈悲〔byams pa kun 'dren〕）、(18) ジャムパ・ニョムゼー（均等なる慈悲〔byams pa snyoms mdzad〕）、(19) ジャムパ・キャプデル（遍く行き渡る慈悲〔byams pa khyab gdal〕）、(20) ジャムパ・クンドン（全てに來臨する慈悲〔byams pa kun 'drons〕）

2. ポンそのもの・原智の界から生まれた20の神とシェン〔bon nyid ye shes kyi klong nas bskyed pa'i lha gshen nyi shu〕〔ZM: 94.12-95.16〕

A. ポンそのもの・原智の界から生まれた神〔bon nyid ye shes kyi klong nas bskyed pa'i lha〕

(21) カーギン・カルポ（虚空の白いギン〔mkha' 'gying dkar po〕）、(22) ティウー・カルポ（千の白い光〔khri 'od dkar po〕）、(23) ティギャル・クパ〔khri rgyal khug pa〕、(24) ティウー・セルバル（燃える千の光明〔khri 'od gsal 'bar〕）、(25) ムヤン・デワ〔mu yang de ba〕、(26) ムギュー・ターイエー〔mu rgyud mtha' yas〕、(27) ムサン・グンギャル〔mu sangs gung rgyal〕、(28) ムメー・ターイエー（際限なき無限〔mu med mtha' yas〕）、(29) クンウー・ドゥンマ（全てを照らす灯明の光〔kun 'od sgron ma〕）、(30) クンドル・インチュク（全てを救う広がり女王〔kun sgrol dbyings phyug〕）

B. ポンそのもの・智慧の界から生まれたシェン〔bon nyid ye shes kyi klong nas bskyed pa'i gshen〕



(31) ジンパ・シュクデン (強力な布施 [を行う者] [sbyin pa shugs ldan]), (32) ジントン・トミー (無碍の施しを行う [者] [sbyin gtong thogs med]), (33) ジンパ・ミクメー (縁じることのない布施 [を行う者] [sbyin pa dmigs med]), (34) ジンパ・タルチン (完全なる布施 [を行う者] [sbyin pa mthar phyin]), (35) ジントプ・チェンポ (大いなる布施の力 [を有する者] [sbyin stobs chen po]), (36) ジンパー・クンツィム (布施によって完全なる充足 [を与える者] [sbyin pas kun tshim]), (37) ジンパ・カーシェー (虚空を知る布施 [を行う者] [sbyin pa mkha' shes]), (38) ジンパ・イントク (広がり の 領悟 [という] 布施 [を行う者] [sbyin pa dbyings rtogs]), (38) ジントン・ニヤムパ (平等なる布施を行う [者] [sbyin gtong mnyam pa]), (40) ジンパ・ヨンスニヨムパ (悉く均等な布施 [を行う者] [sbyin pa yongs su snyoms pa])

3. ボンそのもの・虚空の界から生まれた20の神とシェン [bon nyid nam mkha'i klong nas bskyed pa'i lha nyi shu]

A. ボンそのもの・虚空の界から生じた神 [bon nyid nam mkha'i klong nas bskyed pa'i lha]

(41) シェンハ・ウーカル (シェンの神, 白い光 [gshen lha 'od dkar]), (42) シェルチャク・ゴンポ (青い水晶の鉄 [shel lcags sngon po]), (43) ガルセー・ツァンポ (峻厳なるガルセー [gar gsas btsan po]), (44) ガルブ・シャンギャル [gar bu shang rgyal], (45) ゲーセー・カムパ (黄褐色の鷲のセー [rgod gsas kham pa]), (46) グーブ・パルダク (荒々しく飛翔する鷲の子 [rgod bu 'phar drag]), (47) セージェ・マンポ [gsas rje rmang po], (48) セーブ・ツォンカン [gsas bu tshon gang], (49) ナムセー・インルム (空のセー, 広がりの子宮 [gnam gsas dbying rum]), (50) ナムブ・チューパ (無垢なる空の子 [gnam bu phyod pa])

B. ボンそのもの・虚空の広がりから生じたシェン [bon nyid nam mkha'i klong nas bskyed pa'i gshen]

(51) イエシェーキ・ドゥンマチェン (原智の灯明を持つもの [ye shes kyi sgron ma can]), (52) イエシェーチェンポ・キャプデル (遍く行き渡る大いなる原智 [ye shes chen po khyab gdal]), (53) イエシェーチェンポ・サンテル (大いなる透明な原智 [ye shes chen po zangs thal]), (54) イエシェーチェンポ・

セルバル（明澄に燃える大いなる原智〔*ye shes chen po gsal 'bar*〕), (55) イエシエーキ・デンゼー（原智によってお導きになる〔者〕〔*ye shes kyiis 'dren mdzad*〕), (56) イエシエーキ・ドルゼー（原智の救済をなさる〔者〕〔*ye shes kyi sgrol mdzad*〕), (57) イエシエーキ・ドゥーツィチエン（原智の甘露を持つもの〔*ye shes kyi bdud rtsi can*〕), (58) イエシエーキ・ニセルチエン（原智の陽光をもつ者〔*ye shes kyi nyi zer can*〕), (59) イエシエーキ・ダウエー・グルキムチエン（原智の月の天蓋をもつ者〔*ye shes kyi zla ba'i gur khyim can*〕), (60) イエシエーキ・ダクポトクダーチエン（智慧の激しい稲妻をもつ者〔*ye shes kyi drag po thog mda' can*〕)

4. ポンそのもの・元素の界から生じた20の神とシェン”〔*bon nyid 'byung ba'i klong nas bskyed pa'i lha gshen nyi shu*〕

A. ポンそのもの・元素の界から生じた神〔*bon nyid 'byung ba'i klong nas bskyed pa'i lha*〕

(61) ルンハ・デクペートブデン（持ち上げる力をもつ風の神〔*rlung lha 'degs pa'i stobs ldan*〕), (62) ルンハ・ドゥーペーワンチエン（集める力をもつ風の神〔*rlung lha sdud pa'i dbang chen*〕), (63) ルンハ・チエーペーギャルポ（風の神・区別する王〔*rlung lha 'byed pa'i rgyal po*〕), (64) ルンハ・ギユウェーコルチエン（流動・旋回する風の王〔*rlung lha rgyu ba'i skor chen*〕), (65) メハ・ドゥーチェンミンパ（成熟する熱〔をもつ〕火の神〔*me lha drod chen smin pa*〕), (66) メハ・ウードゥンサルワ（明澄に輝く光〔をもつ〕火の神〔*me lha 'od drung gsal ba*〕), (67) チュハ・ドゥードゥチーチエン（全てを集める甘露をもつ水の神〔*chu lha kun sdud bdu rtsi can*〕), (68) チュハ・クンソメンギディチョクチエン（全てを治す薬の、最高の香りをもつ水の神〔*chu lha kun gso sman gyi dri mchog can*〕), (69) サハ・シヨンヤン・デクペートクポチェ（広大な盆地を支える大力〔をもつ〕地の神〔*sa lha shong<sup>105</sup> yangs 'degs pa'i stobs po che*〕), (70) サハ・クンジュンリンチエンナガチエン（全ての源〔である〕五種の宝珠をもつ地の神〔*sa lha kun 'byung rin chen sna lnga can*〕)

B. ポンそのもの・元素の界から生じたシェン〔*bon nyid 'byung ba'i klong nas bskyed pa'i gshen*〕

(71) ルンボン・チューデサンギャル（風のボン・透明なる秘密の王〔*rlun bon*

phyod de gsang rgyal]), (72) ヤンペー・ルンボン・キューペーコロロチェン (揺り動かす輪を持つ, 広大なる風のボン [yangs pa'i rlung bon skyod pa'i 'khor lo can]), (73) ダクポ・シュクキ・ツイルンチェン (激しい力の風をもつ者 [drag po shugs kyi rdzi slung can]), (74) ルンボン・デンペー・ウーセルチェン (導く光線をもつ風のボン [rlung bon 'dren pa'i 'od zer can]), (75) ヤンペー・メボン・サンダクセエルウエードンマチェン (秘密を広める明澄な灯明を持つ, 広大なる火のボン [yangs pa'i me bon gsang grags gsal ba'i sgron ma can]), (76) ヤンペーメボン・ウーキチャンロチェン (光の辮髪をもつ広大なる火のボン [yangs pa'i me bon 'od kyi lchang lo can]), (77) ヤンペー・チュボン・ドゥツイ・カドゥーガキ・シルパチェン [yangs pa'i chu bon bdu rtsi kha brod nga kyi zil pa can], (78) ヤンペーチュボン・ダクパトゥキブムパチェン (洗淨する壺をもつ広大なる水のボン [yangs pa'i chu bon dag pa khru kyi bum pa can]), (79) ヤンペーサボン・ミギユルリンドゥクセルギトルツクチェン (黄金の鬘を有する不動なる六つの州・広大なる地のボン [yangs pa'i sa bon mi 'gyur gling drug gser gyi thor tshugs can]), (80) ヤンペーサボン・サテンチクジン・ユイユンドゥンチェン (強固なる言葉を持するトルコ石の逆万字をもつ, 広大なる地のボン [yangs pa'i sa bon sra brtan tshig 'dzin g.yu'i g.yung drung can])

5. ボンそのもの・存在の界から生じた20の神とシェン [bon nyid srid pa'i klong nas bskyed pa'i lha gshen nyi shu] [ZM: 105.7-106.21]

A. ボンそのもの・存在の界から生じた神 [bon nyid 'byung ba'i klong nas bskyed pa'i lha]

(81) ナムカー・ターイェー (限りない虚空 [nam mkha' mtha' yas]), (82) クンブム・ゴチェー [kun 'bum go 'byed], (83) ベルセー・チェムマ (怒りの音をたてるベルセー [dbal gsas chem pa]), (84) トクセー・カムパ (黄褐色のトセー [thog gsas kham pa]), (85) デイセー・ガギャル (高慢なるデイセー [dri gsas nga rgya]), (86) ドウルセー・マウォ ['dur gsas rma bo], (87) ラブセー・ポマ [brlab gsas pho ma], (88) シェンセー・ティロ [gshen gsas khri lo], (89) セルセー・ダギェー [sel gsas gra brgyad], (90) ラムセー・チャムブ (道のセー [神], チャムブ [lam gsas phyam bu])

B. ボンそのもの・存在の界から生じたシェン [bon nyid 'byung ba'i klong nas

bskyed pa'i gshen]

(91) ベルボン・ルムボ・トゥダントプスデンペー・デクペー・ハデドゥルワ  
 [dbal bon rum po mthu dang stobs su ldan pas/ dregs pa'i lha 'dre 'dul ba], (92) ム  
 チョ・テムドゥク・シーパ・ムメーペーボンラ・ケーパ, ケルパ・ダンメー  
 ペー・チョラプトウンパ・ドゥンギ・テムシンカルボ・チャクナサムネー, ク  
 デムギ・ドワリクドゥクギ・トゥンゼーパ (無限なる存在のボンに精通し, 無  
 数劫の歴史が生じる湾曲した白い枝を手にもち, しなやかな身体で歩み六趣の  
 利を為す, ムチョ・ドムドゥク [mu cho ldem drug srid pa mu med pa'i bon la  
 mkhas pa/ bskal pa grangs med pa'i cho rabs thon pa dung gi ldem shing dkar po phyag  
 na bsnams nas/ sku ldem ldem gyis 'gro ba ris drug gi don mdzad pa]), (93) シェン  
 ポン・クジュクスンニエン・ハンハンカムスムダクペー, ナンシー・イエー  
 シー・ダジャルヌーパ (耳に心地よく, 明るく澄んだ声を三界に響かせ, 現象  
 世界に原初から存在する象徴を理解することができる, シェンのボン, 郭公  
 [gshen bon khu byug gsung snyan lhang lhang khams gsum grags pas/ snang srid ye  
 bsrud brda 'jal nus pa]), (94) ドゥルシェン・メーシーデーキ・チューチン, ミ  
 ラメーキツォルワ ['dur gshen rmad srid bdas kyi gcod cing/ mi bla rmad kyiis 'tshol  
 ba], (95) ヤゲルゲムゴン・シーパカルナチエーチン, ハディレンチャクジャ  
 ル ワ [ya ngal gyem gong srid pa dkar nag 'byed cing/ lha 'dre'i lan chags 'jal ba],  
 (96) シウエーボンボル・チャクキーギャル, デイカムワンドゥドゥーパ [zhi  
 ba'i bon por lcags skyid rgyal/ dri khams dbang du bsdud pa], (97) シウエーボンポ・  
 タルポンドゥキョル, ナンシーキハデケーラデプパ (解脱のボンの舟を漕ぎ,  
 現象世界の神・魔を秩序づける, 寂靜なるボン教徒 [zhi ba'i bon po thar bon  
 gru skyol/ snang srid kyi lha 'dre skos la 'debs pa]), (98) シウエーボンポ・ルー  
 ポンギエルケー, ドゥクペーイエンカム・マンボ・シウエーシャクキドゥルワ  
 [zhi ba'i bon po glud bon gyer mkhas/ gdug pa'i g.yen khams mang po zhi ba'i shags  
 kyiis 'dul ba], (99) シウエーボンポ・ターボン・ジョンティナクボ・ドゥーカ  
 ムラ・コルワ [zhi ba'i bon po gta' bon byon khri nag po bdud khams gta' la bskor  
 ba], (100) シウエーボンポ・ナボン・リジンミラクギュードゥ・ベルワ [zhi  
 ba'i bon po sna bon li byin mi rabs rgyud du spel ba]

【補遺 5】「300の女神」[lha mo sum brgya]

1. 広がり（に）に御座す慈悲をもつ過去の100の女神 [‘das pa’i lha mo brgya dbyings na bzhugs pa’i thugs rje can]

A. 広がり（に）の女神 [dbyings kyi lha mo] [ZM: 151.5-]

- (1) デルドゥプマ（樂を成就した者 [bder grub ma]), (2) インチュクマ（富める広がり（に）の女 [dbyings phyug ma]), (3) セルキャプマ（明澄に満ちる女 [gsal khyab ma]), (4) クンシェーマ（全てを知る者 [kun shes ma]), (5) トウンドゥプマ（目的を成就した者 [don grub ma]), (6) トミーマ（無碍なる女 [thogs med ma]), (7) ダクペー・ズトゥルチェン（強力な神通を有する者 [drag po’i rdzu ’phrul can]), (8) シウエー・ガンツルチェン（寂靜なる威儀を有する者 [zhi ba’i ngang tshul can]), (9) トゥッペー・シジーチェン（成就の榮光を有する者 [grub pa’i gzi brjid can]), (10) デンペー・トゥクジェチェン（[衆生を] 導く慈悲を有する者 [dren pa’i thugs rje can]), (11) トプキ・チャクギャチェン（強力な手印を有する者 [stobs kyi phyag rgya can]), (12) シュクキ・インドルマ（救済する女・力の広がり [shugs kyis dbyings sgröl ma]), (13) イーキ・ズトゥルチェン（意の神通を有する者 [yid kyi rdzu ’phrul can]), (14) デルペー・クンキャプマ（一切に満ち広がる女 [bdal pas kun khyab ma]), (15) ドゥッペー・クンドゥプマ（全てを成就する女 [grub pa’i kun grub ma]), (16) ゴペー・ヨツォマ [sgo pas yo ’tsho ma], (17) スーペー・クンコルマ（全てを取り囲み養育する女 [gsos pas kun ’khor ma]), (18) テルデンマ（宝蔵を持つ女 [gter ldan ma]), (19) メンガクトン・トクマ（口訣の界を領悟した女 [man ngag klong rtogs ma]), (20) ヨチェー・シワマ [g.yo byed bzhi ba ma], (21) ロンガ・チルトウルマ（五界の何れにも化する者 [klong lnga cir sprul ma]), (22) カドク・グーメーマ（顕色・実体のない者 [kha dog dngos med ma]), (23) イプキ・スクメーマ（形色の無い女 [dbyibs kyi gzugs med ma]), (24) ツイクギ・ターデーマ（語の辺際を超える女 [tshig gi mtha’ ’das ma]), (25) トウンギ・インドゥプマ（真理の広がり（に）を成就せる女 [don gyi dbyings grub ma])

B. 虚空の女神 [mkha’ yi lha mo]

- (26) ナムカー・ターイエーマ（際限なき虚空の女 [nam mkha’ mtha’ yas ma]), (27) セルワ・ターイエーマ（際限なき明澄なる女 [gsal ba mtha’ yas ma]), (28) クンブム・ターイエーマ（際限なきクンブム [kun ’bum mtha’ yas ma]), (29)



ウバル・ターイエーマ（際限なき光の輝き [を持つ] 女 [‘od ‘bar mtha’ yas ma]), (30) セルトマ（光線を放出する女 [zer ‘phro ma]), (31) ドンママ（灯明 [をもつ] 女 [sgron ma ma]), (32) クンシェーマ（全てを知る女 [kun shes ma]), (33) ヨンス・キャプバマ（普く充滿する女 [yongs su khyab pa ma]), (34) クンシェー・ゴチェーマ（一切知 [の空間] を切り開く女 [kun shes go ‘byed ma]), (35) トチュー・ロデンマ [mtho gcod blo ldan ma], (36) ジクテン・ドゥーキエンマ（世間の大きさを知る女 [‘jig rten gdos mkhyen ma]), (37) シーパー・ツイキエンマ（有の暦を知る女 [srid pa’i rtsis mkhyen ma]), (38) ケルパー・ダンヅインマ（劫数を数える女 [bskal pa’i grangs ‘dzin ma]), (39) ジュンウエー・ドゥルキエンマ（元素の塵を知る女 [‘byung ba’i rdul mkhyen ma]), (40) セムチェンギ・セムキエンマ（有情の心を知る女 [sems can gyi sems mkhyen ma]), (41) ムンパー・ツォクジヨムマ（闇の集積を破壊する女 [mun pa’i tshogs ‘joms ma]), (42) ジクテン・ゴチェーマ（世間を切り開く女 [‘jig rten go ‘byed ma]), (43) トリ・ケーズクマ（善趣 [へ] の梯子を立てる女 [mtho ris skas ‘dzugs ma]), (44) タルパー・ラムデンマ（解放の道 [へ] 導く女 [thar pa’i lam ‘dren ma]), (45) ツォクキ・ダ・ジヨムパ（資糧の敵を破壊する女 [tshogs kyi dgra ‘joms ma]), (46) オゼル・ブムタクマ（十万の光線 [を放つ] 女 [‘od zer ‘bum phrag ma]), (47) トウクジェ・ニヨムゼーマ（慈悲を平等におかけになる女 [thugs rjes snyoms mdzad ma]), (48) ダイ・チェダチェン（声の区別を有する者 [sgra yi bye brag can]), (49) スクキ・チョトゥルチェン（姿形の神変を有する者 [gzugs kyi cho ‘phrul can]), (50) タブキ・チルキエンマ（方便によって全てを知る女 [thabs kyi cir mkhyen ma])

### C. 界の女神 [klong gi lha mo]

(51) デルパー・ヨンギエーマ（全てに広がる女 [bdal pas yongs rgyas ma]), (52) ドゥッパパー・クンドゥブマ（修行によって全てを成就した者 [bsgrubs pas kun grub ma]), (53) ドゥーパー・クンツァンマ（集まった全てを完備する女 [‘dus pa’i kun tshang ma]), (54) ミヤムパー・イエルメーマ（平等という区別のない女 [mnyam pa’i dbyer med ma]), (55) デルパー・チョクメーマ（広がる方角がない女 [bdal pa’i phyogs med ma]), (56) ドゥーパー・リメーマ（包摂するという偏りがない女 [sdus pa’i ris med ma]), (57) ツォクパー・クンツァンマ（集聚した全てを完備する御阿 [‘tshogs pa’i kun tshang ma]),

(58) キューパー・クンジュンマ (生起する全ての源 [となる] 女 [bskyed pa' i kun 'byung ma]), (59) セルウェー・クンシーマ (明澄なるもの全てをご覧になる女 [gsal ba'i kun gzigs ma]), (60) ジーペー・ツェンデンマ (莊嚴なる相を有する女 [brjid pa'i mtshan ldan ma]), (61) ツェンマ・チルトウル (どんな相にも化現する [者] [mtshan ma cir sprul]), (62) ナムトク・ツェンマメー (分別・相が無い [者] [rnam rtog mtshan ma med]), (63) ツェンマ・ヨンダンドル (全ての相を離れた [者] [mtshan ma yongs dang bral]), (64) イエシェ・デタンデン (原智・安樂を具える [者] [ye shes bde dang ldan]), (65) リクペー・ロンナ・ネー (明知の界に住する [者] [rig pa'i klong na gnas]), (66) ミヨ・サムテンマ (不動なる禪定 [を行う] 女 [mi g.yo bsam gtan ma]), (67) チャンチュブ・セムパーマ (菩薩女 [byang chub sems dpa' ma]), (68) ユンドゥン・ギユルメーマ (永遠・不変の女 [g.yung drung 'gyur med ma]), (69) イエシェ・サンテーマ (透徹する原智の女 [ye shes zang thal ma]), (70) ツウクジェ・キャプデルマ (慈悲が普く広がる女 [thugs rjes khyab gdal ma]), (71) チルトウル・トクメーマ (如何なるものにも無碍に化現する女 [cir sprul thogs med ma]), (72) ガルシェク・トプデンマ (どこにでも赴く [ことができる] 力を具えた女 [gar gshegs stobs ldan ma]), (73) メンガク・ロンコムマ [man nga klong bskom ma], (74) ミイエン・メンガクトク (揺動することのない口訣を領悟した [者] [mi yengs man ngag rtogs]), (75) ミミク・シェーラプデンマ (縁じることのない智慧を具えた女 [mi dmigs shes rab ldan ma])

D. 均等なる女神 [snyoms pa'i lha mo]

(76) ナムケー・ダンデンマ (虚空の輝きを具えた女 [nam mkha'i mdangs ldan ma]), (77) ウーキ・ダンデンマ (光の輝きを具えた女 ['od kyi mdangs ldan ma]), (78) セルギ・ダンデンマ (光線の輝きを具えた女 [zer gyi mdangs ldan ma]), (79) マギ・チャニヤムマ (均等な暗闇 [を具える] 女 [smag gi cha mnyam ma]), (80) ミクギ・ギユンデンマ [smrig gi rgyun 'dren ma], (81) ケルペー・ダンニョムマ (劫数の等しい女 [bskal pa'i grangs snyoms ma]), (82) シーパー・シニョムマ (存在の土台が等しい女 [srid pa'i gzhi snyoms ma]), (83) ジュンウェー・チャニョムマ (元素の部分が等しい女 ['byung ba'i cha snyoms ma]), (84) セムラ・クンニヤムマ (心に全てが平等である女 [sems la kun mnyam ma]), (85) イエシェチェンギ・クンシーマ (原智の眼で全てをご

覧になる女〔*ye shes spyan gyis kun gzigs ma*〕, (86) シーペークイ・ナンシードゥル (化身によって現象世界を教化する〔女〕〔*sprul pa'i sku yis snang srid 'dul*〕), (87) ジンラブトプキ・ターシヌウン (加持力によって四方を支配する女〔*byin rlabs stobs kyis mtha' bzhi gnon*〕), (88) デンペーツィクギ・ゲーペートウンナムトゥン (真実語により諸々の確実なる義を示す〔女〕〔*bden pa'i tshig gis nges pa'i don rnams ston*〕), (89) ドゥーツィーギャツォ・セムチェンギドゥーパコン (甘露の大海・有情の望みを満たす〔女〕〔*bdud rtsi'i rgya mtsho sems can gyi 'dod pa skong*〕), (90) デンペーチュウウォ・トゥクジェギユンドゥペル (教導の河により慈悲の流れを広める〔女〕〔*dren pa'i chu bos thugs rje rgyun du spel*〕), (91) ドゥンメーオゼルギ・セムチェン・ニヤムパルニョム (灯明の光線を有情に等しく〔照らす者〕〔*sgron ma'i 'od zer gyis sems can mnyam par snyoms*〕), (92) パクメーキ・ナムカーロンドゥニョム (無量の虚空界に等しく〔広がる者〕〔*dpag med kyi nam mkha' klong du snyoms*〕), (93) チルヤンミチエー・ニヤムペーツェルネー (何も分けることがない平等なる林苑の地〔*cir yang mi 'byed mnyam pa'i tshal gnas*〕), (94) ウータンターメー・ニョムペートウク (中心と辺際が無い平等な御心〔*dbus dang mtha' med snyoms pa'i thugs*〕), (95) チルヤンマドゥブ・チラヤンミネーパ (如何なるものとしても成立することがなく, 何処にも住することがない者〔*cir yang ma grub ci la yang mi gnas pa*〕), (96) ミチャク・トゥルシユクロデンマ (愛着のない鋭く強力な慧を具えた女〔*mi chags rtul shugs blo ldan ma*〕), (97) ミイエン・メンガクスントプマ (揺動無き口訣 *bzungs* 獲得した女〔*mi yengs man ngag bzungs thob ma*〕), (98) ミンガク・クンギゴセルマ (遮ることのない一切の明澄なる門〔*mi 'gag kun gyi sgo gsal ma*〕), (99) ミトゥル・ロンナネー (化現することのなく界に住する〔女〕〔*mi sprul klong na gnas*〕), (100) ミギユル・ロンナテン (不変なる界に定住する〔女〕〔*mi 'gyur klong na brtan*〕)

2. 「現在の御座す 100 の女神」〔*'das pa'i lha mo brgya dbyings na bzhugs pa'i thugs rje can*〕

(101) ダンデンマ (虚空の女神・輝きを具えた女〔*nam mkha'i lha mo mdangs ldan ma*〕), (102) クンキョンマ (存在の女神, 一切を守護する女〔*srid pa'i lha mo kun skyong ma*〕), (103) ロンキエーマ (元素の女神, 界を生み出す女

[<sup>1</sup>byung ba'i lha mo klong bskyed ma]), (104) ヤンウエー・デクチェーマ (風の女神, 軽やかに持ち上げる女 [rlung gi lha mo yang ba'i 'degs byed ma]), (105) セルウエー・ドゥーニョムマ (火の女神, 明澄で平等な暖 [を持つ] 女 [me yi lha mo gsal ba'i drod snyoms ma]), (106) ドゥーチー・クンドゥーマ (水の女神, 全ての甘露を集める女 [chu yi lha mo bdud rtsi kun sdud ma]), (107) サテンマ (地の女神, 強固なる女 [sa yi lha mo sra brtan ma]), (108) ユムチェン・トゥクジェジャムメーツォ (慈悲と慈愛の主である偉大なる母 [yum chen thugs rje byams ma'i gtso]), (109) マチクギーマ・ウーツォマ (光の湖・マチクギーマ [ma cig 'gyid ma 'od mtsho ma]), (110) グーチヤム・ツウクギトゥンバルマ (頭頂の真理が輝く鷲の妻 [rgod lcam gtsug gi don 'bar ma]), (111) ユムチェン・サジンウーサンマ (偉大なる母・地を持する清澄な光 [yum chen sa 'dzin 'od sangs ma]), (112) ガルチャム・ロンパマ (ガルの妻, ロンパマ [gar lcam ron pa ma]), (113) グーチヤム・イエルブーマ (ゲーの妻, イエルブマ [rgod lcam yer bu ma]), (114) セーチャム・ダマ (セーの妻, チャムダマ [gsas lcam bra ma]), (115) ナムチャム・イクマ (ナムの妻, イクマ [gnam lcam dbyig ma]), (116) ワンギ・ハモ・ネーカルマ (力の女神, ネーカルマ [dbang gi lha mo gnas dkar ma]), (117) スクモシジー・ウーブバル (栄光の輝ける光の子・紫の女 [smug mo gzi brjid 'od bu 'bar]), (118) ニメー・ウーブニョム (平等な太陽の光 [nyi ma'i 'od du snyoms]), (119) ウゼル・ミクナク・ドゥードゥル (魔を教化する黒い光線 [od zer smig nag bdud 'dul]), (120) セルマルナク・ムドゥルマ (黒紅色の光線, ムを教化する [女] [zer dmar nag dmu 'dul ma]), (121) メドン・ロチェンマ (灯明の火, 電光の舌 [を有する] 女 [me sgron glog lce ma]), (122) セルモ・ジャンムク・シウエーキョン (穏和に守護せる深緑の尼僧 [ser mo ljang smug zhi bas skyong]), (123) ウゼル・ツァツエー・セーシチェンドゥル (火花の光線によって地の悪霊を教化する女 [od zer tsha tshas sa'i sri gcan 'dul]), (124) ダクペーブンギ・マルポチェンカムキョン (勇猛な軍隊によって赤いツェンの国を守護する女 [drag po'i dpung gis dmar po btsan khams skyong]), (125) ナミチ・ゲンギャル・ドゥーツィーグードゥブチェン (甘露の成就を有する, 空の女王 [gnam phyi gung rgyal bdud rtsi'i dngos grub can]), (126) ハチ・ゲンギャル・ハセートゥタクチェン (セー神の魔力の徴を持つ, 神の女王 [lha phyi gung rgyal lha gsas mthu rtags can]), (127) イエチ・ゲンギャル・イエシエキ・ドンマチェン (原智の灯明を持つ, イエの女王

〔*ye phyi gung rgyal ye shes kyi sgron ma can*〕, (128) メンチ・ユダン・メンテン  
 プムドゥーマ〔*sman phyi g.yu 'brang sman 'phran 'bum sdud ma*〕, (129) ペル  
 ギ・ハモ・ドゥーシ・シルギイヌン (吉兆なる女神, 四魔を制圧する者〔*dpal  
 gyi lha mo bdud bzhi zil gyis gnon*〕), (130) ドゥーツイク・シュンデン・カル  
 メー・セードゥードゥル〔*dgud tshig gzhung 'dren skar ma'i gza'i bud 'dul*〕, (131)  
 ニセル・セルデン・ニメーロンドゥドゥル〔*nyi zer gsal ldan nyi ma'i slong bdud  
 'dul*〕, (132) ウゼル・ダウエー・ダウエーニヤドゥードゥル (月によって月の  
 ニヤの魔を教化する陽光〔*'od zer zla bas zla ba'i nya bdud 'dul*〕), (133) ムタ  
 ク・グンティン・チュンネーケドソ〔*dmu thag dgung 'phring chung nas skye 'gro  
 gso*〕, (134) トクセル・ウートゥー・バルチューダ・ゲクドゥル (光を放ち障  
 碍〔という〕敵を阻み教化する稲光〔*thog zer 'od 'phros bar chod dgra bgegs '  
 dul*〕), (135) トギラモ・ダクバルマ (激しい光を放つ雷の女神〔*thog gi lha  
 mo drag 'bar ma*〕), (136) ダクポ・トギギエルモ・ドゥクダチェン (龍の声を  
 もつ激しい雷の女神〔*drag po thog gi rgyal mo 'brug sgra can*〕), (137) トダー・  
 マルプー・ヌージンドゥル (雷の赤い矢によって害を与える者たちを教化する  
 [者]〔*thog mda' dmar pos gnod sbyin 'dul*〕), (138) テインサン・チュクモ・  
 ドゥーツィ・チャルベプマ (良雲の女王・甘露の雨を降らす女〔*sprin bzang  
 phyug mo bdu rtsi char 'bebs ma*〕), (139) カンキ・ラモ・トゥモチェ (偉大な  
 魔力をもつ雪の女神〔*gangs kyi lha mo mthu mo che*〕), (140) ユイ・ナブン・  
 テインシャク・トゥルモチェ (トルコ石の群青色の霧・偉大なる神変の索〔*g.yu  
 yi na bun mthing shags 'phrul mo che*〕), (141) シダン・クジーマ (身体から莊  
 嚴な光彩を放つ女〔*gzi mdangs sku brjid ma*〕), (142) シジー・ウーバルマ (威  
 嚴ある光を燃やす女〔*gzi brjid 'od 'bar ma*〕), (143) *od zer phyogs bcur 'phro* (光  
 線を十方に放つ [者]〔*od zer phyogs bcur 'phro*〕), (144) トウルク・シジー・  
 チルヤンキェン (全てをお知りになる栄光の化身〔*sprul sku gzi brjid cir yang  
 mkhyen*〕), (145) ニメーウーセル・ドンメーチョクギ・コルウエームンパジヨ  
 ム (最勝の灯明 [である] 太陽光により輪廻の闇を破壊する [者]〔*nyi ma'i '  
 od zer sgron me'i mchog gis 'khor ba'i mun pa 'joms*〕), (146) トウクジェイ・ニ  
 セルキョン (慈悲の太陽光を広げる [者]〔*thugs rje'i nyi zer rkyong*〕), (147)  
 ドゥーツィ・ギユンドゥ・デイン (絶えず湧き出す甘露〔*bdu rtsi rgyun du  
 sbring*〕), (148) シジー・ツォクキェーマ (栄光の資糧を生み出す女〔*gzi brjid  
 tshogs bskyed ma*〕), (149) トウクラ・ナンシー・イエキェンセル (御心で現



象世界を原初より明澄に知る [者] [thugs la snang srid ye mkhyen gsal]), (150) ペルモ・ドゥクペー・ツォントク・ロクデンワル・チュードゥル (毒の武器である顛倒した導きと障碍を調伏する吉兆なる女 [dpal mo gdug pa'i mtshon thogs log 'dren bar chod 'dul]), (151) イエシエ・ドンメー・ティムク・ムンパセル (原智の灯明により癡の闇を取り除く [女] [ye shes sgron mas gti mug mun pa sel]), (152) トゥクジェ・セルウエー・マゴリクパルトン [thugs rje gsal bas ma go rig par ston], (153) ギェーモ・ギェルチェン・ドゥーキ・カルナム・ジヨム (魔の城を破壊する力強い大女王 [gyad mo rgyal chen bdud kyi mkhar rnams 'joms]), (154) タンモ・クンキェン・ドワ・タブキドゥル (方便によって衆生を教化する, 遍智のタンモ [thang mo kun mhyen 'gro ba thabs kyis 'dul]), (155) セマ・ツォントク・ラメン・ユルレードク [gze ma mtshon thogs lha min g.yul las zlog], (156) ダンタ・ギョクチェー・カムスム・ユーキ・コル [dang khra mgyogs byed khams gsum yud kyis 'khor], (157) デイブ・ドゥルコル・トゥルパ・チルヤントン [bri bu rgu skor sprul pa cir yang ston]

A. 東方の女神 [shar phyogs kyi lha mo]

(158) セルウエー・ドンマチェン (明澄な灯明を有する者 [gsal ba'i sgron ma can]), (159) セルギ・ティクレチェン (光線の精滴を有する者 [zer gyi thig le can]), (160) ウーキ・ラブチェン (光の神の子をもつ者 [od kyi lha bu can]), (161) リンチェン・トルツクチェン (宝珠の鬘をもつ者 [rin chen thor tshugs can]), (162) バルウエー・メチエチェン (燃えさかる炎をもつ者 ['bar ba'i me lce can]), (163) セルウエー・マルメチェン (明澄な [光を放つ] バターランプを有する者 [gsal ba'i mar me can]), (164) ニセルウー・トマ (明澄な陽光を放つ女 [nyi gsal 'od 'phro ma]), (165) ダセル・セルデンマ (明澄な月光を具える女 [zla gsal zer ldan ma]), (166) カルセル・ツォムブチェン (明澄な星の塊を有する者 [skar gsal tshom bu can]), (167) ジャーセル・ドクデンマ (明澄な虹の色を具える女 ['ja' gsal mdog ldan ma])

B. 北方の女神 [byang phyog kyi lha mo]

(168) チューキ・トミーマ (透明で無碍なる女 [phyod kyi thogs med ma]), (169) シュクキ・トクデンマ (強力な力を具えた女 [shugs ki stobs ldan ma]), (170) デクペー・ガムドゥクマ (deggs pa'i rngam sdug ma [deggs pa'i rngam sdug ma]), (171) コルユル・コルロチェン ['khor yul 'khor lo can], (172) ギャダム・

ノルマチェン (交叉する万字を持つ女 [rgya gram bsnol ma can]), (173) チューキ・ドゥーチェーマ (精髓を集める女 [bcud kyi sdud byed ma]), (174) ロンギ・キェーチェーマ [klong gi bskyed byed ma], (175) インキ・ティムチェーマ [dbyings kyi bstim byed ma], (176) カーイ・ニヤムチェーマ [mkha' yis mnyam byed ma], (177) ジクチャク・トンネーマ ['jig chags stong gnas ma])

C. 西方の女神 [nub phyogs kyi lha mo]

(178) ツィーウー・カルマ (精髓の白光 [rtsi'i 'od dkar ma]), (179) メンギ・ドゥーツィマ (薬の甘露 [sman gyi bdud rtsi ma]), (180) ソウエー・チュオマ (癒しの河 [gso ba'i chu bo ma]), (181) ギャツォイ・トプデンマ (大海の力を具えた女 [rgya mtsho'i stobs ldan ma]), (182) デイミク・グコルチェン [bri mig rgu skor can], (183) ルマ・グトウクチェン [lu ma rgu phrugs can], (184) チュオカ・キェーマ (溜池を生み出す河の女 [chu bo rka bskyed ma]), (185) ツデン・ラクディムマ [tsu bran lag 'grims ma], (186) トウクジェイ・テインプンマ (慈悲の雲を堆積せる女 [thugs rje'i sprin dpung ma]), (187) ジンラブ・チャルバマ (加持の雨 [を降らす] 女 [byin rlabs char pa ma])

D. 南方の女神 [lho phyogs kyi lha mo]

(188) サテン・ツイクジンマ (強固なる語を持つ女 [sra brtan tshig 'dzin ma]), (189) グードゥプ・ナツォクマ (様々な成就 [を与える] 女 [dngos grub sna tshogs ma]), (190) リンチェン・テルデンマ (宝珠宝藏を具えた女 [rin chen gter ldan ma]), (191) メンギ・チューデンマ (薬の精要を具えた女 [sman gyi bcud ldan ma]), (192) ツィーズーデンマ (精髓の藏を持つ女 [rtsi'i mdzod ldan ma]), (193) セムチェン・ソデンマ (有情を癒す女 [sems can gso ldan ma]), (194) シェーラブ・ロデンマ (智慧・慧を具えた女 [shes rab blo ldan ma]), (195) メト・ゼーデンマ (美しい花を持つ女 [me tog mdzes ldan ma]), (196) ハモ・テンチェーマ (安定を生み出す女神 [lha mo brtan byed ma]), (197) タムチェー・テンチェー・シヨンヤンマ (全てを安定させるシヨンヤンマ [thams cad brten byed shong yang ma])

E. 下 [方] の女神 ['og gi lha mo]

(198) チルヤンキェン (何でもお知りになる [者] [cir yang mkhyen]), (199) タルパル・ドル (解き放ち解脱する [女] [thar par sgröl])

F. 上 [方] の女神 [steng gi lha mo]

(200) マサムジューメー・ツイクタンダレーデー, カドク・グーメー・カルナク・チェチュンメー, パルーチンペーユム (言説・思惟が無く, 言葉と声を超え, 顕色・実体が無く, 白黒・大小が無い, 彼岸に到った母 [smra bsam brjod med tshig dang sgra las 'das/ kha dog dngos med dkar nag che chung med/ pha rol phyin pa'i yum/])

3. 「未来の100の女神」 [ma byon pa'i lha mo brgya] (「成就者に [与える] 成就の加持力を備えた未来の100の女神」 [ma byon pa'i lha mo brgya grub par bsgrub pa'i byin rlabs can] と呼ばれる [ZM: 166.3-4])

A. 成就の女神 [grub pa'i lha mo]

(201) クンドゥップマ (全てを成就した者 [kun grub ma]), (202) クンシェーマ (全てを知る者 [kun shes ma]), (203) クンデンマ (全てを具えた女 [kun ldan ma]), (204) クンツォクマ (全てが集まる女 [kun 'tshogs ma]), (205) クンタンマ (kun than ma [kun than ma]), (206) クンドウルマ (全てを教化する女 [kun 'dul ma]), (207) クンデンマ (全てを導く女 [kun 'dren ma]), (208) クンゲーマ (全てを喜ばす女 [kun dga' ma]), (209) クンドゥーマ (全てを集める女 [kun bsdud ma]), (210) クンドゥーマ (全てが集聚する女 [kun 'dus ma])

B. [全てに] 広がる女神 [bdal 'pa'i lha mo]

(211) クンキャプマ (全てに遍満する女 [kun khyab ma]), (212) カンデンツォ (御言葉・教導の主 [bka' 'dren gtso]), (213) カイン (強力な音響 [kha 'dbyings]), (214) アカル・デデンマ (安楽を具えた女, 白いア [字] [a dkar bde ldan ma]), (215) ハダク・シュクデンマ (激しく強力なハ [字] をもつ女 [ha drag shugs ldan ma]), (216) リンダク・ダデンマ (陸に響く声をもつ女 [gling grags sgra ldan ma]), (217) ガチェ・ワンゾクマ [nga che dbang rdzogs ma], (218) モラム・シャクトウルモチェ [mo ram shags 'phrul mo che], (219) ラクチョク・ガクザプチェン (密呪をもつ全ての手 [lag cog sngags 'dzab can]), (220) ミイエン・ティンジンチェン (揺動することのない三昧を具える者 [mi yengs ting 'dzin can])

C. 慈悲の女神 [thugs rje'i lha mo]

(221) トウルペーク (化身 [sprul pa'i sku]), (222) セルウェー・チェン (明澄なる眼 [gsal ba'i spyan]), (223) ニョムペー・トウク (均一な御心 [snyoms pa'i thugs]), (224) ニエンペー・ヤン (美しい響き [snyan pa'i dbyangs]), (225) ズトゥルギ・シャブ (神変の足 [rdzu `prul gyi zhabs]), (226) ドゥーツイーチャク (甘露の手 [bdu rtsi'i phyag]), (227) デンペー・タップ (教導の方便 ['dren pa'i thabs]), (228) ドルウェー・ツォ (救済の主 [sgrol ba'i gtso]), (229) チンペーシ [phyn pa'i gzhi], (230) タルペー・ゴ (解脱の門 [thar pa'i sgo])

D. 化現の女神 [sprul pa'i lha mo]

(231) ギュトウル・ダワチェン (幻化網を持つ [者] [sgyu `phrul dra ba can]), (232) タプキ・シャクパチェン (方便の縄をもつ者 [thabs kyi zhags pa can]), (233) トウクジェイ・チャクキュチェン (慈悲の鉤針をもつ者 [thugs rje'i lcags kyu can]), (234) セルウェー・メロンチェン (明澄な鏡をもつ者 [gsal ba'i me long can]), (235) ゼーペー・マジヤチェン (美しい孔雀の羽をもつ者 [mdzes pa'i rma bya can]), (236) ニエンペー・クジュクスン (遠くまで響くカウコウの御言葉 [snyan pa'i khu byung gsung]), (237) ジーペー・シダンチェン (栄光の輝きを具える [女] [brjid pa'i gzi mdangs can]), (238) タルペー・ケラムチェン (解放の梯子の道をもつ者 [thar pa'i skas lam can]), (239) ルンギュー・デーパルボク [lung rgyud des par `bogs], (240) カーギュー・チェバルペル (御言葉の相続を大きく広める [者] [bka' brgyud che bar spel])

E. 加持の女神 [sbyin rlabs kyi lha mo]

(241) チュー・ヨンスタク [chod yongs su grags], (242) タムチエー・ヨンスギュー (一切に普く広がる [女] [thams cad yongs su rgyas]), (243) デワル・トゥンダムドゥブ (安楽に真実の義を成就する [女] [bde bar don dam grub]), (244) ゲーパル・スンラプトン (詳細に教説を説く [者] [rgyas par gsung rab ston]), (245) シウェー・セムチェンドウル (穏和に有情を教化する [者] [zhi bas sems can `dul]), (246) デンペー・ゲーツイクトン (真実の語を説く [者] [bden pa'i nges tshig ston]), (247) マンガ・ガクギューデン (教誨・タントラの導師 [man nga sngags rgyud `dren]), (248) ダクプー・バルチョドウル [drag pos bar cho sgröl], (249) トミー・ニユルドウジョン (無碍・速やかに至る [者] [thogs med myur du byon]), (250) ミクメー・チルヤンセル (縁じることなく

何についても明澄 [なる者] [dmigs med cir yang gsal])

F. 慈愛の女神 [byams pa'i lha mo] sbyin pa'i lha mo

(251) クンラ・プタルセム (全てを [我が] 子のように思う [者] [kun la bu ltar sems]), (252) キェード・スーキゴ (衆生を養育する [者] [skye 'gro gsos kyi gso]), (253) ナンシー・テンラペプ (現象世界を確立する [者] [snang srid gtan la 'bebs]), (254) イエシー・チャラゲー [ye srid cha la 'god], (255) ニエルワ・ギユンドウチュー (地獄の流れを断ち切る [者] [dmyal ba rgyun du gcod]), (256) シェダン・ロンドウシ (怒りの界を鎮める [者] [zhe sdang klong du zhi]), (257) ツァワ・ダンウエードウル (熱を寒によって調伏する [者] [tsha ba grang bas 'dul]), (258) ダンワ・ツァウエードウル (寒を熱によって調伏する [者] [rang ba tsha bas 'dul]), (259) ニツェワナム・デネーニエーバルチエー (孤地獄 [の有情に] 安楽の地を獲得させる [者] [nyi tshes ba rnams bde gnas rnyed par byed]), (260) ニコルワナム・タルパデン (太陽が取り囲む者たちを解脱 [へと] 導く [者] [nyis 'khor ba rnams thar par 'dren])

G. 施しの女神 [sbyin pa'i lha mo]

(261) マチャク・トプデンマ (執着することのない力をもつ女 [ma chags stobs ldan ma]), (262) タブキ・ドゥズィボン (方便によって [心の] 散漫を放じる [者] [thabs kiyis 'du 'dzi spong]), (263) ドゥーペー・ドゥクゲルメー (欲望の苦しみが無い [者] ['dod pa'i sdug bsngal med]), (264) テルウエー・ロデンマ (与える慧をもつ女 [ster ba'i blo ldan ma]), (265) レワ・ドゥースコン (時に [至って] 願いを満たす [者] [re ba dus su skong]), (266) ジンペー・ドゥーチャクドウル (施しによって欲望を調伏する [者] [sbyin pas 'dod chags 'dul]), (267) ツェーメー・ギャチェルギエー (無量の広大なる布施 [tshad med rgya cher 'gyed]), (268) チョクメー・ミクミチエル (方角が無く縁じることのない [者] [phyogs med dmigs mi 'chal]), (269) リクチエー・ニヤムパルニョム (明知を得, 均等で平等 [なる者] [rig byed mnyam par snyoms]), (270) ダクタンシェンメー・チクペーガン (自他無く同一なる状態 [にある者] [bdag dang gzhan med gcig pa'i ngang])

H. 原智の女神 [ye shes kyi lha mo]

(271) セルデン・トミーマ (明澄にして無碍なる女 [gsal ldan thogs med ma]),



(272) リクデン・ロギユマ (rig ldan glog 'gyu ma [rig ldan glog 'gyu ma]), (273) ロデン・ナンシータ (賢明なる鮮やかな現象世界 [blo ldan snang srid bkra]), (274) タムチェー・ギユマルシー (全てを幻と見る [者] [thams cad sgyu mar gzigs]), (275) ドンメー・ムンパジヨム (灯明によって闇を破壊する [者] [sgron mas mun pa 'joms]), (276) ドゥーツイー・ドゥーパコン (甘露によって望みを満たす [者] [bdu rtsis 'dod pa skong]), (277) メンギ・ネーナムドゥル (薬によって諸々の病を調伏する [者] [sman gyis nad rnams 'dul]), (278) ツエイ・チュンナムケー (頂より小さき者たちを生起する [者] [rtse yis chung rnams bskyed]), (279) ニマ・グトゥクマ [nyi ma rgu phrugs ma], (280) ウゼール・プムタクマ (十万の光線 [を放つ] 女 [od zer 'bum phrag ma])

I. 広大なる女神 [yangs pa'i lha mo]

(281) ションウエー・ヌーデンマ (窪んだ器をもつ女 [shong ba'i snod ldan ma]), (282) チェウエー・シデンマ (大いなる基体をもつ女 [che ba'i gzhi ldan ma]), (283) キューペー・シユクデンマ (生起する力を持つ女 [bskyed pa'i shugs ldan ma]), (284) ドゥーペー・ワンデンマ (集める力をもつ女 [sdud pa'i dbang ldan ma]), (285) ネーペー・チューデンマ (住処の精要をもつ女 [gnas pa'i bcud ldan ma]), (286) デクペー・トプデンマ (支える力をもつ女 ['degs pa'i stobs ldan ma]), (287) ニヨムペー・ロデンマ (平等な慧をもつ女 [snyoms pa'i blo ldan ma]), (288) ドウエー・ラムデンマ ['gro ba'i lam ldan ma], (289) チンペー・サデンマ [phyin pa'i sa ldan ma], (290) ニヤムペー・トゥクデンマ (平等な御心をもつ女 [mnyam pa'i thugs ldan ma])

J. 寂靜なる女神 [zhi ba'i lha mo]

(291) ミゴン・ニヤムペーチャラネー (思惟なき平等なる状態に住する [者] [mi dgongs mnyam pa'i cha la gnas]), (292) ミトゥル・デルペーシ (変幻することなく [全てに] 広がる基体 [mi sprul bdal pa'i gzhi]), (293) ミジョン・インナギュー (現れたことのない広がり広がる [者] [mi byon dbyings na rgyas]), (294) ミゼー・ティクレチク (尽きることのない独一なる精滴 [mi 'dzad thig le gcig]), (295) ミヨ・サムテンゴム (不動なる禪定を實踐する [者] [mi g.yo bsam gtan sgom]), (296) ミイエン・ロンナネー (揺動なき界に住する [者] [mi g.yengs klong na gnas]), (297) ミミク・トゥンダムトク (縁じることなく真理を領悟した [者] [mi dmigs don dam rtogs]), (298) ミチェー・

シワルジヨム（作為することなく寂靜なるままに置く〔者〕〔mi 'byed zhi bar ' jog〕）、(299) トギュー・シワルゼー（トギュー〔という教法〕を寂靜なるままに行う〔者〕〔gto rgyud zhi bar mdzad〕）、(300) マンギュー・シワルスン（マンギュー〔という教法〕を寂靜なるままに説く〔者〕〔smrang rgyud zhi bar gsung〕）

## 註

- 1) フランス国立ギメ東洋美術館 (Le musée Guimet) 所蔵のシェンラブ伝を描いたタンカについて図像解説を行っている (Per Kvaerne, "Peintures tibetaïnes de la vie de sTon-pa-gçen-rab." *Arts asiatiques* 41, 1986, pp. 36-81.)。
- 2) 18世紀に制作された木版画に描かれるシェンラブ伝について、その図像解説を試みている (Samten G. Karmay, *Feast of the morning light: the eighteenth century wood-engravings of Shenrab's life-stories and the Bon Canon from Gyalrong*, (Senri Ethnological Reports 57 Bon Studies 9), National Museum of Ethnology, 2005, pp. 173-259)。
- 3) レプゴン〔reb gong〕はチベットの歴史的地域名で、その範囲は、現在の中国・青海省の黄南藏族自治州の同仁・尖扎・沢庫・河南蒙古族自治県の四県を中核とし、隣接する青海省海東地区の化隆盛回族自治县、撒拉回族自治县、青海省海南藏族自治州の同徳県、甘肅省甘南藏族自治州の西部などに相当する。
- 4) 「ボンの六大氏族 (系統)」〔bon gyi gdung rgyud che drug〕と言ひ、①シェン〔gshen〕氏、②ドゥ〔bru〕氏、③シュ〔zhu〕氏、④パ〔spa〕氏、⑤メウ〔rme'u〕氏、⑥キユン〔khyung〕氏の六氏族を言う。
- 5) ポンギャ寺が位置するボンギャ村には8400人ほどの人々——生産業・農業に従事する約700世帯と約600世帯の遊牧民 (1996年の調査当時)——が生活しており、同寺院は彼らの精神生活を支える重要な役割を果たしている。ボンギャ寺の解説については、Samten G. Karmay, Yasuhiko Nagano (eds.), *A survey of Bonpo monasteries and temples in Tibet and the Himalaya* (Senri ethnological reports 38, Bon studies 7), National Museum of Ethnology, 2003 (pp. 284-289) を参照。
- 6) シェンという語は、7～9世紀に成立した古いチベット語文献やボン教徒の歴史書の中に、司祭階級に属する人物の名として登場するが、その職務については現在のところ仔細不明である。また、ラブには〔rab〕と〔rabs〕という二種のスペルがあり、前者は「最高・最上の」、後者は「系統・世代」を意味する。そして、ミボ〔mi bo〕は「最高の人」或いは「人の王」 (*A lexicon of Zhangzhung and Bonpo terms* (Senri Ethnological Report 76, Bon Studies 11), compiled by Pasar Tsultrim Tenzin, Changru Tritsuk Namdak Nyima, Gatsa Lodro Rabsal. edited by Yasuhiko Nagano, Samten G. Karmay. translated by Heather Stoddard. National Museum of Ethnology, 2008, p. 182) を、チェ〔che〕は「大きな・偉大な」を意味する。従って、トンパ・シェンラブ・ミボチェという名は、「教師、最高のシェン (或いはシェンという司祭階級の系統に属する)、偉大なる人の王」という意に解釈することができる。しかし後述するように、代表的なシェンラブ伝の一つである『セルミク』〔ZM: 182.21-183.4〕には、これとはやや異なった解釈が示されており、その名の意味については依然として課題が残っている。
- 7) 'go ba dge bshes bstan 'dzin 'brug grags, *theg chen sangs rgyas g.yung drung bon gyi ngo sprod blo gsar sgo 'byed, mi rigs dpe skrun khang* (郭哇・格西且增朱扎 著『大乘觉悟道雍仲苯教常识』, 民族出版社), 1999, p. 1.
- 8) John Myrdhin Reynolds, *The Oral Tradition from Zhang Zhung: An Introduction to the Bonpo Dzogchen Teachings of the Oral Tradition from Zhang Zhung known as the Zhang-zhung snyan rgyud*, Vajra Publications, 2005, p. 5., Per Kvaerne, "A Chronological Table of the Bon-po: The bsTan rcsis of Nyi-ma bstan-'jin," in *Acta Orientalia* XXXIII, Copenhagen, 1971, pp. 205-282. 一方、光鷲督はシェンラブ・ミボの誕生年を紀元前5世紀頃としている (光鷲督『ボン教・ラマ教史料による吐蕃の研究』, 成文堂, 1985年, 5頁)。

- 9) ポン教徒の多くは、シェンラブ・ミボの生誕地であるオルモルンリンをタジク〔stag gzig〕に所在した聖地としており、これは西洋の学者達によってペルシャに比定されている。しかし、チベットにはオルモルンリンという地名に似たブンモ・ルンリン〔bon mo lung ring〕という地名が実在していることや、ボン教の聖典には、この土地が、世界が焼尽される時、空高く飛翔して天界の聖なる国（原初から覚醒した世界〔srid pa ye sangs〕）と合致する聖なる国土であるなどとして神話化されていることなどから、この地の所在については議論が錯綜している。シェンラブの生誕地がペルシャに所在したか否かは定かでないが、ボン教の宇宙観にイランの宗教伝統におけるそれとの類似性が認められるのは確かである。クリストファー・ベックウィズ（Christopher Beckwith）は、ボン教の‘ボン’が、中期イラン諸語の一つであるソグド語で‘ダルマ’を意味する bwn から借用されたものであるとしている。bwn は宇宙創世神話を語るゾロアスター教の書物『ブンダヒシュン』（Bundahishn）にも散見される語であり、こうしたことからベックウィズは、シャンシュン語の形成過程において中世イラン語が影響を与えた可能性を指摘している（Christopher Beckwith, *The Tibetan Empire in Central Asia*, Princeton University Press, 1987, pp. 3–36.）。ソグド語を母語とするソグド人は、現在のウズベキスタン・ソグディアナ地方を拠点としながら、シルクロードのオアシス都市に広く集落を形成し、他民族との大規模な交易のネットワークを持っていたとされる。彼らの交易はシルクロードを通してチベットの北東部まで至っており、またソグド語で書かれた仏教経典も発見されている。こうしたことから、ソグド人と古代シャンシュン王国が嘗て交流を持っていた可能性は十分に考えられる。尚、古代シャンシュン王国成立に関する研究には、ツェリン・タル（Tshering Thar, “The Ancient Zhan Zhung Civilization,” in *Tibet Studies: Journal of the Tibetan Academy of Social Sciences*, 1989, pp. 90–104.）等の研究がある。
- 10) サムテン・カルメイ（Samten G.Karmay）は、オルモルンリンはシャンシュンに実在した地名であったが、10世紀初頭に始まったチベット仏教の翻訳運動の興起に刺激されたボン教徒たちが、自らの伝統を再検討する過程のなかで、オルモルンリンをチベット人が古来から文明の地として敬服するタジク（ペルシャ）に実在した土地であると解釈するようになったと指摘している（Samten G.Karmay, “A General introduction to the History and Doctrines of Bon,” *The Arrow and the Spindle: Studies in History, Myth, Rituals and Beliefs in Tibet*, Mandala Book Point, 1998, p. 107.）。
- 11) shar rdza bkra shis rgyal mtshan, rdo rje rgyal po (ed.) *legs bshad rin po che'i gter mdzod*, mi rigs dpe skrun khang（夏察・扎西却導著、多吉垓博編『西藏本教源流』民族出版社）、1985, p. 54.
- 12) thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma, *thu'u bkwan grub mtha'*, kan su'u mi rigs dpar khang（图官・洛桑却吉尼玛著『宗教源流史』甘肃民族出版社）、1984, pp. 412–413.
- 13) シェンラブが孔子の娘を娶ったとされる逸話は『セルミク』の第13章に見える〔ZM: 534-592〕。同章の記述については、サムテン・カルメイによる分析がある（Samten G.Karmay, “The Interview between Phyva Keng tse lan-med and Confucius,” in *The Arrow and the Spindle: Studies in History, Myth, Rituals and Beliefs in Tibet*, Mandala Book Point, 1998, pp. 169–189.）。
- 14) shar rdza bkra shis rgyal mtshan, op.cit., pp. 60–61.
- 15) P.T. 1068, 1134/2, 1136, 1194, 1289 に、シェンラブ・ミウチェ〔gshen rab miu che〕という名が確認できる。
- 16)〔yas stag〕(thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma, op.cit., p. 380, l.17) を〔yas stags〕の誤記と解釈する。〔yas stags〕は神や魔に報酬として贈られるトルマのことで、ボン教の儀式で用いられる。
- 17)〔rgan kyi lha〕。恐らく先祖のことを指すと思われる。
- 18) thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma, op.cit., pp. 380–383.
- 19) Per Kvaerne, *A Chronological Table of the Bon po: The Bstan rtsis of Nyi ma bstan 'dzin*, Acta Orientalia, vol. 33, 1971 (pp. 225–6, pp. 256–8). 尚、『ドドワー』は後述する『シジー』と同様に、埋蔵経発掘者によって発見された埋蔵経典〔gter ma〕に属する。
- 20)『シジー』には、デイヴィッド・スネルグローブによるその教義部分の抜粋・翻訳がある（David L. Snellgrove, *The nine ways of bon : excerpts from gZi-brjid*, Oxford University Press, 1967.）。
- 21) このように付属文書では、中央の主尊から見た位置で左右・上下が定められている。
- 22) この記述からも分かるように、このタンカの解説者はシェンラブの誕生地であるオルモルンリンを、シャンシュンに在った聖地と見なしている。
- 23) パラモンの子、セルキャブ・ウーデン（後述）がシェンラブの相を調べている様子は、主

- 尊トンバ・シェンラブの左上に描かれており、右側の図には描かれていない。左〔g.yon〕の誤りと思われる（前掲註21も参照）。
- 24) この付属文書を記した際に筆者が所依とした典籍を指すと思われるが、その所在については現在のところ仔細不明。Thangka No 1-4, 7の付属文書には〔mdzad bcu〕, Thangka No 5, 9, 11, 12の付属文書には〔mdzad bstod〕, Thangka No 6, 8, 10の付属文書には〔mdzad bcu bstod pa〕とあり、典籍名が一定しない。何れもシェンラブの偉業を称讃する同一の典籍を指していると思われる。本稿ではこれら全てを『御事績の称讃』という訳語で統一した。
- 25) 四大部族のうち、特にム部族とトン部族は古くから交流を持っていたとされ、ボン教系の文献や『ラン・ポティセル』と呼ばれる古い伝承には、ム部族と、トン部族の一派であるピャー〔phywa〕部族の通婚が、概算で2, 3世紀頃から始まっていたことをしめす系図が残されている。ム部族と通婚関係にあったピャー部族は、3, 4世紀以降に徐々に東遷し、東チベットに王国を建てる。この国の王族の一派は、6世紀頃から中央チベットを拠点として次第に勢力を増し、7世紀には彼らの末裔であるソンツェン・ガンポ〔srong btsan sgampo, 581-649〕王によって、初めてチベット全域の統一が果たされることになる。これが吐蕃（とばん）と呼ばれるチベットの古代王国の成立である。ソンツェン・ガンポ王の時代、吐蕃王国は覇権を求めて中央アジア一帯を転戦し、上ビルマの一部を征服、640年にはネパールを占拠、更に643年にはボン教が栄えていたシャンシュン王国を併合したとされる（山口瑞鳳『チベット（下）』東京大学出版会、1987、4-5頁。W.D. シャカツパ著、三浦順子訳『チベット政治史』亜細亜大学アジア研究所、1992、33頁）。
- 26) セルワは“存在の少年”〔srid pa'i khye'u chung〕とも呼ばれる。
- 27) 本稿では〔ye shes〕を原智、〔blo gros〕を智慧と訳出した。
- 28) “シーバ”は“存在する者”の意であり、現象世界に顕れる神々の一種を指す。『セルミク』に依れば、「シーバの化身とは、9人の子息〔pho dgu〕と9人の子女〔mo dgu〕、18の男〔pho bco brgyad〕と18人の女〔mo bco brgyad〕、それ以外にも多くの慈悲の化身が居る。彼らは有情を破壊することも形成することもでき、苦しみを喜びに変え、無いものを有るものにしたたり、黒いものを白いものにすることができる。」とされる。
- 29) 〔gsas mkhar〕。本来は“セー”〔gsas〕という神々が住む城を意味する。人が住む城・砦〔mkhar〕と区別するために、本稿ではこれを「神殿」と訳出した。
- 30) セルキャブ・ウーデンは「徴（を調べる）者」〔ltas mkhan〕とも呼ばれ、王子の誕生や妃の輿入れなどの際に、彼らの「相」〔mtshan〕を見る人物として登場する。
- 31) 〔gshang〕〔ZM: 63.20〕。揺らして鳴らす鈴に似た楽器で、ボン教の様々な儀式で用いられる。
- 32) 「三部のイェンの界」〔g.yen khams sde gsum〕のうち、「上のイェン」〔yar g.yen〕の領域に住む低級の神々・精霊を指す。『セルミク』〔ZM: 45.3-5〕に依れば、これらは鬼神〔mi ma yin〕であり、①ベル〔dbal〕, ②ヨク〔yogs〕, ③ティン〔khrin〕の三つ、④ニエル〔gnyer〕, ⑤オ〔'o〕, ⑥ツァム〔mtshams〕の三つ、⑦ム〔dmu〕, ⑧ドゥー〔bdud〕, ⑨ツェン〔btsan〕の三つ、⑩シー〔sri〕, ⑪クー〔skos〕, ⑫チャ〔phywa〕の三つ、そして⑬ニェンポラ〔gnyen po lha〕の13から成る。また後述するように、これらのイェンは、強欲な王子トブ・ドゥーデが阿修羅の世界に転生した際、「虚空の界より〔降臨した〕阿修羅」〔nam mkha'i khams nas lha ma yin〕として姿を現し、トブ・ドゥーデに罰を与えたともされる〔ZM: 103.12〕。
- 33) このように『セルミク』では、セルキャブが王子の相を調べた直後に、セルワが王位に就いたとしているが、『シジー』では後述する林苑での遊戯の期間を経た後に、王位に就いたとしている。
- 34) 『セルミク』には、この王子にトンバ・シェンラブ・ミボという名前をつけた人物に関する明確な記述が見られない。一方、『シジー』には、「相〔を見る〕者であるバラモンの子、セルキャブ・ウーデンが相を調べて、相が甚だ良好であると決定したのち、お名前をトンバ・シェンラブ・ミボ、一切に完全に勝利した者、と名付けた。」とある〔ZJ: vol. 2, 178.9-11〕。
- 35) シェンラブが少年期に園に遊んだとする記述は『セルミク』には見られない。従って、5A・5Bの解説は『シジー』〔ZJ: vol. 3, 1-169〕の記述に依った。
- 36) 前掲註24参照。
- 37) ボン教の中心教理の一つである大究竟〔rdzogs chen〕の根本典籍群を構成する「ブンセー〔=ボン教における導師・ラマ〕の口伝によるボンの教え」〔dpon gsas man ngag lung gi bon〕を指すと思われる。後掲註69を参照。
- 38) 後述するように、これらの鬼神は、強欲な王子トブ・ドゥーデが死後、阿修羅の世界に転

- 生した際に、彼に報復を加えた者たちとして記されているが、そこでは「虚空の界より〔降臨した〕阿修羅」〔nam mkha'i khams nas lha ma yin〕ともされている〔ZM: 103.12〕。
- 39) ポン教の易学・占星術・儀礼・病の診断等に関する教えである「存在の流れ・黒い河のボン」〔chab nag srid pa rgyud kyi bon〕を指すと思われる（後掲註 69 を参照）。
- 40) ポン教における密教・真言の教法である「荒々しい真言・白い河のボン」〔chab dkar drag po sngags kyi bon〕を指すと思われる（後掲註 69 を参照）。
- 41) 〔ljang lo〕〔ZM: 63.10〕は〔lcang lo〕の誤記、或いは異体と解した。
- 42) シャンポ〔zhang po〕は「母方の叔伯父」を意味する。母方の叔伯父の存在はボン教の歴史を語る上で重要であり、8世紀の古代チベット（吐蕃）王国の時代には、チベット王のシャンポたちが要職を得て、実質的な権力を掌握していたとされており、彼らの多くがボン教徒であったとも伝えられる。
- 43) 既にみたようにシェンラブは天から降臨した神的存在とされる一方で、ム族の王子という世俗的な地位をもつ存在として表象される。シェンラブをム族の何代目の王と見做すかということについては、典籍によって違いがある。例えば『偉大なるガルダの飛翔』〔khyung chen lding ba〕ではシェンラブを20代目のム王とするが、『根本タントラ・太陽の灯明』〔rtsa rgyud nyi sgron〕では8代目の王としている（nam mkha'i nor bu, *zhang bod kyi lo rgyus ti se'i 'od, krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang* 〈南喀准布著『古代象雄粹吐蕃史』中国藏学出版社, 1996, pp. 47-49〕）。
- 44) 〔rgyas pa 'bum gyi don〕〔ZM: 66.14-5〕を〔rgyas pa 'bum gyi bon〕と解した。前者は「広大な十万の義」の意である。「十万の膨大なボンへの教え」は、ボン教における般若乗〔phar phyin theg pa〕の典籍群を構成する「ベンユルの十万の膨大なボンへの教え」〔'phan yul rgyas pa 'bum gyi bon〕を指すと思われる。
- 45) 〔mtsho mu li stong ldan〕〔ZM: 66.19〕は〔mtsho mu le stong ldan〕の誤記、或いは異体と判断した（cf. 〔ZM: 16.6〕）。「mu li」は「紅い風・暴風」、〔mu le〕は「青湖」の意である（*A lexicon of Zhangzhung and Bonpo terms*, op.cit., p. 189）。
- 46) 〔zla ba nya gsum〕〔ZM: 66.20〕。ニャはチベットの伝統暦学では十二宮2月を意味するが、ボン教の暦学との対応関係は不明。尚、この後に続く「白の時」〔dkar ba'i dus〕・「赤の時」〔dmar ba'i dus〕・「青の時」〔sngo ba'i dus〕についても現在のところ仔細不明である。
- 47) シェンラブの身・口・意の教えを意味する。『セルミク』には、シェンラブがオルモルンリンに集まった弟子たちに対し、「御身体によって教化される者たちには、説示〔bstan pa〕という身体の壺〔sku'i pe'u tse〕を示した。御言葉によって教化される者たちには、読誦〔bsgrag pa〕という語の壺〔gsung gi pe'u tse〕を示した。御心によって教化される者たちには、修行〔bsgrub pa〕という御心の壺〔thugs kyi pe'u tse〕を示した」〔ZM: 68.3-6〕とある。
- 48) 〔grangs'dzin dbyings spungs〕。チベット語として解せば「数をかぞえる広がりへの堆積」となるが、〔spungs〕には「道を示す師」という意味がある（*A lexicon of Zhangzhung and Bonpo terms*, op.cit., p. 146）ため、ここでは「数をかぞえる広がりへの師」と訳出した。
- 49) 前掲註 24 参照。
- 50) シーパ・サンポ・ブムティ〔srid pa sangs po 'bum khri〕〔ZM: 119.1-2〕とも呼ばれる。ボン教の「四つの主要な善逝（四如来）」〔bder gsehgs gtso bzhi〕（①サティク・エルサン〔sa trig er sangs〕、②シェンハ・ウーカル〔gshen lha 'od dkar〕、③サンポ・ブムティ〔sangs po 'bum khri〕、④トンパ・シェンラブ〔ston pa gshen rab〕）の一つに数えられる（*A lexicon of Zhangzhung and Bonpo terms*, op.cit., p. 120）。
- 51) “トルコ石の鬘を有する意の少年”〔yid kyi khye'u chung g.yu'i zur phud can〕は“鬘を有する少年”〔khye'u chung zur phud can〕〔ZM: 69.11〕、“如意の鬘を有する意の少年”〔yi kyi khye'u chung yid bzhin gyi zur phud can〕〔ZM: 167.11〕、“阿闍梨・永遠の勝者ツクシェン”〔slob spon g.yung drung gtsug gshen rgyal ba〕〔ZM: 135.5〕等とも呼ばれる。シェンラブ伝を描くタンカでは、青い龍馬〔'brug rta sngon po〕に跨った姿で描かれることが多い。
- 52) 「ト」〔gto〕は有害な諸力を遠ざける目的で魔に供物を捧げる一連の儀式を指す。
- 53) このようにボン教では、“壺”〔pe'u tse〕という語が、シェンラブの教説そのもの、或いはシェンラブの教説が収納された箱という意味を持つことがある。
- 54) 〔ZM: 89.1〕には、ダンワ・ムゾン城〔mkhar dang ba dmu rdzong〕ともある。
- 55) 付属文書にはトジェ・ティキヨン〔gto rje khri skyong〕とある。
- 56) 〔mkhar the'u〕〔ZM: 74.20〕。小槌の一種を指すと思われるが仔細不明。
- 57) 易学・占星術・儀礼・病の診断等に関するボンへの教説を説く「存在の流れ・黒い河のボン」



- [chab nag srid pa rgyud kyi bon] を指すと思われる（後掲註 69 参照）。既に見たように、シェンラブは中の能力（中の機根 [dbang po 'bring]）を有する“存在のシェン”と“顕現のシェン”たちに、この教えを説いたとされる（Thangka N° 2, 2B）。尚、トブ・ドゥーデにこの教説を説いた時、シェンラブは3歳であったとされる [ZM: 77.5]。
- 58) ギャルボン・トゥールカを指す。『セルミク』 [ZM: 16.19] を参照。
- 59) ['byung ba'i zhal che ba lnga] [ZM: 78.13-14] は ['byung ba'i zhal lce ba lnga] の誤記、或いは異体と解した。
- 60) Thangka N° 3 の 3B 及び 3C には4本足のラバが描かれているように見える。このように『セルミク』の記述とタンカの図像には屢々齟齬が認められる。
- 61) 『セルミク』には心的な汚れが浄化されたことによって人々の肌が白くなったというエピソード [ZM: 124.1-2] や、欲深い人間を「黒い人」[mi nag po] [ZM: 130.6-12] と表現する逸話が見られる。
- 62) [gtor ma]。トルマは穀物の粉やバター等を用いて様々に造形された供物の総称で、供物として神々に捧げられる他、実際の血肉の代わりに用いて魔をおびき寄せる餌としても使用される。
- 63) 「様々なヤタを身代わりとして捧げた」[ZM: 89.28]。ここで言われるヤタ [ya stags] とは、彩色された糸が放射状に編み込まれたナムカ [nam mkha'] と呼ばれる十字架状の儀式の道具を指している。また、「身代わり」[glud] として捧げるというのは、ヤタを実際の血肉の「代替物」として魔（時には神々）に捧げることによって、除災招福の果を得る手段とすることを意味する。この種の「身代わり」を用いて行われる儀礼には様々なものがあるが、その一つである「死を欺く」['chi bslu] と呼ばれる延命儀礼については、拙稿「チベット人の死生観——「死を欺く」儀式と三つの生命」（『死生学研究』東京大学人文社会系研究科、2003年、pp. 56-73）を参照。
- 64) 五つの大界 [klong chen po lnga] とは、①ボンそのもの・永遠の界 [bon nyid g.yung drun gi klong], ②ボンそのもの・原智の界 [bon nyid ye shes kyi klong], ③ボンそのもの・虚空の界 [bon nyid nam mkha'i klong], ④ボンそのもの・元素の界 [bon nyid 'byung ba'i klong], ⑤ボンそのもの・存在の界 [bon nyid srid pa'i klong] の五つを言う [ZM: 91.3-4]。
- 65) 「ボンそのもの」[bon nyid] は、ボン教教理における真理そのもの、或いは真理のあり方を指し、仏教における「法性」[chos nyid] に相当する。
- 66) [mdze nad]。ハンセン病を意味する。
- 67) 前掲註 24 参照。
- 68) 不明。『セルミク』 [ZM: 115] には、シェンラブが光を放ったところ、四方と中央から5人の神と5人のボン教徒が姿を現したという記述があるのみで、5人のシェンに関する詳しい記述は見られない。
- 69) 「四門五藏」[sgo bzhi mdzod lnga] とも言う。ボン教の中心教義の一である大究竟 [rdzogs chen] の根本典籍群を構成する①「ブンセー [=ボン教における導師・ラマ] の口伝によるボンの教え」[dpon gzas man ngag lung gi bon], 易学・占星術・儀礼・病の診断等に関する教えである②「存在の流れ・黒い河のボン」[chab nag srid pa rgyud kyi bon], ボン教における密教・真言の教えである③「荒々しい真言・白い河のボン」[chab dkar drag po sngags kyi bon], ボン教における般若乗 [phar phyin theg pa] の根本典籍群を構成する④「ペンユルの十万の膨大なボンの教え」['phan yul rgyas pa 'bum gyi bon] という四種の教理（これらが「四門」[sgo bzhi] と呼ばれる）に、「藏」[mdzod], 即ち、世界や存在の起源・破壊について説く⑤「頂点・一般に流れる宝蔵のボン」[mtho thog spyi rgyud mdzod kyi bon] を加えた五つの教理を指す (A lexicon of Zhangzhung and Bonpo terms, op. cit., p. 51)。
- 70) 前掲註 53 参照。
- 71) 前掲註 31 参照。
- 72) この王妃の名前についてはグリーンマ ['gu ling ma, ghu ling ma] の他に、グリーンマティ ['gu ling ma ti], グリンマティン [ghu ling ma ting] 等、幾つかの異なった表記がみられる。本稿ではグリーンマで統一した。
- 73) ベル・クヴェルネは、この逸話と、ポティファルの妻に誘惑されたヨセフが、それを退けて捕らえられたという『旧約聖書』（創世記 39 章）の物語との類似性を指摘している (Per Kvaerne, "Tonpa Shenrab Miwo, Founder of the Bon Religion," in: Samten G. Karmay and Jeff Watt, eds., *BON the Magic Word, The Indigenous Religion of Tibet*, Philip Wilson Publishers, 2007, p. 86, and "A Preliminary Study of Chapter VI of the Gzer-mig," in: Michael Aris and Aung San suu Kyi,

eds., *Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson: Proceedings of the International Seminar on Tibetan Studies*, Oxford, 1970, pp. 185–91)。

- 74) 前掲註 62 参照。
- 75) 前掲註 52 参照。
- 76) 「中国のコンツェという幻術の王」の意であり、孔子を指す。孔子とシェンラブの出会い  
は、Thangka N° 9 に描かれている。
- 77) 前掲註 24 参照。
- 78) ギャルメー [rgyal med] と呼ばれる [ZM: 167.6]。
- 79) [phywa kha rje thang po] は、「[シェンラブの] 父、ギャルブン・トゥーカルの母方のおじ」  
[yab rgyal bon thod dkar gyi zhang po] であるとされる [ZM: 176.14]。シャムポについては、  
前掲註 42 参照。
- 80) [mu rgyal] は「シェンラブの父祖」[gshen rag kyi yab mes] とされる [ZM: 176.14]。シェ  
ンラブとム族の関係については、前掲註 43 参照。
- 81) ムチョ・デムドゥクは、[チャの主であるタンポの娘、チャサ・グンドゥクとの間に] 生  
まれた子である (*A lexicon of Zhangzhung and Bonpo terms*, op. cit., p. 185)。
- 82) 原文 [kong za 'phrul lcam] は [kong za khri lcam] の誤記と判断した。
- 83) 前掲註 24 参照。
- 84) [mda' gang ba] [ZM: 183.18]。“ダー”は長さの単位。1 ダーは 1 本の矢の長さを指す。
- 85) 例えばインド仏教の導入に尽力したティソン・デツェン王時代の王室の様子を描いた『バ  
シェ』等の史料には、王のシャンポたちの多くがボン教徒であり、王が推進するインド仏教  
の導入に反対したとされる記述が見える。古代チベット (吐蕃) 王室がインド仏教の導入に  
動いた経緯と、ボン教徒たちがこれに反発した様子については、拙稿「神の国、人の国—  
古代チベットにおける仏教導入の物語」(『宗教史とは何か(上)』, リトン, 2008 年, pp. 305  
–345) を参照。
- 86) [ZM: 35.10] では [tsha]。
- 87) [ZM: 35.10] では [gshen yongs]。
- 88) [ZM: 35.8] には無い。
- 89) [ZM: 35.9] では [khro]。
- 90) [ZM: 35.9] では [bo]。
- 91) [ZM: 61.1] では [phywa]。
- 92) [ZM: 61.4] では [ye'u]。
- 93) [ZM: 44.20] では [tsho]。
- 94) [ZM: 45.1] では [the lu]。
- 95) [ZM: 61.6] では [ligs]。
- 96) [ZM: 35.19-20] では [skar bon gdangs bkra]。
- 97) [ZM: 35.20] では [kung]。
- 98) [ZM: 35.20-21] では [dal bon dbu dkar]。
- 99) [ZM: 35.21] では [lo bon gto chen]。
- 100) [ZM: 36.1] では [rdzi bon ngang drug]。
- 101) [ZM: 36.4] では [grol]。
- 102) [ZM: 36.4] では [bong]。
- 103) [ZM: 36.5] では [ye]。
- 104) [ZM: 36.6] では [glu], [ZM: 48.9] では [glung]。

